

此表紙の圖案は軍外交顧問加福法學士の意匠に成り、同氏が彼の九連城總攻撃の當日我軍司令部の所在地にありて親しく寫生せしものに係る、左に義州統軍亭を控へ右に鴨綠江本流を隔て、虎山と對し、遙かに滿洲の連山を雲烟模糊の間に望む、藤園花の爛熳と吹き亂れたる處則ち我軍元化洞の陣地なり。



84  
2311

來原小巒著

黑木軍百話

東京 博文館藏版



博文館寄贈本



相懸

宗示之極本之極

而心之相見殊之

性中多性之相極

以音形之極或入

中其先之書也

之如心之性之

三子以心之性也

為極

身亦受其極

陸軍大將黒木為楨閣下手東



來原君陣中に在りて近ころ新に黒木軍百  
話と題せる一冊子を著はし余に序を乞は  
る乃ち攬て之を閲するに我第一軍が出師  
以後に於ける行動の順序に依り戦況逸事  
等陣中著名の事實を綜合叙述すること簡  
明にして且要領を得たる彼の從來坊間  
に行はるゝ從軍記などとは自から其撰を異  
にせるものあるを覺ゆ蓋し此書を讀む人



にして其趣味以外に於て多少の裨益する所あらん乎。雷に著者の幸福のみに非らざるべし。仍て一言を卷首に題す。

明治三十八年八月初旬於滿洲

陸軍少將 藤井茂太

### 黒木軍百話自序

從軍英國武官ハミルトン中將。本國の命に依り將に歸國の途に就かんとするや。我軍司令部は特に祖導の宴を陣中に張り。以て名譽ある友國武官の行を壯にしたり。席上渠は黒木大將の別辭に對し。謝意を表して曰く。

黒木閣下、久邇宮殿下、及第一軍司令部將校各位。

本日は小官の爲送別の宴會を設けられ、今又司令官閣下より丁重なる別辭を辱ふす。小官が如此光榮を有せるは、畢竟第一軍に屬するを得し結果なり。

第一軍は其名に於て第一たるのみならず、實質上幾多の點に於て第一たり。軍は陸上第一に戰鬪をなし、最も長距離の進軍



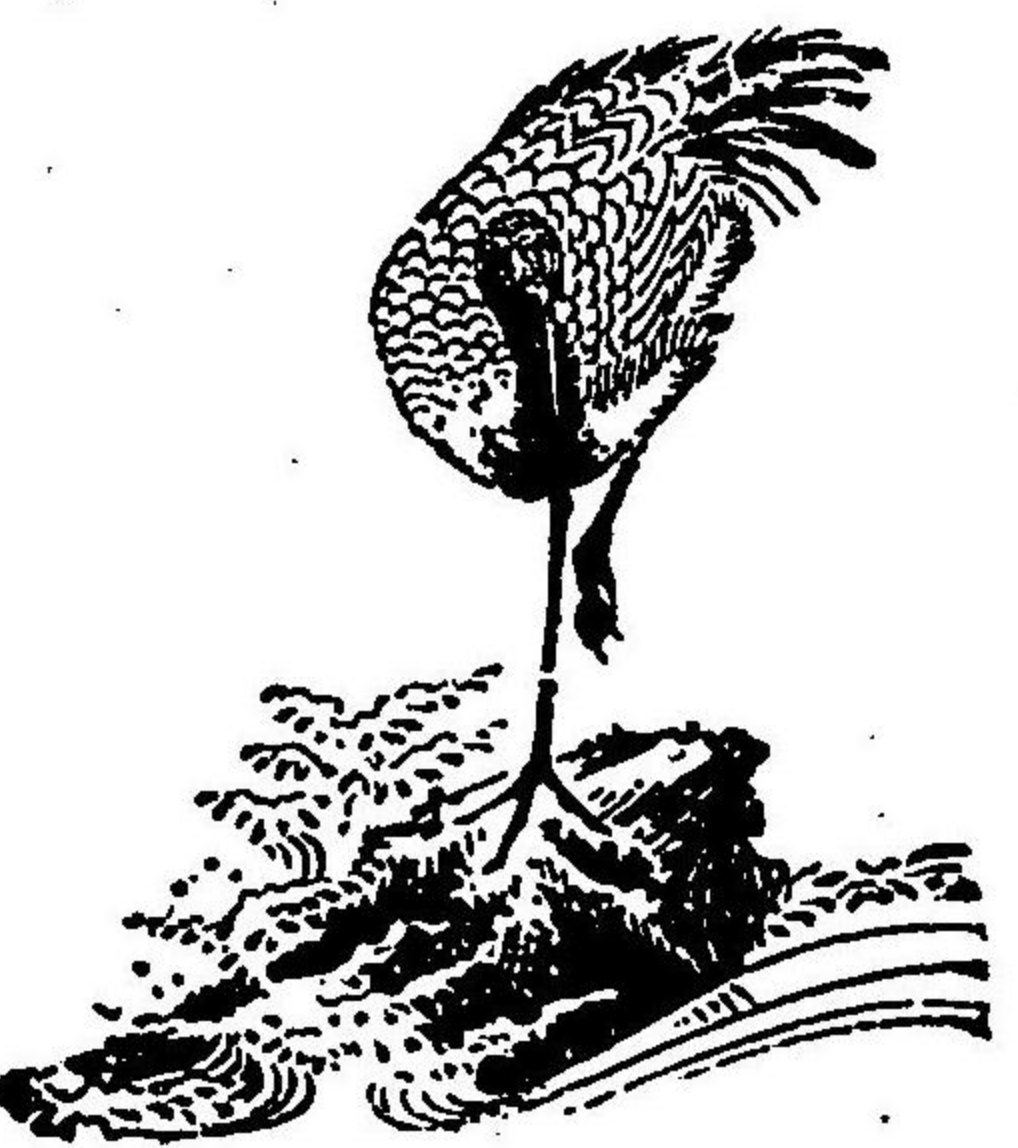
をなし、偉大なる戦功を樹てられたり。観戦者としても小官等若し他の軍に屬せしならば、單に平坦なる土地のみ行進しつゝ、敵の防禦工事を施せる線に突入せる外は、何物をも見るを得ざりしならむ。幸に第一軍に在りし爲、山地戰、河川渡過、其他種々の變化に富める頗る有利なる觀察を遂げ得たり。黒木閣下及其他將校各位は御謙遜にして、或は知られざるべきも、軍の名譽は今や世界に轟けり。若し閣下にして、今後若し世界漫遊を企てられしならば、紐育、伯林、維納、巴里、又は倫敦に於て、來訪者の夥多なるに忙殺せらるゝならん。小官も亦新任地に赴かば、劈頭第一に第一軍の偉績を吹聴する考なり。茲に從來の厚誼を謝し、併せて閣下及自餘の諸君の健康を祝す。

ハミルトン中將の答辭。一言一句渠の肺腑より出づ。予が第一軍に對するの感も亦此に外ならず。乃ち録して以て序言に代ふと云爾。

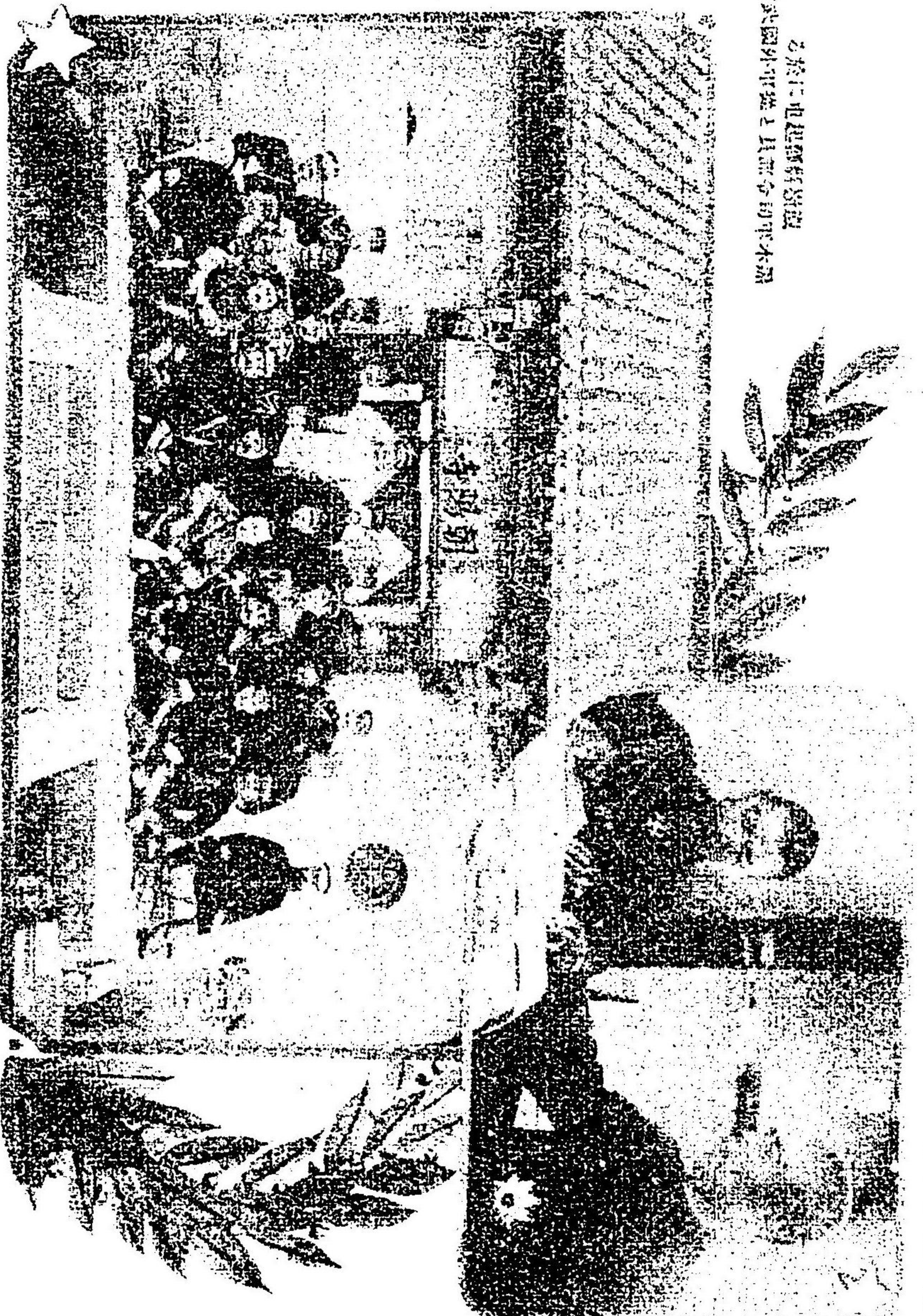
乙巳立秋日開原縣會家屯之行營に於て

小 巒 逸 史 識





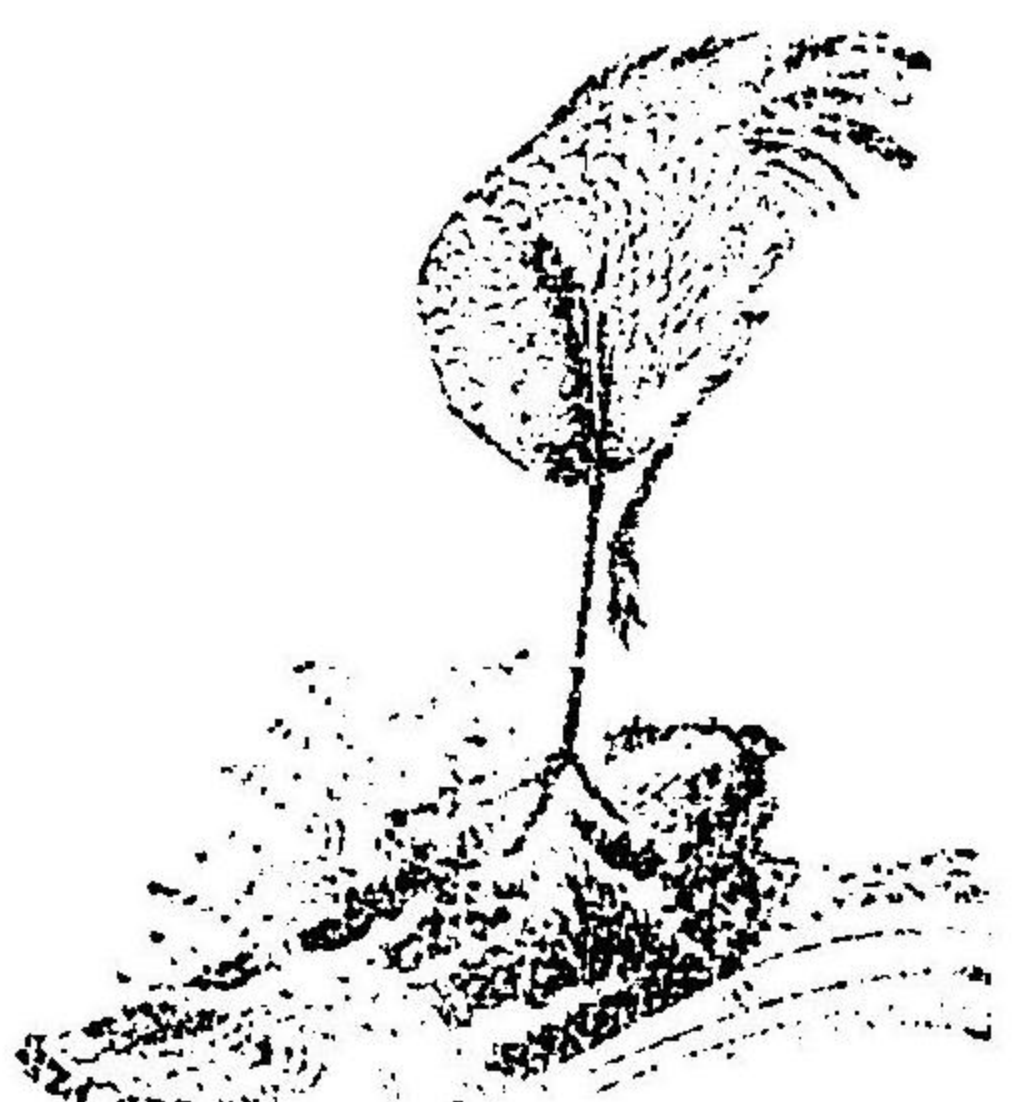
長瀬参謀長と官軍頭木原元將に電報會話原圖



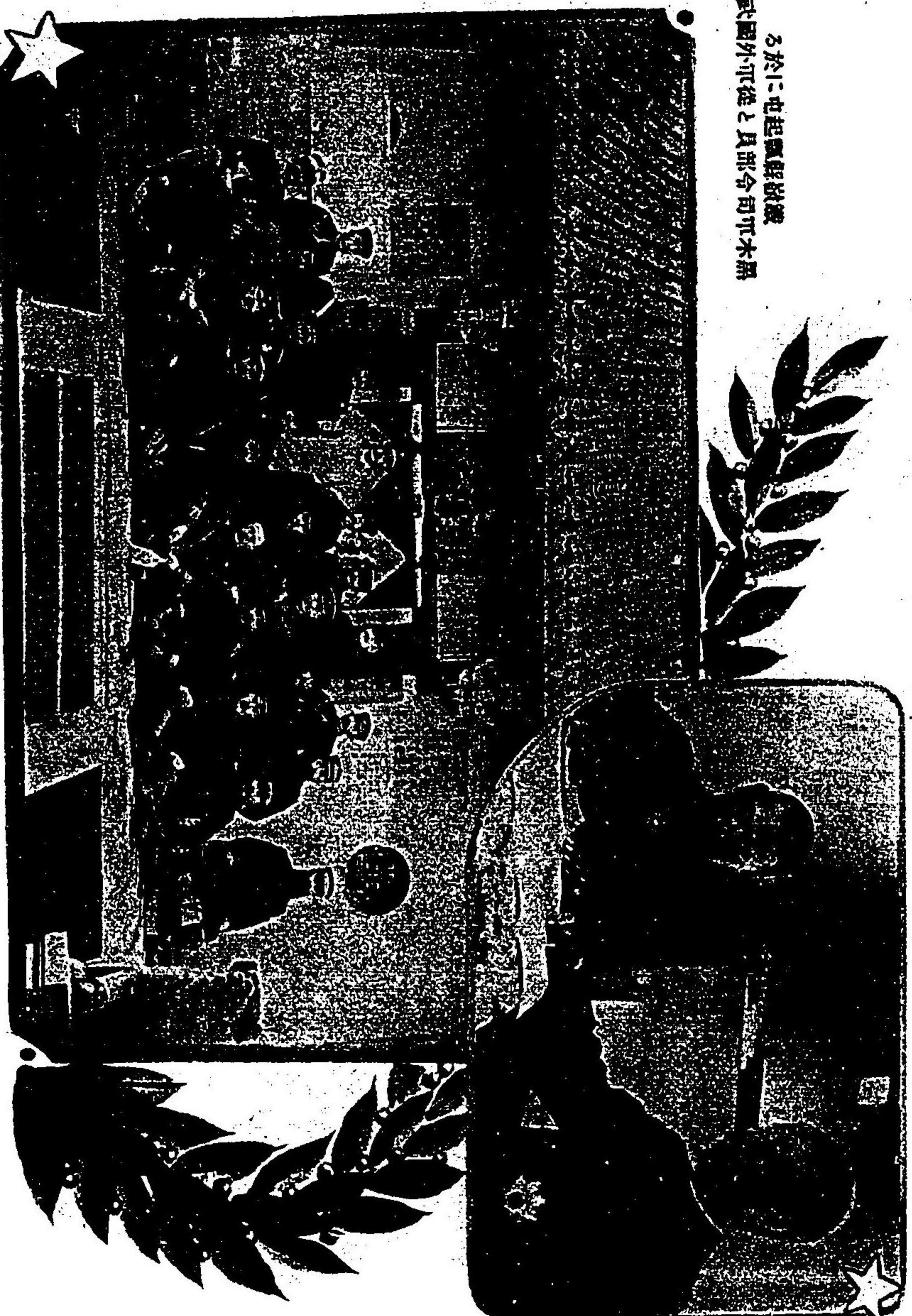
李陽朝  
官軍頭木原元將と長瀬参謀長

中東は黒水大將、向つて大將の左は久瀨宮殿下、殿下の前は  
樺井少將、殿下の後は泉玉少將、其他は黒水軍の幕僚と外國  
武官として三十八年四月の撮影なり。





長謀參井藤と官令司軍木黒る於に屯家會縣原開

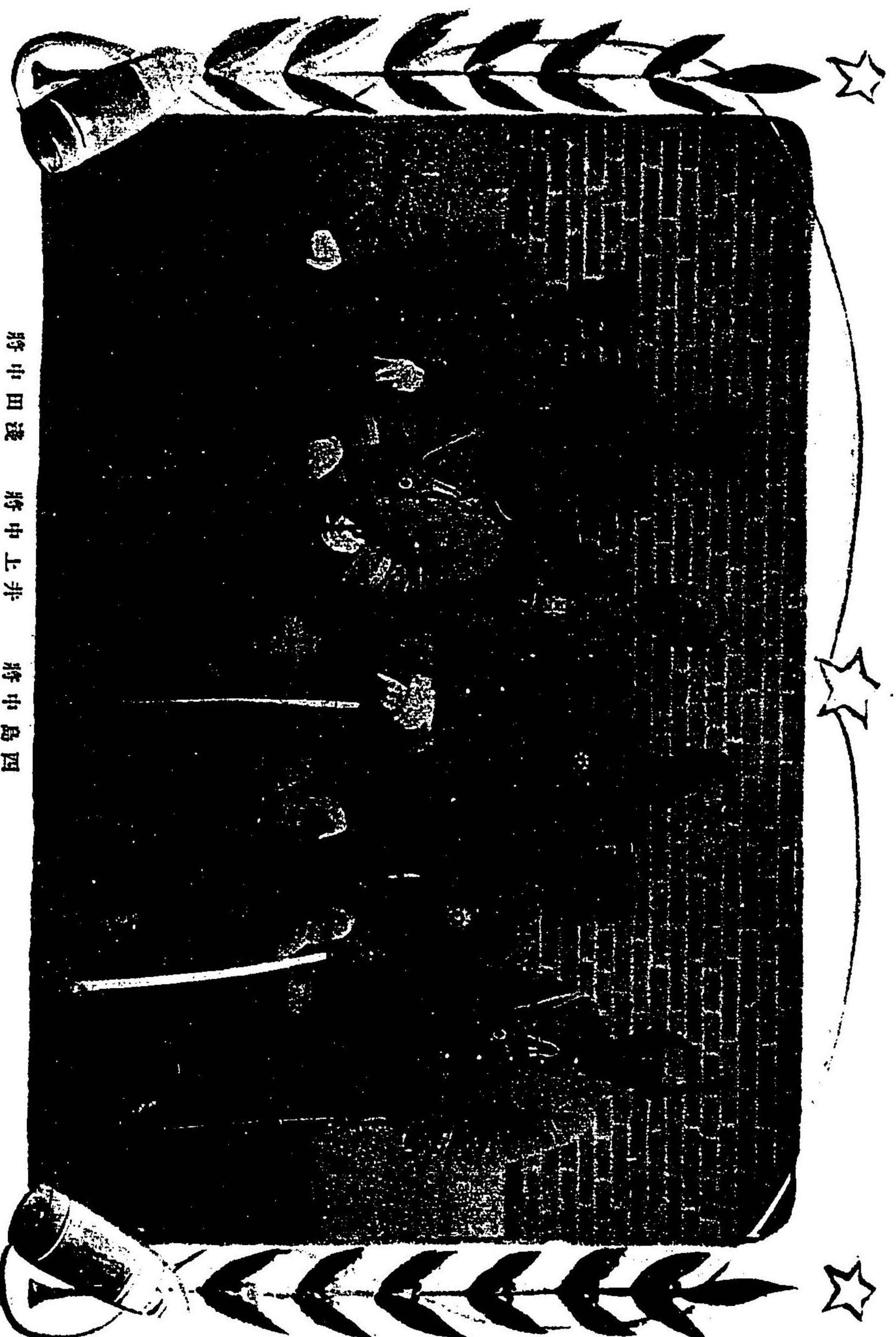


る於に屯起軍縣原開  
官武圖外軍後と具部令司軍木黒

中央は黒木大將、向つて大將の左は久禮宮殿下、殿下の前は  
藤井少將、殿下の後は皇五少將、其他は黒木軍の幕僚と外國  
武官とにて三十八年四月の撮影なり。

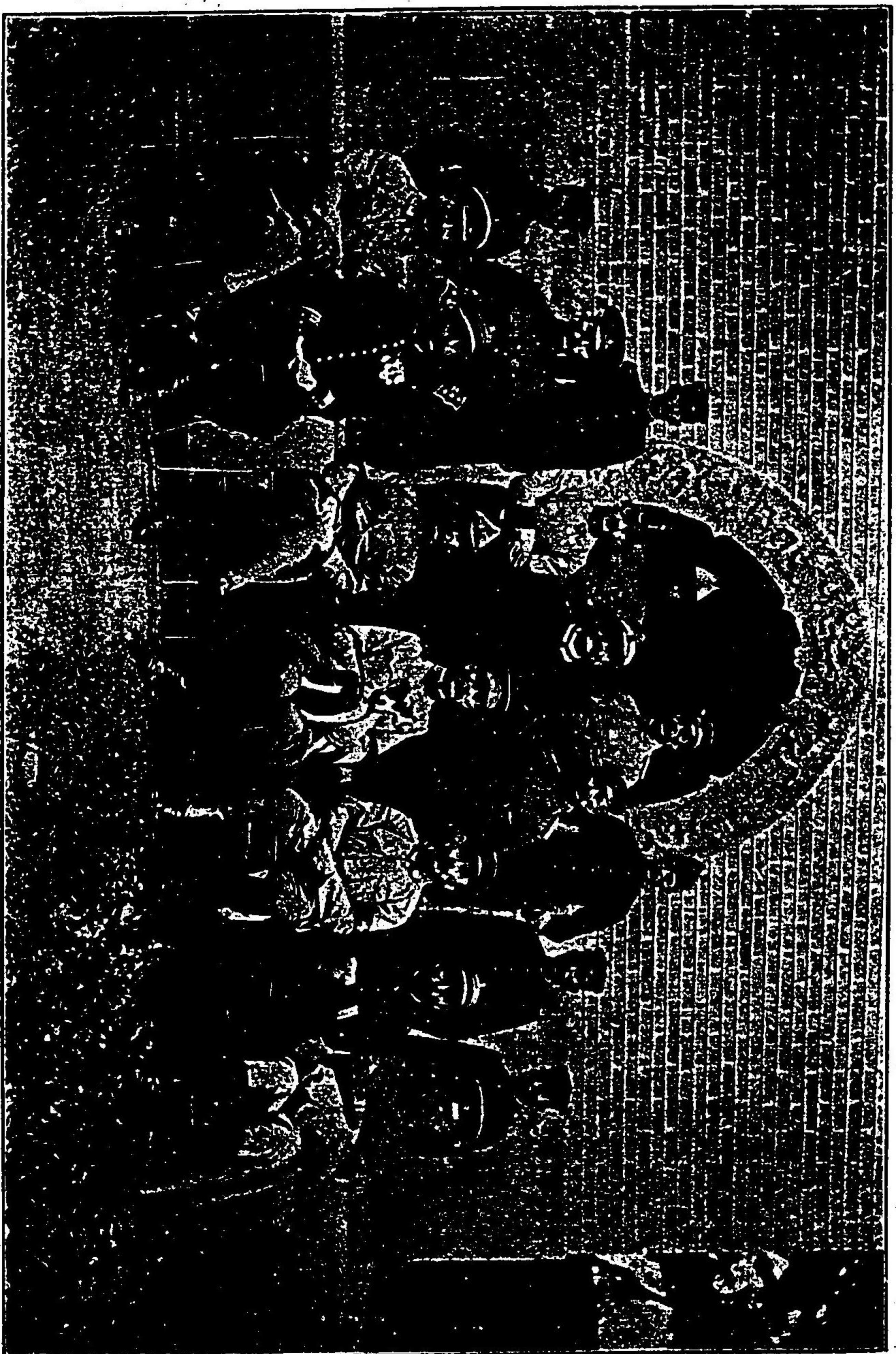


軍將諸の軍本黒る於に上墳日八月十前戰開河沙



將中田淺 將中上井 將中島四 將大西 將少非藤  
將大川谷長 下殿宮運久 將大木黒

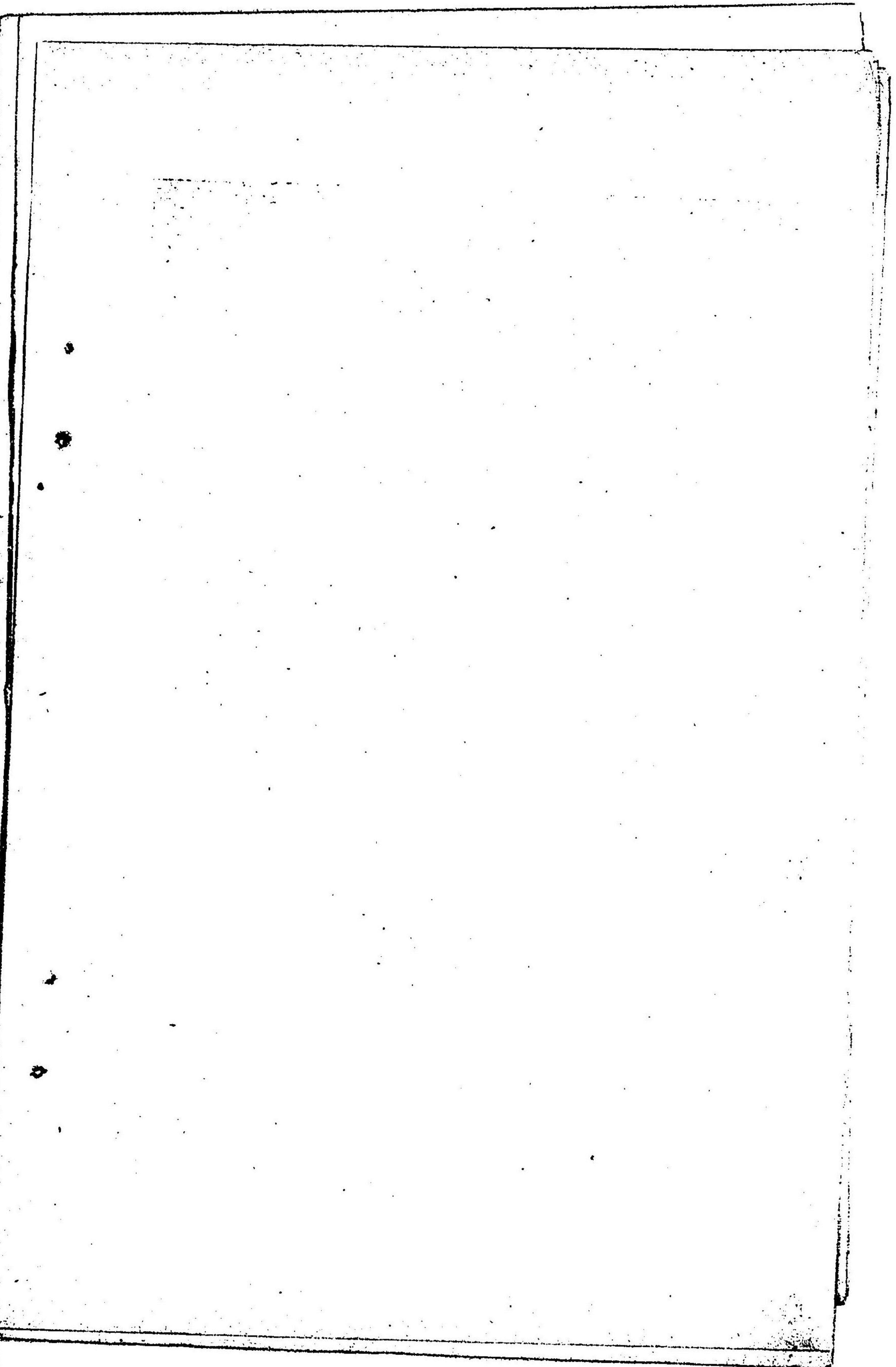




黑木軍中司令官 附外從軍武官  
中中央大者英陸軍中將 小堀少佐

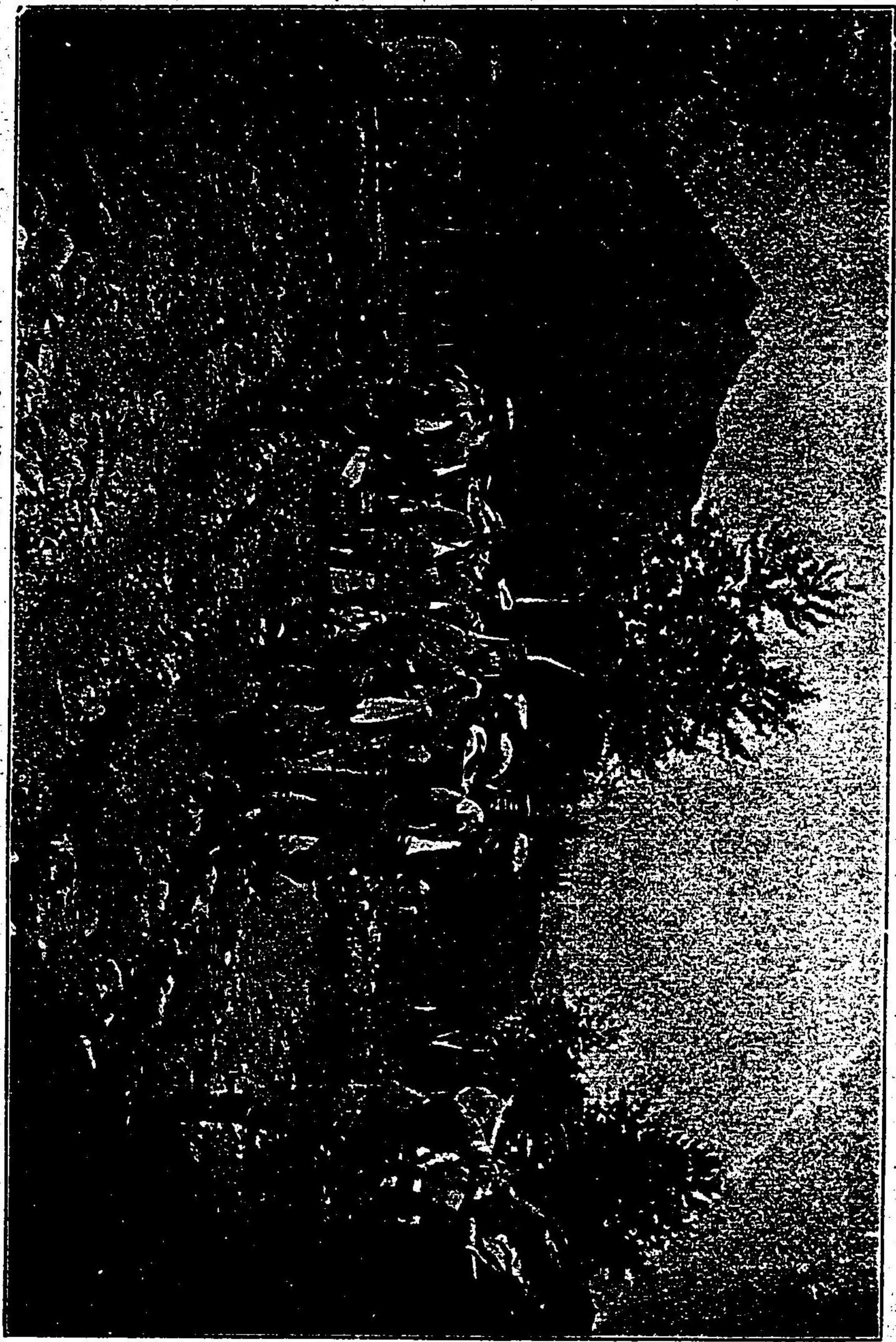


涉渡河變戰江綠鴨軍木黑



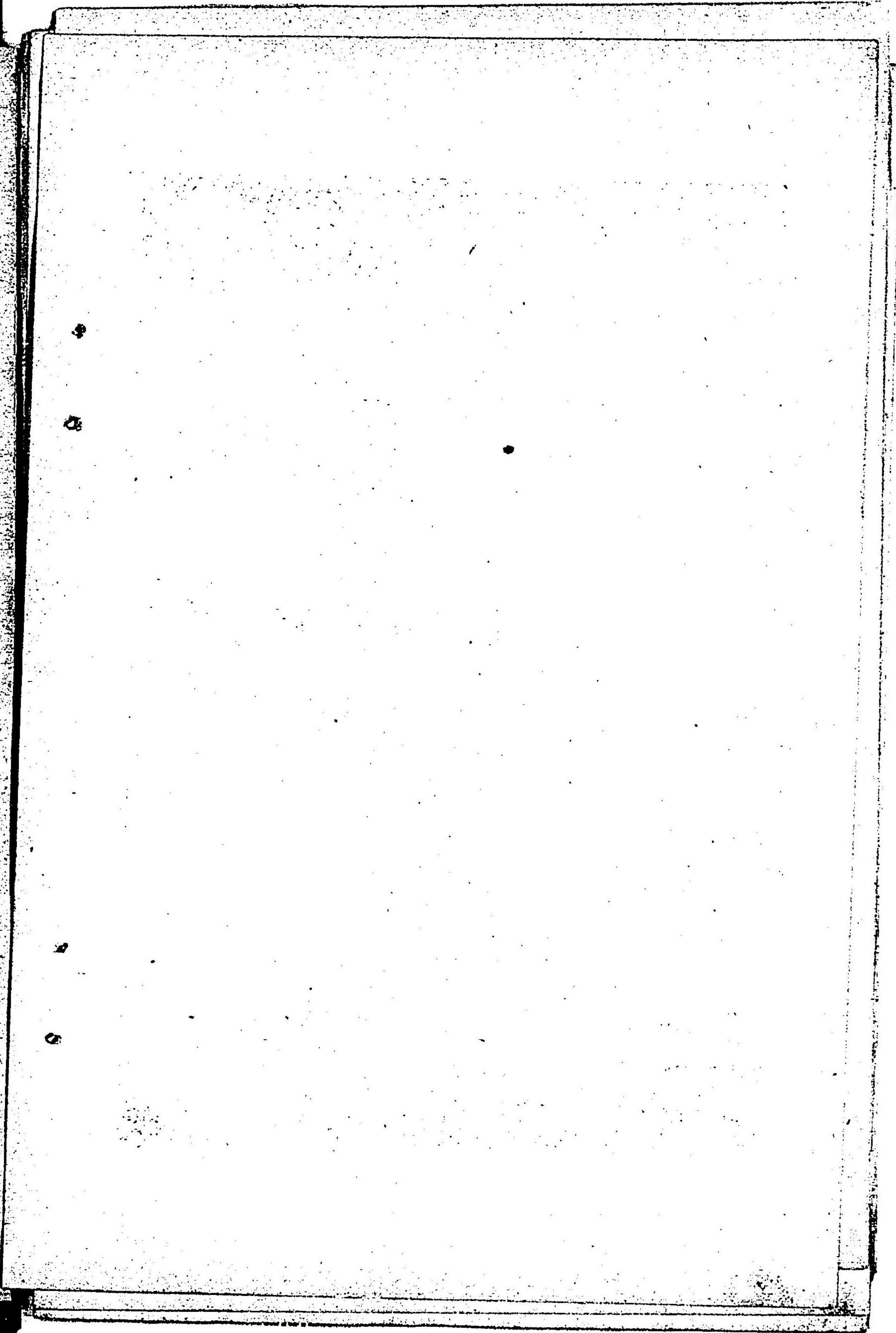
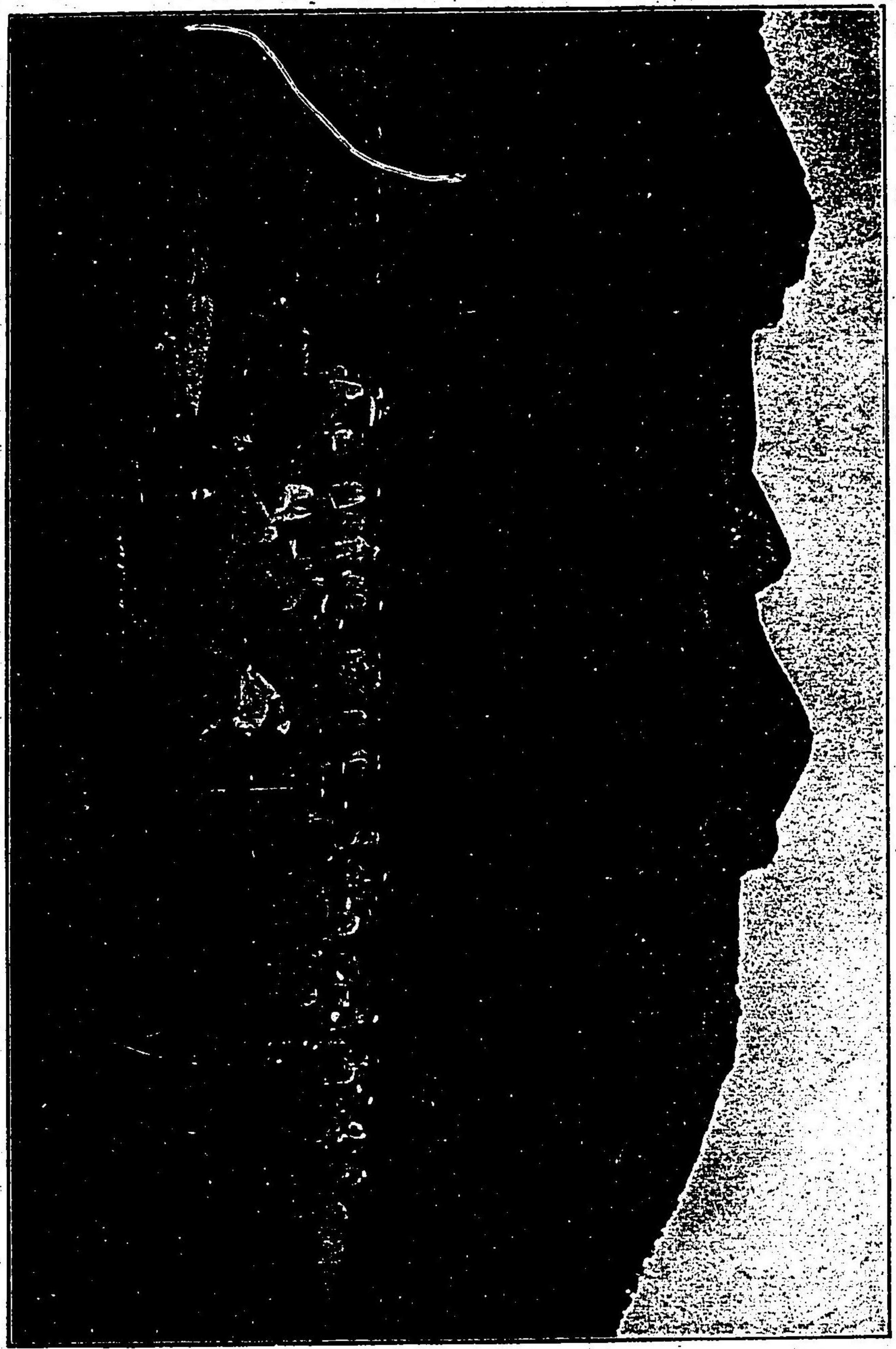


兵 傷 自 の 後 服 激 嶺 天 摩



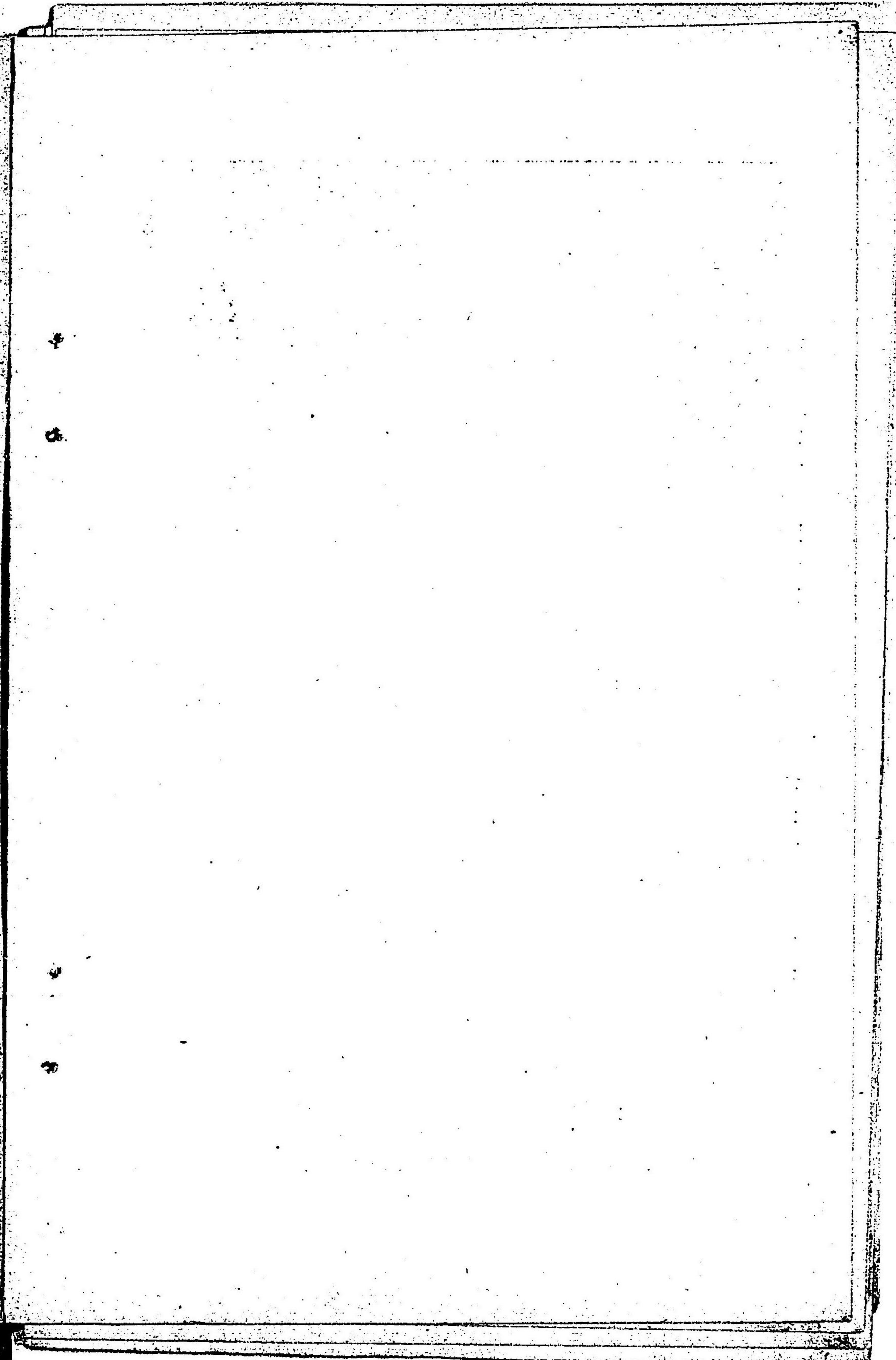
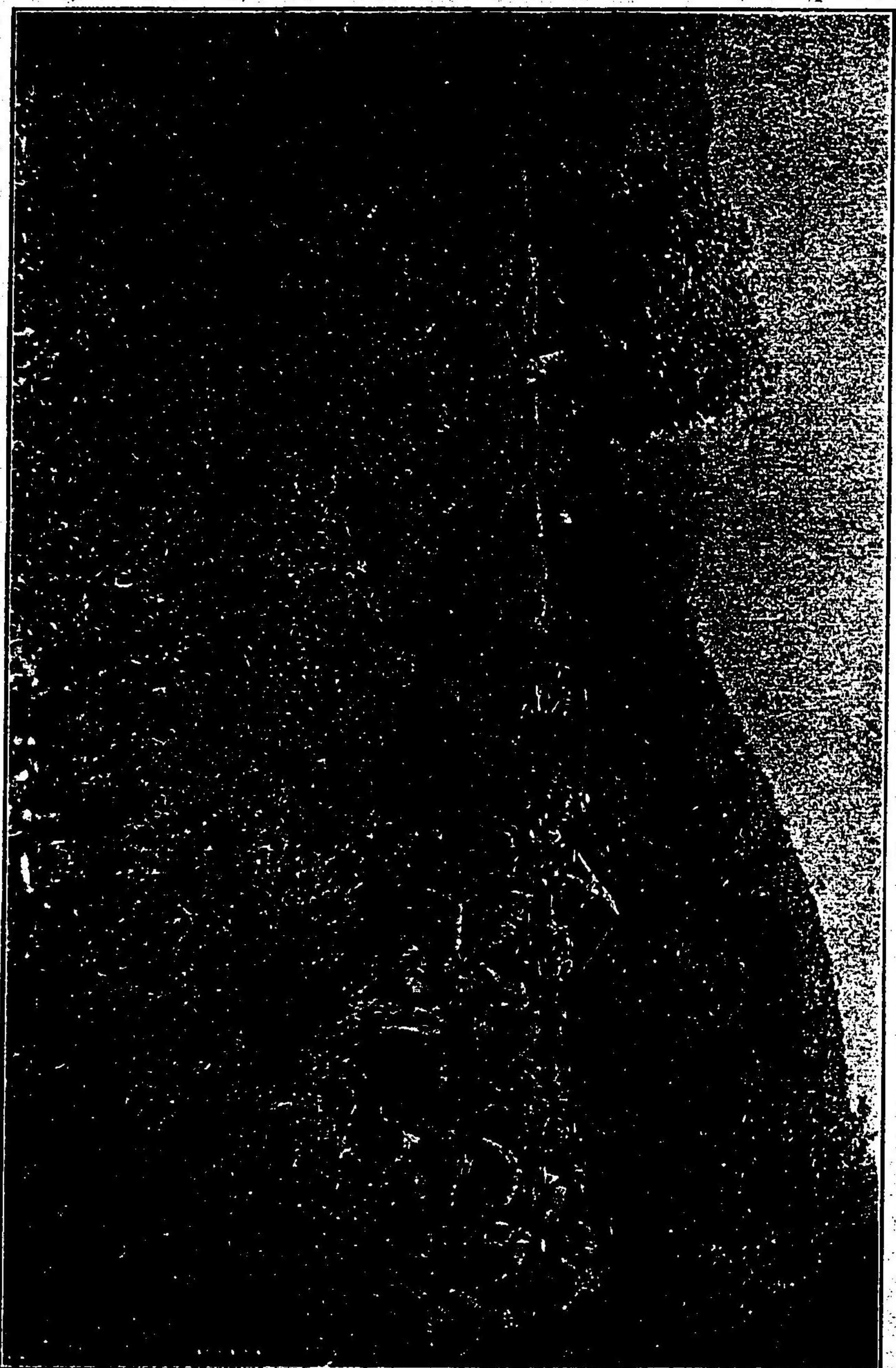


地陣の隊兵砲戰野團師二十第るけ於に子林樹楡

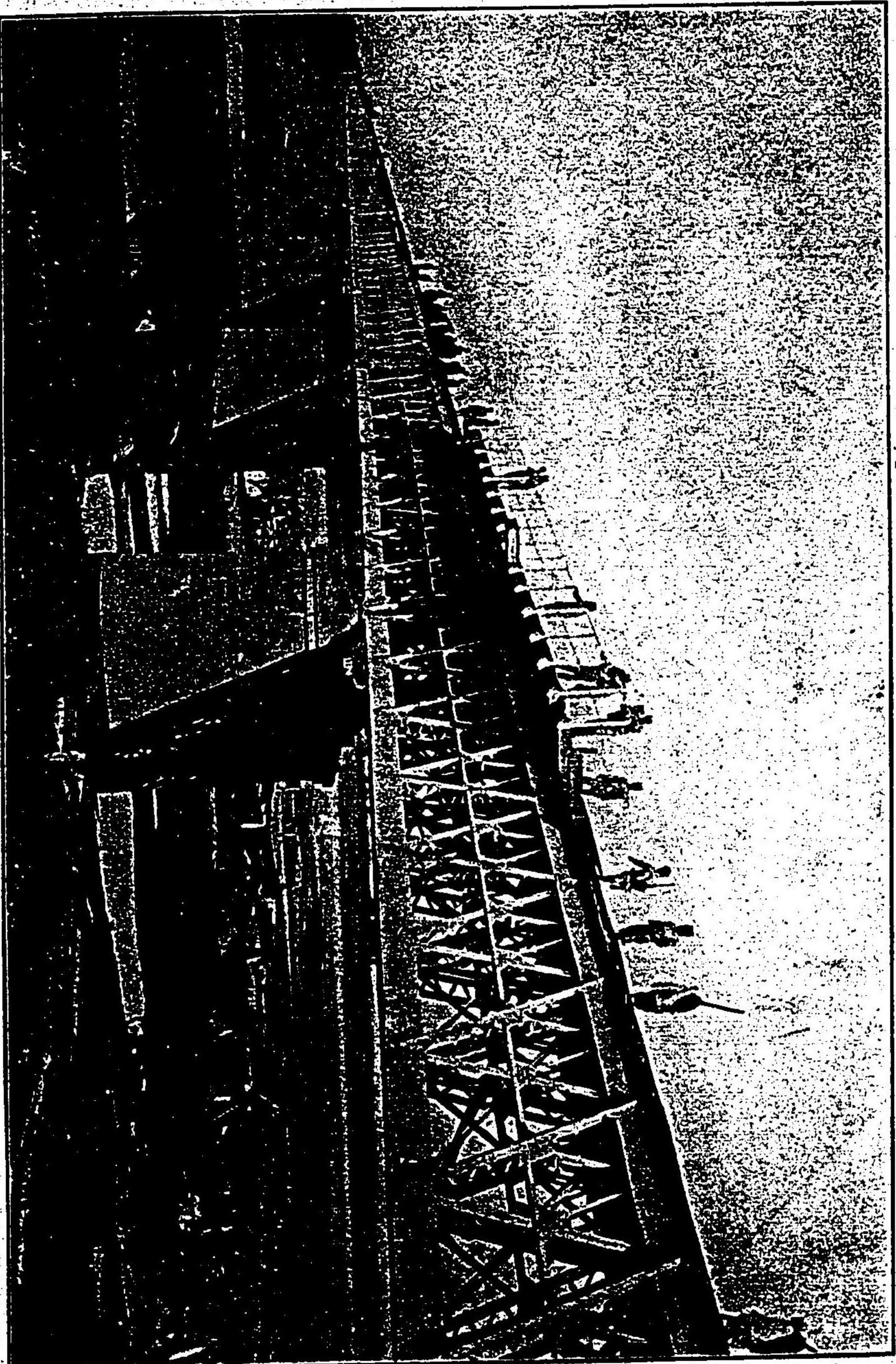




舉進の圖師衛近時當領占灣塔近附嶺子樣





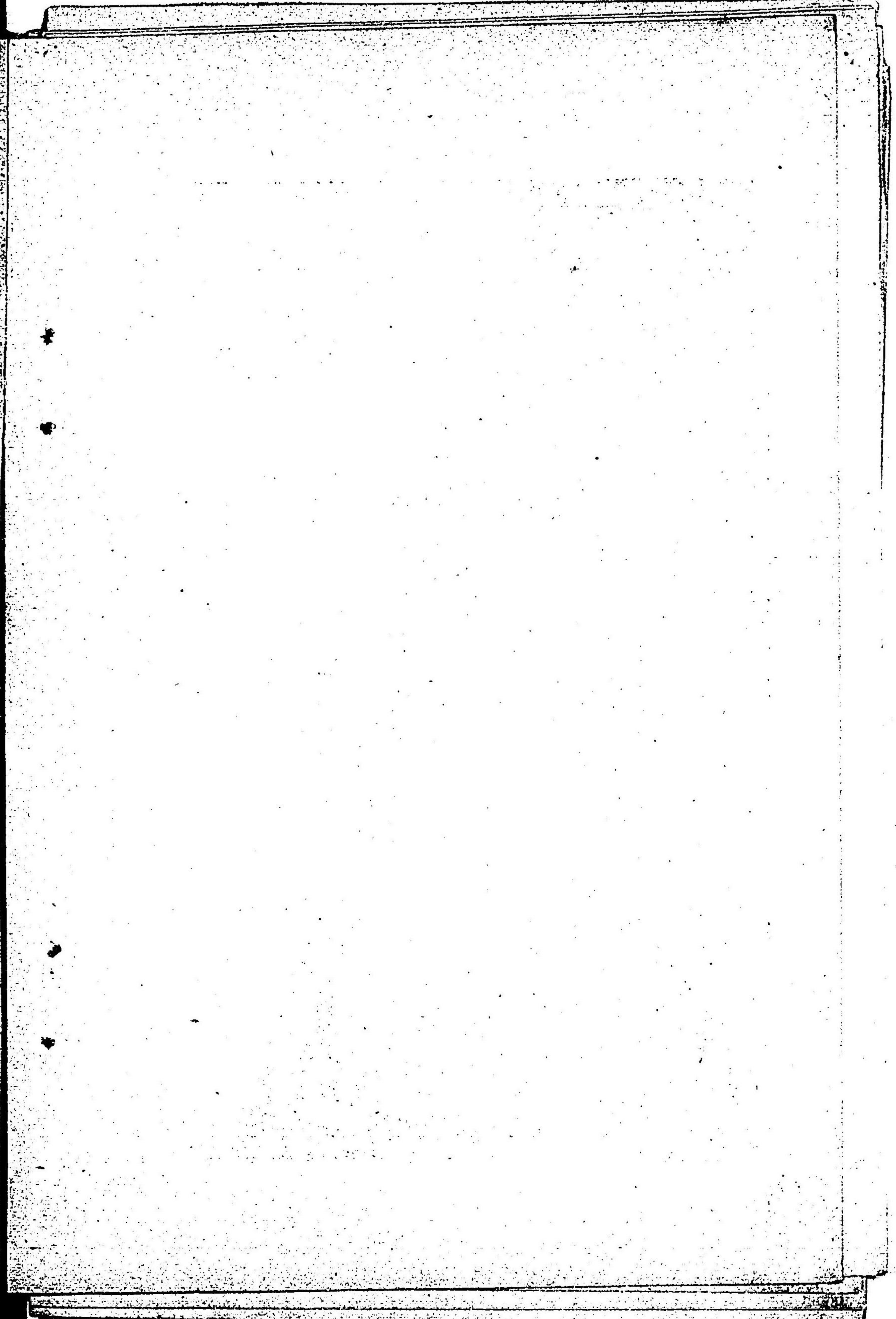
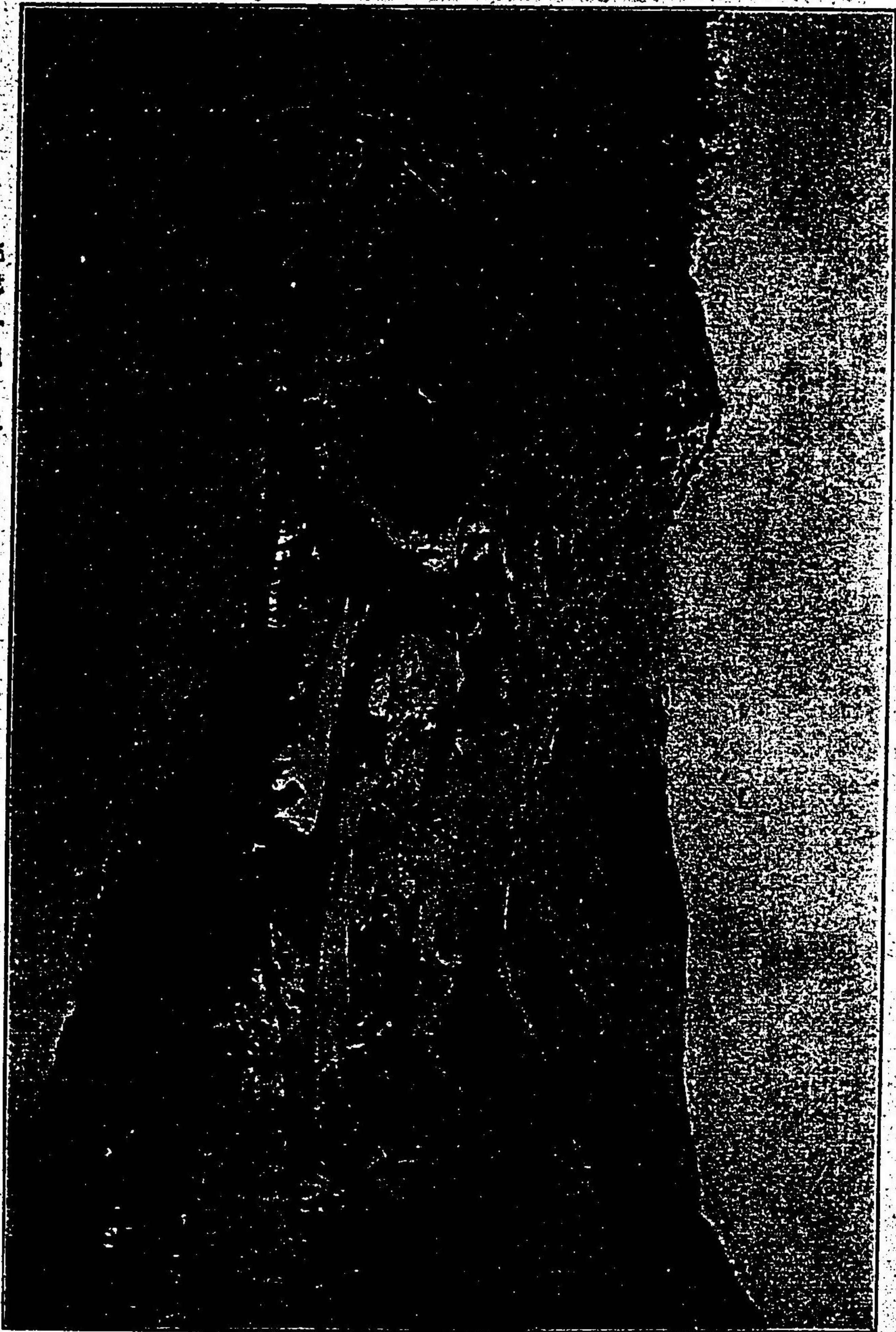


遂陽殿後太子河鐵橋修繕工事

[Blank page with faint horizontal lines and several small dark spots.]



送輸中雪の車馬那支及隊重輔るけ於に嶺開新中戰對河沙





天奉附近會戰中河津橋附近輜重通過の遺跡





# 黒木軍百話目次

目次	目次
行軍難道路と天候	一
行軍難給養と運搬力	三
水路と沿道の架橋	五
通信機關其一郵便	六
通信機關其二電信	七
陸戦劈頭の戦死者	八
豪傑を撃退す	二
材料の運搬	三
河川偵察	三
江畔に一大工場を現出す	四
先づ黔定九里の二島を略す	五







次 目

五六三	五六二	五六一	五六〇	五五九	五五八	五五七	五五六	五五五	五五四	五五三	五五二	五五一
倭寇撃退の碑	虎穴に入て虎子を獲たり	上官の死骸を負ふて奮闘す	地の利は人の和に若かす	砲兵の花三幅對	敵の機先を制す	我致命傷を秘す	宜なる哉連戦連捷	一對傳令の模範死して使命を辱かしめず	頂門の針(禿頭を蜂に螫さる)	中尉殿の形見	悲壯なる最後	黒英臺の決戦(其二)
三	七	七	六	二	三	四	五	六	六	六	九	九

目次

五

話 百 軍 木 黒

五〇九	四四八	四四七	四四六	四四五	四四四	四四三	四四二	四四一	四四〇	三三九	三三八	
大和心	夜盲症の剛情	幽霊の正體見たり枯尾花	戦友よりも武器が大切	頼智の弩	武運めてたき男	兵法の新發明	笑て瞑す	白馬將軍を逸す	虎口を免る	新刀の切味	繪はがき美人	草河口の清遊
三	七	七	七	七	九	九	七	六	五	四	三	二

目次

四



七六	中隊長は軍曹	二七
七五	劍尖相逐ふ(仁平山の大格闘)	二五
七四	軍旗山の譽	二三
七三	モI少して日本兵に成れる	二三
七二	動かざること山の如し(島村將軍の奇計)	二七
七一	本溪湖の石擲戦	一五
七〇	亡母の命日	一三
六九	外人の眼に映せる黒木將軍	一一
六八	高梁島は敵に利あり	一〇
六七	敵は退却の妙を得たり	九
六六	輜重輸卒敵の砲彈を吐す	九
六五	砲彈如雨(軒聲似雷)	七
六四	黒英臺の決戦(其二)	四

七九	起死回生	二八
七八	彈雨中に日誌を録す	一九
七〇	權五郎少尉	三〇
八一	忠實なる従卒	三三
八二	沙河會戦後彼の情態	三三
八三	穴居の冬營	三四
八四	狂氣砲兵	三五
八五	露兵にも亦信義あり	三六
八六	狂歌の矢文	三八
八七	渾河の神風	三九
八八	狙撃第十九聯隊の殲滅(軍旗の鹵獲)	三一
八九	轉禍爲福	三三
九〇	敵將我懷爐灰に膽を潰す	三四



目次終	九〇	陸下の萬歳を三唱して死す	一三五
	九一	貴公子の双美	一三六
	九二	新衣川の咽喉に喰ひついて死す	一三九
	九三	敵の咽喉に喰ひついて死す	一四〇
	九四	潔癖と不潔	一四〇
	九五	鴨緑江紀念祭	一四三
	九六	黒木大將の紀念祭文	一四三
	九七	慰問袋の滑稽	一四五
	九八	我乗馬と共に上官の危急を救ふ	一五三
	九九	魔子狩	一五四
	一〇〇	戦捷は婦人の力	一五五
〔軍歌〕		實に勇ましき黒木軍	一五九

目次

八



軍難 (道路と天候)

小樽 來原慶 助著

道路の良否は該國文明の程度に伴ふので、韓國の道路が不良であるのも強ち怪むに足らないが、就中北韓の險惡さ加減といつたら、殆んど吾人の想像以外であつた。

平壤から義州に至る本街道、所謂平安本道なるものは、約五十里間概して崎嶇羊腸たる山路である、間々平坦の土地が無いでもないが、其道幅の極めて不規則なものと凹凸の甚しいのとて、單獨の旅行者すら尠からぬ困難を感ずる程であるから、況して大軍の行動に於ては、夫の泥濘の冬期間に結氷してゐたゾレに軍の行動間は恰も春分雨期に際して、夫の泥濘の冬期間に結氷してゐた

行軍雜 (其一)

一



黒木軍百話



軍難 (道路と天候)

小樽 來原慶助 著

道路の良否は該國文明の程度に伴ふので、韓國の道路が不良であるのも強ち怪むに足らないが、就中北韓の險惡さ加減といつたら、殆んど吾人の想像以外であつた。

平壤から義州に至る本街道、所謂平安本道なるものは、約五十里間概して崎嶇羊腸たる山路である、間々平坦の土地が無いが、其道幅の極めて不規則なものと凹凸の甚しいのとて、單獨の旅行者すら勢からぬ困難を感ずる程であるから、況して大軍の行動に於ておやである。ソレに軍の行動間は恰も春分雨期に際して、夫の泥濘の冬期間に結氷してゐた



行軍難(其一)
のが遠かに融解初めて水飴の様になつてゐて、天氣晴朗の日にはその表皮だけが乾燥してゐて、カッ、カッ、と徒歩者の膝を没する迄には到らなかつたが、歩行毎にユラ／＼と宛物護謨か葦藁の上を行くが如き感があるので、誰謂ふとなく葦藁街道との命名が出来た、此奇怪至極の道路が一朝降雨となるとソレこそ大變忽ちベタ一面泥の海と變じて了ふ、ソレから坂路の方になると、降雨の際には出水の爲に到る處土石崩壊し、輕車の進行すら難かしくなる、軍司令部某徒歩員が平壤から安州に至る途中で、糜粟毛的苦痛を免れんが爲に、試みに自轉車を驅つたのであつたが、行軍三日間に僅々四五里に足りない距離を拾乗りした許りて、其餘は全く荷物となつて徒歩者より一倍困難した滑稽もあつた。安州以北は比較的氣候も整ひ、随つて道路も稍乾燥を來したので、ホツと一息吐いたが、尙途中水田中を横ぎる道路の如き、泥濘の爲に全く其形狀を没却して、一時は單獨徒歩者の通行すら全然不可能の位であつた。天候及び道路の狀況此の如く、それが爲車輛通過の爲に大々的修理若くは全然改築を要し、各工兵隊は勿論其他如何なる兵種を問はず、或は晝夜兼行に道路

行軍難(其一)

二

橋梁の工事に従事し、或は晝間豫定の行軍を了へて夜間は一睡の暇もなく、其改築修繕に全力を注ぐなど、各部隊の勞働概ね晝日なく、其艱難辛苦の程は到底筆舌の及ばざる處であつた。

二 行軍難 (給養と運搬力)

戰時に於ける給養は主として運搬力と關係を有し、運搬力は主として道路の良否と關係を有す。夫の天候不良道路險惡なる韓國內の行動中、我軍は如何なる手段を採りて數萬の軍隊に供給し、長日時間乏しからざるを得せしめたか、往時に溯つて之を観察するも亦、興味ある一問題であらうと信ずる。糧秣一石の量を積載する輜重車輛は、一車につき四人乃至五人の補助輸卒を附せざるを得ない、雨天若くは不良の道路に在つては、一車の積載量をば之を八斗に減ずるも尙一日の行程僅に二三里に過ぎない、鎮南浦龍岡間(五里)を三晝夜兼行して辛ふじて到達したるが如き好實例である、此故に天候道路共に最良の時期に於て、輸卒一隊の運搬力は一箇師團の四分の一に給養するに過ぎないの

行軍難(其二)

三



行軍難(其二)  
て、師團一日量の糧秣を一日行程約六里に運搬せんには約ね四千人餘を要する割合である。

それに韓人夫は一人平均一ト(二斗入)を負担するも、概して一日以上の運搬には應じないのである。又彼等の習慣上雨天及び降雨の徴候あるの日は一切屋外の労働に従事しないから、韓人夫に頼るの輸送力は頗る不確實であつたが、我當事者は或は威し或は賤し、百方手を盡して巧みにこの懶惰民族を使役しつゝ、運搬力を補ふたのであつたが、當初の苦心は實に名状すべからざるの有様であつた。

それで軍司令部が鎮南浦出發以來、韓國內の行動間に於ては辛ふして主食物の減食だけは免れたのであつたが、某兵站司令部所在地に宿泊した時などは、副食物が將校五人に五六寸大の乾魚が一ツ、下士以下は辣薤が僅た一ツ、而もこれが二人分であつた、

平壤を経て安州から宣川に至る迄は、大概前述の如き情ない目に遭つたがだんだんと北進して、嘉山定州を経て車鞏館に至るに及び、彼の鐵山半島に水路が

開通したので、此處から初めて豫定の給養に浴することが出来たのであつた。要するに我軍が韓國內行動中、一は天候道路の險惡と戦ひ、一は糧秣の不如意と戦ひつゝ、實に名状すべからざるの辛酸を嘗め、然も一難を経る毎に士氣益々盛を來たし、其結果遂に鴨綠江の初陣に光榮ある捷利を獲得し、以て黒木軍の威名をして世界に赫々たるに至らしめたのであつた。

### 三 水路と沿道の架橋

韓國の西海岸大同江以北は、良好なる港灣に乏しきが爲、大なる運送船の航行には適せないのであるが、小蒸汽並に帆前船の航行位には左程困難ならざるは今回の實驗に依つて明らかであつた。又沿道の河川中にして兵站輸送の爲に之を利用するを得たるは、大同江(平壤)及清川江(安州)の二流で、大同江は順川迄約十五石積韓船を溯航するを得たるも、溯航には約一週間を費し且韓船一隻につき漕手十人内外を要したのであつた、清川江は海岸から安州まで約二百石積帆前船を漕行せしむるを得るので非常に運輸上の利便を得、其溯航時間の如きも

水路と沿道の架橋



十二時間乃至二十四時間位で達した。沿道架橋の爲に大作業を要したるものは、清川江、大寧江及三橋河であつて、何れも其材料をば其架橋點附近に於て之を蒐集し、枕橋式に依つて之を全通した。但し韓國内に於ける河川は護岸工事等の設備のなきは勿論であるから、少量の降雨に際しては忽ち河水の暴溢を來たし。軍橋は屢之が爲に損害を蒙つたのである、殊に清川江の如きは比較的海岸に近く、潮流干満の影響を蒙ること頗る大なるが爲に、破損の厄に遭遇したことは蓋一再にして止まなかつたのであらふ。

是より先平壤を流る、韓國三大河の一なる彼の大同江の架橋は、軍が平壤に進前、仁川より上陸せる小倉師團の手に依り、大なる設計を以て韓船を連結して一條の舟橋が架設せられてあつた。

### 四 通信機關 (其一郵便)

通信機關の良否も亦軍隊行動上重大なる關係を有するを以て、吾人は我軍當初

### 五 通信機關 (其二電信)

の行動間に於ける其設備の状況に就ても亦茲に一言せざるを得ない。郵便は端末局をば各師團司令部及支隊司令部所在地に、中間局をば大兵站地即ち車輦館、安州、平壤に、後方端末局を海陸の連絡地たる梨花浦、鎮南浦に置き、而して各局間の遞送には主として郵便夫監視の下に韓人を使用したのがつたが、例の天候及道路の關係で非常なる困難を感じたてあらう、郵便吏は今にそう言つて居る、「韓國内行動の當時に比すれば滿洲では樂て全て殿様だ」と、又以て當時遞送及配達上如何に苦心したかが推察されるのである、然も集配共に頗る迅速且確實で、鎖細の小部隊まで周到つて居た、其遞送速度は義州、鎮南浦間陸路約四日間、一週間以内で内地の新聞を韓北の僻地で讀むことが出来た、而して此新聞や手紙に接するのが戦地にある人の唯一の慰藉であつた。

電信は力めて韓國從來の用線及地方材料を利用し、各師團司令部並に支隊司令部の行進に伴ひ、殆んど同一の速度を以て架設せられたるは、吾人局外者の等



陸戦野頭の戦死者  
八  
しく驚嘆せる處であつた。但し天災若くは土人の妨害に基因せる電線の故障頻繁なりし爲通信堆積し、宣川通信所の如き一時五百件以上の堆積を見るに至りしことありと云ふ。然し通信員が異常の奮勵と極力電線の保護に努めたるの結果、辛ふして通信の滯滞を防ぎ得たる、當時我當局者が一方ならざる苦心に對しては、吾人は之に向つて多大の感謝を拂はざるを得ないのである。  
就中野戦電信隊は始終野戦隊に續行し、彼の砲煙彈雨の中を犯して、隨處に通信所を開始したるが爲に彼の鴨綠江戰團間に於ける各部の連絡尤も確實であつて、且又我軍が五月一日鴨綠江右岸を占領するに方り、我軍司令部が未だ鴨河を渡らざるに先ち、已に業に九連城に通信所を開始したるなど、其迅速機敏なる、吾人をして轉た文明的戰爭の感を深からしめたのである。

### 六 陸戦野頭の戦死者

征露の役一たび起りて陸戦野頭韓國內に於て名譽の戦死を遂げたるもの之を誰とかなす、曰く騎兵一等卒田所清熊其人なり、乞ふ吾人をして少しく渠が悲壯

なる最後の状を語らしめよ。

頃、明治三十七年三月八日のことなりき、新來哥薩克騎兵の一部隊の鴨綠江を渡り義州街道を南下して宣川定州の間に停止し、時々斥候を放ちて安州附近に出沒し以て我軍の動靜を窺ひつゝあり。當時安州に在りし我前哨騎兵部隊は此日騎兵小隊長丸尾中尉(順吉郎)に命するに定州附近なる敵情を偵察すべきを以てしたり、丸尾中尉踴躍命を拜し上等兵石橋榮藏、一等卒健山雪三郎、同田所清熊、通譯扇喜代三郎の四名を引率し、鐵蹄を曉霜に印しつゝ安州を發し、鞭聲肅々天明に清川江を涉りて楓浦里なる敵の哨兵を驅逐し、之を追躡して舊津、博川及嘉山の各地を経て限なく其附近を搜索し、尙も進みて義州街道を前進しつゝあるに際し、其前面に方り優勢なる敵騎の行進し來りしを以て、急に馬首を廻らしつゝ、嘉山の南方巫山里の高地に背進し來りしとき、忽如二三十騎の敵兵通路の右側に現出し、我一行の退路を遮断せんとする形勢あるを以て、之を避けんが爲に尙も疾驅して退却せんとしたるも敵の追撃頗る急にして、得意の馬上射撃の飛丸雨の如く、不幸にも此際田所の乗馬は腹部を射られて斃る、

陸戦野頭の戦死者



是に於て傍に在りし鍵山一等卒は田所に協力しつゝ馬匹の引起しを試み、丸尾斥候長は石橋上等兵と協力して防戦甚だ努むと雖奈何せん多勢に無勢而も敵は益接近し來り僅々五六十米突の近距離より盛に亂射し、形勢は刻一刻と危急を告げ來れり、其間田所は再三再四乘馬を曳き起さんとせるも遂に起つ能はざるを以て此上復奈何ともすべからざるを察し、切に斥候長に己を棄て、退却せられんことを勸告し、丸尾中尉も亦今や救助の方法全く盡き若し此上徒らに逡巡せん乎、斥候は爲に全滅に陥り、我任務を果す能はざるを以て、涙を揮ふて舉手田所に訣別の意を表し、自餘の諸士を促しつゝ一鞭虎口を脱し、遙かに後方を顧みれば田所は單身奪圍の餘敵彈に中りて遂に我愛馬の側に絶命したり。近頃新に義州街道を過ぎれるもの。舊津の渡頭を北して將に嘉山驛に達せんとする街道の左傍小丘の麓に沿へる松林の中に、新に建てられし一つの墓標あるを知らしむ、これなん勇士田所一等卒が死骸をば長へに瘞めたるの處にして陸軍當初の名譽ある戦死者として我往來兵士の手よりその墓前常に香花を斷ず靈魂を慰められつゝあるなり。

陸軍勇頭の戦死者

七 豪傑を撃退す

天下の豪傑を以て自任する老措大中野次郎、多年滿韓各地方に在りて諸般の經營に任じ、辛酸具さに嘗め失敗次て到るも毫も頓着せず、一難を経る毎に意氣益揚る、予久しく渠の雷名を聞くも未嘗て一たびも其聲咳に接せざるを以て憾みとせり、軍の車輦館に在るや先生事を以て到り、一日門下生白河夜舟子を携へ來つて我宿舍を訪はる、座に浸峯、野鶴の二子あり、予其紹介を得て初對面の挨拶を述べらるや、先生例に依て得意の長廣舌を弄しつゝ滿韓戦後の經營を喋喋々々し傍ら人なきが如し、予杯に代ふるに朝鮮碗の大なるを以てし渠に屬して曰く焼酎を一坏、如何てす先生好と稱して滿引、一氣に飲み干しつゝ忽ち舌舐づりをしつゝ頗る不快の色あり、予怪みて焼酎の容器を檢せば拒むらん焼酎と思ひしは左にあらで、含嗽用硼酸水の瓶と取違へたるなり、予百方其疎忽を陳謝したるも、然も先生遂に釋然たる能はざるものゝ如く、萬丈の氣焰一時に止みて勿々辭し去り、爾來復予輩の宿舍を訪はるゝの光榮を有せず。

豪傑を撃退す



### 八 材料の運搬

我軍は前述の如く天候の不良道路の險惡、糧秣の欠乏等、百難を排して長途の行軍を終へ、四月二十一日を以て全部鴨綠江左岸即ち義州附近に開進し、江を隔て、近く敵と相對峙せり。之と同時に運輸上實に重要な任務を有せり、是より先渡河に必要な各種の材料は皆鎮南浦に陸揚げしたり、此等の材料は何れも攻撃開始前に於て之を梨花浦に轉運し且之を搬送して適當の場所に位置せしめざる可からず、當時我軍は可及的戰列隊の人員を使用することなくして之を運搬せんと企圖したるも、奈何せん開進當時糧秣輸送の急なりしが爲に、我兵站輸送力は他に轉向するの餘地なく、已むことを得ず全軍の給養稍整ふを待ちて、各師團の彈藥、架橋、糧食縱列悉皆及歩兵二千二百人を擧げて強行運搬に従事せしめたり、此計畫は各部隊の奮勵に依りて殆んど晝夜兼行の下に、専ら各兵の肩に依りて往復四十里に近き梨花浦より義州附近迄運搬せしめられたれば、其多くは兩肩を腫らし一見人をして其勞働の過大なるを忍ばしめたり。二

### 黒木軍百話

十九日に至りて全く其運搬を了す、吾人は彼の戰闘以外に於ても我忠勇なる各兵士が世人の未だ知ることを得ざる斯此勞働的辛酸を嘗めたることを永久に記憶せざるべからず。

### 九 河川偵察

我軍の主力が豫定の陣地に前進するや、専ら攻撃準備に汲々とし、彼の敵の據て以て天險と頼める鴨綠江の徒涉點若くは其架橋點を偵察せしめたり。當時鴨綠江は恰も水源地融雪の時期に際し、其本流は勿論各支流共に著しく増水して水幅豫想外に廣く、本流は平素の一倍半乃至二倍、其他の小支流の如き亦平素の三四倍に達し、加ふるに河水尙冷冽にして、其偵察の任に當れるものは實に一方ならざる困難を極めたり。加之のみならず敵は其前哨をば、鴨江の中洲たる黔定島、於赤島及九里島に配置し、百方我偵察の妨害を試みんとするを以て、我偵察隊は主として暗夜を利用しつゝ、其計畫を實行せしを以て、之が爲に幾多の犠牲を生ずるの已むを得ざ

### 鴨綠江渡河準備



江畔に一大工場を現出す

一四

るに至れり。偵察の方法一例を擧ぐれば、深夜人定まるを俟ちて水に入るものをして預め其危険を慮り一條の麻繩を腰に纏はしめ、其一端をば陸上に在る兵士の手にて把持せしむ、若し半途にして水に溺れ若くは寒冷の爲に知覺を失したる等の場合に直に其麻繩をば手繰り寄するの方法なるが、其既に陸上兵士の手元にて手繰り寄せられたる際には、作業手は概ね全身冷却して人事不省に陥るか、若くは雄魂空しく天に歸したるの時にして、之と同時に後續作業手は之と同一の手段を繰返し、再三再四にして漸く其目的を達したることありと云ふ、我兵士の任務に落みて水火を避けざる概ね此類なり。

一〇 江畔に一大工場を現出す

前述の如く鴨綠江は其本流并に各支流共當時水量著しく増大し、殊に本流は水心非常に深きが爲に、彼の軍用架橋材料たる架柱を應用し得るは、僅に兩河岸に近き一、二橋節の淺所に過ぎず、且又沿岸の渡舟は悉く敵の爲に彼岸に集收

せられ居るを以て、彼の橋脚舟の不足を補ふ爲に多數の箱舟を急造すべく、四月二十四、五日頃より一面には義州附近なる彼の有名なる森林を有する白馬山より木材を伐採して之を鴨綠江々畔なる元化洞附近の材料製造所に運搬せしめ一面には兵卒中の大工及其經驗あるものを役して材を挽き板を作るなど、晝夜を分たずして工を急ぎ、爲に鴨綠江の右岸たる元化洞南方の平地は遽然として一大職工場を現出し、其偉觀は殆んど譬ふるに物なき程なりし。

一一 先づ黔定九里の二島を畧す

軍は四月二十日頃より徐々と行動を起し、彼の鴨江渡河準備として第一着に河川偵察に着手せしめたるも、何分敵の乗馬歩兵は九里島於赤島及黔定島の中洲に出没し、我兵の隻影を認むるや必ず之を射撃するを以て、我偵察の目的を沮喪せしむるに至れり、これを以て先づ此妨害物を除くべく二十五日の夜を期して、斷然九里及黔定の二島を占領するに決せり。

先づ黔定、九里の二島を畧す

一五

二十五日黄昏豫定の準備を終り、宮城野師團の前哨部隊は鐵舟に頼りて弘北洞



先づ野定、九里の二島を奪す

一六

(義州より稍下流)の西方より渡河し、些の抵抗をも受くることなく先づ野定島を占領し、同時に某工兵隊は鴨綠第一江の軍橋架設に着手したり。是より先、軍の攻撃援助の爲、細谷艦隊より差遣せし摩耶宇治の二砲艦、二水雷艇、二装砲汽艇は、此日夕刻龍岩浦に入港し、戦機の熟するを待ちつゝありとの報に接してより益々人意を強ふしたり。

禁衛隊の前哨は二十六日午前四時より行動を開始し、鐵舟又は例の急造箱舟によりて九里島を占領すべく渡河を始めしが、敵も亦豫め期待せしもの如く、激烈なる射撃を以て之を迎ふると同時に、兼て準備しつゝありし燃料火柱に點火して警を後方部隊に傳へ、且民家を焼きて前路を照すや、於赤島、中江壺及下湍洞にありし敵の警報材は何れも點火して焰烟天を焦がし、其光景頗る凄壯なりし。

其時後岸にありし我援助兵は直に之に應射し、敵は頑強に抵抗せしも我歩兵は毫も屈することなく續々渡河せしを以て、敵は形勢の非なるを覺り歩々射撃を爲しつゝ、九里島より於赤島を経て虎山に退却し、我兵は之を追撃して全く九

里島を占領し、直に此方面に於ける鴨江第二流の架橋に着手したり。

一二 敵前架橋 (橋長二千一百餘米突)

鴨綠江河川の偵察略々其効を奏すると同時に、先づ渡河準備工事として、義州の西方に流るゝ同支流と元化洞北部の兩支流に架橋し以て我前哨をば野定、九里の二島に進めて之を占領せしむ、次て上記の諸支流に更に四條の橋梁架設に着手せしめ、此等は皆應用材料を以て架設せしに數々敵に砲撃せられて晝間工事を果す能はざりしを以て夜間の作業に於て之を完成したり。

鴨綠江本流なる定式橋梁は、五月一日會戦の前日乃ち四月三十日の夜始めて完成し、五月一日天明に戦闘部隊の渡橋全く終了せり。然るに彼の急造船橋は材料の整頓未だ結了せざると、定式架橋點の上流約二千餘米の急流を拽き上らざる可からざるとの困難に依り、同日午前五時漸く架橋に着手し同夜十時完成せり、但此橋梁は全く敵に破壊せらるゝの危害を避くるの目的を以て特に其位置を撰定し彼の定式材料橋の敵の砲撃の爲に破壊せられたる場合に於ける豫備橋

敵前架橋

一七



たりしなり、然るに幸にして之を用ふるの要なくして止みたるは、偏に我軍の勇戦狂撃其効を奏し、迅速に敵を撃退したる効果に外ならず、又同日午後八時我砲兵聯隊をして中江台附近に於て本流を渡河せしむる爲に二十一隻の門橋を構成し、翌朝該聯隊がその門橋を通過中、劇しく敵の砲撃を受け、爲に一門橋に敵の弾痕を印すること七乃至九ヶ所の多きに及び且作業中の工兵若干死傷したり。

我軍は五月一日拂曉より豫定の如く攻撃を開始し、天漸く明くるに及び、我歩兵は逐次前進して九連城附近の敵を驅逐し、午後より夜にかけて砲兵を渡河せしむるが爲に鑿河の本支流二ヶ所に架橋す、又小倉師團は四月二十九日より起工して鴨綠江の上流水口鎮附近に小橋を架設し、夜を徹して之を完成し其全部を渡河せしめたり。

右に述べたる如く、此戦闘間に於ける我工兵の架橋總數たる正さに十有五條にして延長實に二千一百二十六米に達せり。抑鴨綠江は有名なる急流の大河にして、敵は此大江の天險に據り所謂逸を以て勞を待ち、百方渡河準備に對する妨

一三一 一發巨彈のお見舞 (我重砲の威力)

我軍が鴨綠江畔に行動を開始するや、敵は屢々砲撃を行ひて我を威嚇し、其彈丸は遠く義州城内に落下し、且夜間と雖時々發砲するを常とせり、然も我砲兵は只管機の熟するを待ちて容易に應砲せず、二十七日夕刻より我第二野戰砲兵隊及び重砲聯隊は、疊々に撰定せる點定島陣地の工事に着手し、一面には徹夜其彈藥をば約五吉羅米の後方砲廠より各兵の肩に依りて隱密に其場所運送し、更に二十九日夜の更くるを待ちて其重砲をば兼て用意の道路及軍橋の上に滿布せし高粱桿の上を滑らかに輾らせつゝ其音響を防ぎて豫定の陣地に前進せしめて何時にても應戦し得る如くし、且斷えず其陣地の胸壁に水を撒き以て我砲撃の際に於ける塵埃の飛揚を豫防するなど、其敵眼を避くる點に於て用意實に周



到なるものありき。  
 明くれば四月三十日天未だ全く明けず、近衛野砲兵聯隊は虎山なる敵の陣地に向つて砲火を開始せるを以て、敵は専ら此方面に於ける戦況のみを監視し、別に我偉大なる効力を有する重砲聯隊の在るは全く之を覺らざりき、蓋露軍當初の判断たる韓國道路の状況上重砲は勿論野砲の提携すら到底不可能なりと確信したればなり、去れば我重砲隊も亦滿を引いて放たず只管機の熟するを待ちつゝありしが、會々敵は我工兵隊が端艇に乘して彼の鴨綠江本流の水深を測量せんとするを妨害すべく、前面なる摺鉢山砲台より劇しく射撃せし折を以て時機到れりと爲し、直に之に向て一發の榴弾を發射したり、敵はこの思ひがけなき巨砲の出現に膽を奪はれ、一時大恐慌を來たせしも依然として單に我野砲兵隊の方向にのみ應射し、之が爲に同方面に於ける損害は實に尠少なざりしが、之に反して我重砲陣地へは一發の射撃をも分たざりしは彼の地形の利に加へて前述の如く巧みに隱蔽法を行ひたるを以て、この戦闘間全く敵に發覺せられざりしに因るなり。

夫より我重砲兵は砲口を轉じて虎山より退却せる敵の一群に向て數發の射撃を試みたるが、其程度敵は大潰亂を極めつゝ、狼狽四散せるの状は恰も蜘蛛の子を散らすが如くなりし、午後に至り重砲兵は再び我野砲兵を苦めたる彼の摺鉢山に對ひ榴弾を發射せしむ。此射撃は殆んど敵兵全部の致命傷とも謂ふべき底の効果を奏し、僅々數發の射撃の爲に摺鉢山の砲台は殆んど破壊し盡きて砲門を露出し、同時に砲車及彈藥車の若干をも粉蓋せしを以て、敵の陣地の後方は土烟混淆したる一種の爆煙を以て覆はれ、流石に頑強に抵抗せし敵砲も之が爲勇氣一時に挫け、爾來全く沈黙して再び砲火を交へざるに至れり。

一四 軍司令官攻撃命令を下す

我數萬の將士均しく腕を撫しつゝ、戦機の熟するを待つや久し、果然我軍司令官は四月二十八日午前十時を以て攻撃命令を各團隊に下せり。其大要實に左の如くなりし。

- 一 敵は九連城及鑿河附近に陣地を占領す。

軍司令官攻撃命令を下す



二 軍司令官攻撃命令を下す  
軍は九連城及其附近を占領せんとす。

龍岩浦に在る我艦隊の一部は安東縣附近の敵を脅威し軍の攻撃を援助する筈なり。

三 小倉師團は二十九日夜水口鎮附近に於て渡河し三十日夕刻迄に下嶺溝附近より栗子園東方高地に亘る線を占め軍の主力の渡河を掩護し五月一日拂曉迄に豺狼子溝より栗子園西方高地に亘る間を占領すべし。

但其一部は之を鴨綠江右岸に沿ひて派遣し三十日午後二時迄に虎山東北方の高地を占領せしむるを要す。

又爲し得れば一支隊を夾河口に出し敵の左側背を脅威せしむべし。

四 宮城野師團は三十日午前十時までに社山洞西北方低地に集合し同夜十二時より九里島西方の軍橋を渡過し虎山の山頭を経て虎山の西端より沙河に亘る間を占領すべし。

野戦砲兵第〇聯隊は三十日午前十時までに南山洞西南方の低地に集合し同夜黔定島北方の陣地に就き天明と共に九連城の敵を砲撃すべし。

五 禁衛師團は三十日午前十時迄に義州東方の低地より虎山の西角に亘る間を占領すべし。

但砲兵陣地は虎山の南方に撰定することを得。

六 野戦重砲聯隊は三十日夜黔定島の陣地に就き、天明と共に九連城高地の敵を砲撃すべし。

七 軍の總豫備隊は如左。(略す)

總豫備隊は五月一日午前四時迄に九里島軍橋の東方に集合すべし但歩兵第〇〇聯隊の一大隊は黔定島附近に在つて砲兵の掩護に任ずべし。

八 各師團の後方連絡線左の如し。(略す)

九 予は五月一日午前四時北部元化洞の高地に在り。令下るの時將士皆踴躍しつゝ機の到れるを祝し、且奮て最初の會戰に勝を制せんことを期し、士氣の旺盛なる恰も長江の虹の如し。

一五 山雨欲來風滿樓 (總攻撃の前日)

山雨欲來風滿樓



山雨欲來風漸橫  
小倉師團が四月三十日夜を徹して架設せる水口鎮の軍橋完成するや、同師團は直に渡河を始め、彼岸に達すると同時に見上ぐる如き山上なる一條の樵路を辿りつゝ、一望怒濤に似たる山地をば豫定の陣地向つて徐々前進し、又義州方面に於ける各砲兵は未明中に各其陣地に就き、各部隊も亦豫定の如く夫々集合せりと雖、前に述べたる如く虎山の敵は依然同地に留まりて鞍部に防禦工事を開始せるなど、毫も退却の色なきを以て、我架橋掩護隊は之が爲に豫定の位置を占領するを得ざりしが、我が砲兵の一たび之を砲撃するに及び始めて周章散亂して悉く遮蔽部に隠匿せり。  
其後我歩兵斥候は點定島より中江台に赴かんとし、四隻の小舟を舩し殆んど對岸に達せんとするの一刹那、兼て待構へたる九連城東方摺鉢山なる敵砲は之に向て一齊射撃を開始し、其砲弾は正確に小舟の前後に落下し爲に我斥候兵は危機一髪の間在り、是に於て點定島に在りし我砲兵は始めて砲火を開き、九連城附近なる敵の全砲兵亦之に應じて我砲兵陣地に射撃を集注し、又馬溝附近の敵の砲兵は九里島の下端なる支流點より上流に向ひ架橋材料を導きつゝある我

山雨欲來風漸橫

工兵に對し頻りに曳火砲を發射し、今や彼我の砲戰漸く酣に、殷々たる爆聲天地を震動するに至れり、此時小倉師團の先頭部隊は恰も九里島の對岸に達し、之と同時に禁衛師團の一部隊も亦舟に乗りて彼岸に渡り、敵地の動靜尙依然たるも、形勢は刻一刻より急を告げ來れり。  
此日夕刻我軍司令官は親から戰團の指揮を採るべく、參謀長以下幕僚一同を隨へ社山洞の陣地を出て、義州統軍亭の右腹なる元化洞の谷地に移り天幕を張りて露營せり、此夜雨月光咽ぶが如く、近く濼々たる鴨江を隔て、遙かに雲煙標渺たる滿洲の連山を望み、通宵我十万の貔貅枚を銜み、肅々として江を渡り夫豫定の陣地に就くの壯觀偉觀は宛然一幅の真景圖たり、識らず明旦の活動如何。

月照鴨江彼我營。統軍亭對九連城。  
敵騎橫渠俟令下。如斗飛丸夜有聲。

山雨欲來風漸橫



一六 正々堂々として江を渡る

五月朔日我各團隊は徹夜行動を繼續しつゝ、未明に豫定の線を占領し、軍司令部は天明を俟ちて元化洞の丘陵上展望に佳なる處を撰びて暫時此處に暫戦しつゝあり。

午前五時過我野戰重砲兵は先づ九連城附近なる敵の諸砲臺に對し、砲撃を開始せしめ敵砲は昨日の猛射に沈黙したる儘毫も應射せざりしを以て直に其射撃を中止せり、午前六時に至るも敵壘に近き駿河の河孟は寂然として一の銃聲を聴かず、是に於て各團隊の主力は各部署方面に小部隊を派して敵情及駿河の徒渉點を偵察せしめんとす。

午前七時半各團隊の第一線は攻撃前進を始む。之と同時に軍の總豫備隊は虎山の後方なる沙場に前進すべく命ぜられたり。

我第一線が前進を始め、漸く敵の壘に近づくや、今迄沈着を守りし敵は俄然として一齊射撃を我に加へ、我亦之に應射し、同時に各砲兵は盛に砲火を集

中し、彼我の戰聲漸く劇烈となれり。

午前八時頃我第一線は威風邊りを拂ひ敵火を犯しつゝ、駿河の左岸に達す、駿河も亦其川幅の廣大なること敢て鳴緑江の各支流に譲らず。我歩兵は敵の猛射を浴つゝ側面行進を行ひ、淺きも尙腰を没し、深きは頸に達するの河心を徒渉す、それと見るより我砲兵は全力を注ぎて之を援護し、午前八時より九時の間に於て小倉師團は石城子附近、禁衛師團は葦子溝及腰溝、宮城野師團は九連城附近なる敵の守備線を占領したり。

同時に軍司令部は元化洞の高地より江を渡りて虎山に向ひ、午前十一時より更に九連城に前進す。其時我豫備隊は既に業に摺鉢山南麓に開進しつゝあり。

正午軍司令部は摺鉢山の東南麓に達す、同時に敵の歩砲兵の一部は更に九連城の西方約二千米の高地線に據り頻りに速射砲及機關砲を連發しつゝ、我に對抗するとの報あり、是より先、中江台に在りし我砲兵大隊は南部駿河尖北方附近に其陣地を進め、九連城西方高地の敵砲兵を射撃すと雖、敵は其前面なる高地の後方に位置したるが爲目視十分ならず、随て我砲の威力を發揚して之を沈黙せ



正々堂々として江を渡る

二八

しむることを得ず、爲に宮城野師團の各部隊の如き一時停止して諸隊を整頓し以て我砲兵の進出を待たざるを得ざるの已むを得ざるに至れり。

正午礮河尖にありし我砲兵は其陣地を撤して右岸に移らんとせしも、河心深くして徒沙困難なりしを以て百方手を盡し同河の最淺處を探りて車輛丈を渡し、其彈藥は各兵の肩の上に之を渡し、其一部は急造の門橋に依り辛ふじて渡河を結了したり。

午後一時半九連城西方高地を扼せる敵は、脆ろくも退却を始めたるを以て軍は總豫備隊に命じ直に之を追撃せしむ。

午後一時四十五分宮城野師團は安東縣方向に前進を起し、追撃隊も亦同時に前進に移り、先きに礮河を渡りたる我砲兵の一部も亦直に追撃隊に續行せり。

軍司令部は摺鉢山附近を経て午後五時九連城に入れり。此間敵は蛤蟆塘附近に據りて尙盛に頑強なる抵抗を試み、敵の曳火彈は屢々我軍司令部一行の前後左右に落下しつゝ破裂せり。

此日摩耶艦隊は龍岩浦を出て、鴨綠江を安東縣附近に迄溯ぼりつゝ我陸兵に聲

援し、砲戰數刻の後、沙河鎮附近なる敵の砲火を沈黙せしめ、午後に至ては各艦艇は無事龍岩浦に歸航したり。

一七 蛤蟆塘の追撃戰 (三面包圍攻撃)

この日小倉師團は騎兵及歩兵の一部を以て礮河々孟を梨樹勾方向に前進せしめ、其他を以て大樓房に向て進撃し、先頭に立ちし木越旅團は大樓房附近に於て敵の收容部隊を撃退したる後之を追撃しつゝ、蛤蟆塘に向ふ。

午後二時木越旅團は蛤蟆塘西北の高地に現出したる敵の歩兵約一千並に蛤蟆塘東南方高地及其斜面に現出したる敵の歩砲兵に對して激烈なる戰鬪を開始す。

午後四時に垂んとする比、我野戰砲兵聯隊の三中隊到着し、蛤蟆塘北方高地に砲列を布きて同東南方高地の敵に向つて猛烈なる射撃を送り、彼我の死傷頻發せるの比、敵の乘馬騎兵約四百驀然として蛤蟆塘東北高地より我左翼に逆襲し來りしも、該翼に在りし我歩兵は尤も沈着に迎撃して忽ち之を撃退せるも、是より戰鬪は刻一刻激烈を極む。

蛤蟆塘の追撃戰

二九



三〇  
給嶮嶮の追撃戦  
禁衛師團は午後一時三十分より蛤蟆塘に行進を起し、其先頭たりし渡邊旅團の前衛大隊は午後四時過に轉山子の東方一千餘米の高地に在る敵を攻撃し、之に追尾しつゝ、蛤蟆塘東方高地に向ひ前進したり。  
梅澤大佐の指揮せる追撃隊は、午後二時過敵の小部隊を驅逐しつゝ、午後四時半に轉山子附近に達し、爾來渡邊旅團の前衛部隊と相連繫して、同地北方高地に在る敵兵及蛤蟆塘東南谷地に在る敵に對して攻撃前進せり。  
是に於てか三面より進みし我部隊は期せずして蛤蟆塘に在りし敵を全く包圍し、鼎足の勢を以て之を攻撃せしを以て之が爲敵の死傷は算を亂せるも猶、頑強に抵抗を繼續し一時は廣くも尙止まざるの概ありしも、午後五時過より隊伍少しく動搖を來せしを以て、我軍此機を逸さず直に總進撃に移り、三面一齊に起り轟然に敵の陣地に突入りたり。敵は、我破竹の勢を以てせる我突貫に此上抵抗するの勇氣もなく、其一部は一方に血路を開き鳳凰城街道に向て奔竄し、殘る大部分及砲兵の全部は砲の閉鎖機井に武器を毀ち白旗を掲げて降伏し、我軍全く蛤蟆塘を占領したり、時正さに午後六時なりし。

敵は我追撃の斯の如く急烈なりしが爲に最早味方死傷者を收容するに遑あらず、先を争ふて潰走せるを以て、此附近一帶敵の死屍到處累々として山を成し、遺棄したる砲車砲藥車を始め其他の戦利品は山野に充塞し、我軍萬歳を三唱し士氣大ひに振ふ。

一八 赤裸て先登す

近衛歩兵上等兵大橋啓吉なる者、其所屬聯隊が腰溝九連城の東方の高地に前進せんとするに際し、豐河の徒渉點偵察を命ぜられ、直ちに軍服を脱して赤裸となり率先河中に入るや、忽ち敵の目標となり雨の如く飛び來れる銃弾の下を潜りつゝ、中隊を誘導して無事に渡河を了へて彼岸に達せるも、再び軍服を纏ふの餘裕なければ裸體の儘敵の陣地に突入り、尙逃ぐるを追ふて馬溝の高地に達せしとき、敵もそれと見て癩に障へけん、急に踵を旋らしつゝ銃を擬し、アハヤ一發の煙と消なんとする一刹那、ナイニツ小癩なツと云ひ様、突如躍りかゝりて敵の銃を奪取し、これを逆手に取直すと見るより逸く、敵の腦天目がけて

赤裸て先登す



第一軍感状の嚆矢  
シタ、カに打据えたれば何條以て堪るべき一撃の下に之を撲殺したり、傍に在りし數名の露兵は孰れもこの上等兵の強勇無双なる働き振りに膽を奪はれ、更に抵抗する勇氣も消失せけん、孰れも地に叩頭しつゝ、降を乞ひければ上等兵は悉く之を捕虜として本隊に連れ歸れり、是より大橋上等兵の驍名は陣中に嚆々たり。

一九 第一軍感状の嚆矢

蛤蟆塘の追撃戦に方り、縦横奮闘の餘拔群の功を樹て、其中隊は殆んど全滅に歸し、其身も亦終に壯烈なる戦死を遂けたる、彼の小倉師團〇〇聯隊牧澤中隊長に對し、我軍司令官は即時之に感状を與へて其遺勳を表彰せられたるを以て、我第一軍が感状授與の嚆矢と爲す、左に其全文を掲ぐ。

歩兵〇〇聯隊第〇中隊

陸軍歩兵大尉 牧澤 尅夫

明治三十七年五月一日大尉は其中隊を以て聯隊の先頭に立ち以て蛤蟆塘の

敵を攻撃するや優勢なる歩砲聯合の敵は陣地に據りて頑強なる抵抗をなし、爲に我死傷は中隊の半を過ぐるに至る、大尉は尙毅然として攻撃を持続し且敵の逆襲に轉じ來るや直ちに之を撃攘して身斃るゝと雖遂に克く敵をして潰亂敗退に飯せしめたり其功績尙に顯著なりとす仍て本職は茲に之を表彰す。

明治三十七年五月一日

第一軍司令官男爵 黒木 爲楨

二〇 會戦後の状況と彼我の損害

九連城占領後宮城野師團は敵を安東縣方面に追撃し、一の抵抗をも受くることなくして沙河鎮安東縣を占領し、又遼河々孟を進みし小倉師團の一部は小數の敵を驅逐しつゝ、梨樹溝より湯山城に進出せしも敵は已に遠く鳳凰城に退却して其隻影を認めざりしを以て、直ちに踵を旋らして該師團に復歸せり。五月二日軍は依然九連城に滯陣し、騎兵を放ちて遠く敵を追撃せしめ、又夫々

會戦後の状況と彼我の損害



敵の敗戦理由

部署を定めて戦場の掃除に従事せしむ、此日曉來迅雷轟き暴雨到り、之が爲未だ收容を了へざりし戦場に於ける彼此負傷者の苦惱の程は殆んど想像に堪へざりし。

此役や我軍の死傷、將校以下一千〇三十六名、其内戦死者は將校下士卒を合して二百名なりし、而して敵の損害の多大なる戦場に遺棄せられたる者のみにても約一千を算し、之に負傷者を合すれば少くも二千を下らざるべく、捕虜はロ・エフスキー中佐以下將校下士卒六百十有三名、馬匹六十三頭、其他三吋速射野砲及彈藥車、小銃及彈藥等我軍の鹵獲せし戦利品の多大なる、殆んど枚舉に迫らざりし。

二一 敵の敗戦理由

(戦術上より視たる)

鴨綠江會戰に於て我に對抗せし敵の兵力は、歩兵約十五大隊半、砲兵六中隊、機關砲八門、及騎兵二十一箇中隊と判断するの至當なるが如し。敵の防禦正面は其兵力に比し著しく過大なりし、且つ敵の總指揮官は我軍主力

敵の敗戦理由

の攻撃をば之を沙河鎮方面と判断したるもの、如く、之が爲同方面に於ける防禦工事は之を九連城附近のものに比し一層堅固なりし、此故に敵は其總豫備隊をば之を沙河鎮に近き蛤蟆川河孟に位置せしめたるが爲、急に之を我軍の攻撃正面なる九連城に轉用せんには已に業に其時機を失したるもの、如し。且又敵は我軍進路の關係上、即ち韓國道路の状況に於ては、到底野砲及重砲の携帶を許さざるものと判定して毫も疑はざりしが如し。此故に敵の我を待つや頗る驕慢、徒らに其天嶮を頼みて我軍既に鴨綠江右岸を壓迫しつゝあるにも拘らず。日々多数の軍馬を鑿河に引き出して之に飲はしむるを常とし、又二十日以後彼の砲撃を行ふや多数の敵兵は高地上に曝露群を成して之を見物する等、殆んど恐るべき勁敵の眼前にあるを忘れたるやの觀ありき、然るに三十日我重砲の巨彈一たび彼等の頭上を掠むるや、始めて周章狼狽しつゝ爾來復片影を顯さざるのみならず、恐慌畏縮再び爲す所を知らざるに至れり。且又敵の幕營地は近く九連城の市街に連りて撰定されたるを以て、我重砲の散布射撃は痛く渠等の心膽を寒からしめ、爲に五月一日の總攻撃に於て同地附近



敵の砲兵全く沈黙して復讐志なく、流石に射程の遠大なるを自負せし敵砲も、我一發巨弾の騰差に忽ち神心喪失し、引ひて終に全軍の潰亂を招くに至り、以て我陸軍最初の會戦をして光榮ある勝利を博せしめたるは返すくも近代の大快事に非らずや。

### 一二二 敵將の敗戦報告

(明治三十七年五月五日佛國エクレール新聞所載、第一軍詳)

敵の總帥クロバトキン將軍は、鴨綠江會戦に主として指揮を取りたる彼のカシニタリン中將の戦況報告を以て之を露都に電奏せり、其大要左如。  
五月一日九連城に於て本官部下の各隊は優勢なる日本軍に對し名譽の苦戦を爲せり、依て左に其戦況を報告す。  
四月三十日朝、日本軍は前夜まで虎山の高地を占領したる我左翼を撃退したるに付、本官は虎山を占領したる第二十二聯隊の各大隊に向ひ、驍河を渡りボテチンザの陣地に引揚ぐべき旨を命じたり、此日朝來義州より九連城一帶の陣地

に亘り非常に猛烈なる砲撃開始せられ、其彈丸の發射數實に二千以上を算し、此砲撃後日本軍は攻勢を取るものならんと思はしめたり。  
夜間ザスウリチ將軍より依然舊陣地に踏み止まりて對戦すべしとの命令に接したり、予が陣地の左側に於けるボテチンザの淺瀬は第二十二聯隊の二個大隊及第六旅團の砲兵第三中隊之を防禦せり。  
五月一日午前五時、日本軍は驍河の淺瀬に向ひ攻撃を開始せり、少くとも一箇師團の歩兵は縱隊を爲し莫大の損害を蒙りつゝ、淺瀬を涉り、以て我第六旅團の砲兵第二中隊、并に猛射撃に依り敵の前進を阻止したる我速射砲中隊の側面砲撃を受くる地點を襲撃し、該日本兵は遂に尖端の陣地を占領したり。  
正午頃日本軍はチングウに在る第二十二聯隊の一個大隊を撃破し我左翼を包圍せりとの報に接す、午後一時第十一聯隊の二箇大隊及ムウラウスキ中佐の砲兵中隊は我左翼を應援せり、右はジャックゲに在る第九及第十聯隊の退却まで維持すべき命令を以て豫備中隊中よりザスウリチ將軍の派遣したるものなり。本官は第十一聯隊に命ずるに二個の防禦面を作り後方の瞰制陣地を占領することを

敵將の敗戦報告



敵將の敗戦報告

三八

以てし、ムウラウスキー砲兵中隊は之を以前の豫備に復歸せしめたり、又本官は第十二聯隊及砲兵第三中隊と速射砲とを第十一聯隊掩護の下に退却せしめたり、予が參謀長は各陣地に於ける後衛を引率せり。

午後一時日本軍は第十一聯隊の各陣地に接近し來り、爲に我砲兵第三中隊の退路は十字火砲撃を蒙り同中隊は道路に出づる能はず、因て日本軍と短距離に在る陣地を死守し其司令官ムウラウスキー中佐を失ひたるも尙戰鬥の終結まで同所に踏み止まれり、時に後衛の陣地よりは速射砲兵一中隊を送りたるも、其司令官ムウラウスキー中佐の危急を看取し、獨斷を以て他の陣地を占領し其兵士の半數及馬匹の全部を失へり、依て右司令官は約三萬五千の彈丸を發射せる速射砲十字火の下に在りて、其所屬の大砲をば人腕を以て之を山上に引上げんと試みたり。

第十二聯隊は纔かに血路を開きて其軍旗を救出し、第六旅團の砲兵第二中隊は他の道途より豫備隊に合せんと試みたるも其馬匹の過半と共に山腹を攀る能はず、已むを得ず舊位置に復し第十一聯隊と共に攻撃的に對抗せり、第十一聯隊

は尙約二時間其陣地を維持し大損害を蒙りつゝ、銃劍の突撃を爲し、山腹の罅裂を通して辛ふして退路を得たるも、該司令官ライミング大佐は戦死したり。

我軍は下士卒約二千將校約四十名を失ふ、日本軍の損害は蓋し莫大なるべし、我師團は秩序整然鳳凰城に退却し士氣依然として旺盛なり。

カシタリンスキー

### 二二三 清國官憲の報告 (露軍潰退に關する)

左に掲ぐるものは、露軍が五月一日の戰鬥に一敗地に塗れ、周章狼狽を極めつゝ、遠く鳳凰城以北に潰走せし顛末をば、其當時鳳凰城に同知たりし王安中より奉天將軍増祺に致せし報告書の全文なり、之を前章敵方の報告と對照しつゝ、讀み去り讀み來れば蓋多大の興味あるを覺ゆ。

花翎候補同知署鳳凰直隸廳同知王安中、謹  
稟

將軍麾下、敬稟者、本月十六日丑時、本城遠聞砲聲隱々然若不出百里外者午

清國官憲の報告

三九



清國官憲の報告  
四〇  
時始息、申刻有一受傷俄員、率十餘騎由南敗回、隨後來傷敗兵辨難數計、人有不及携槍馬有不及備鞍、負傷者棄械者狼狽奔馳自南而北、由本街經過概未紮住、其後來之車輛十六日申至十七日辰日夜絡繹不絕、駐鳳糧台查已預備火油尙未發作、俄軍紅十字會亦連夜撤退、十七日辰已之交又來受傷員將兵辨一起、傷重則人擡、次重則車載、其傷輕者騎、亦有步行者、未時又來敗回步兵一起填街塞巷而過、亦向西北薛禮站而去、酉時由北路新來俄步隊一千三百餘人紮於鳳城正南空曠之所、正扼鳳凰邊門來路、意在防守、是役也俄軍回鳳軍約千餘輛、傷兵約千餘人、敗兵約七八千人、其陣亡及在前敵堵禦者不知確數、傳聞日人在五龍背要路攻擊、俄軍不支致有此敗、車職即令飛馬出探、行至安東界長嶺地方、已不通行、亦無從得其確實消息、此十六十七兩日俄軍退敗鳳城之情形也、當俄兵奔回之時、謠言四起人心浮動、車職親督兵役出外彈壓、一面嚴禁槍掠華洋民兵財物、如有犯者從重法辦、車職預已稟承本道派定鳳城原有之東邊游擊隊、木植公司隊、及車職兵役、暨新集之商會々勇、回民練丁、現今分班梭巡晝夜

不息、四鄉屯會先已諭飭防備、互相聯絡兩日來人心稍定、諒無他虞、敗回俄軍間有飢渴交迫向商民索飲食者、雖無強橫情狀、最易滋生事端、車職勸令商會略備麵食湯水、專俾受傷兵辨以期不背公法、俄軍均稱道不置、事雖微細實於仁術政體兩有裨益、此鳳城第一次開警地方尙屬安謐之情形也、知關

憲置謹以稟聞、除分稟外、肅稟恭請  
鈞安、伏乞  
垂鑑 卑職謹稟。

光緒三十年三月十八日

稟爲俄軍敗退及鳳城地方尙屬安謐各情形也。

### 二四 紀念碑を摺鉢山に建つ

鴨綠江の役終るや、我軍司令官は特に澁谷兵站監に命じ、彼我戦死者の墓標をば當時の攻撃中心點たりし九連城の東北摺鉢山の高地を撰びて是を建てしめ、

紀念碑を摺鉢山に建つ



阿總督の告示  
別に又壯大なる紀念碑を其傍に建て、我陸軍最初の會戦に名譽の戦死を遂げたる將卒諸士の遺勳を表彰せられたり、黒木司令官の選文左の如し。

四二  
日露構難也、爲楨承任闔外、統率近衛第二第十二之三師團、取道於北韓欲以直入滿洲、而敵扼鴨綠江右岸險要與我對峙、我軍待戰機熟、下令急擊、第十二師團爲右翼、第三師團爲左翼、近衛師團爲中堅、整々堂々全軍齊發、涉江冒險肉迫敵壘遂擊退之、以略九連城安東縣一帶之地、實明治三十七年五月一日也、此役也我傷死計一千三十六名、內戰死者將校五名下士卒一百九十六名、而露兵損害數倍于我軍。是爲彼我陸軍最初會戰矣、仍刻其事蹟於石以傳不朽云。

明治三十七年十一月十八日

第一軍司令官陸軍大將男爵 黒木 爲楨 謹誌

二五 阿總督の告示

我軍が一舉鴨江右岸の敵を擊攘し初めて九連城に入るや、尙敵の總督アレキシ

フの署名に成れる東三省土民を戒飭せる大々的告示、嚴として門壁の上に存するを見る、其文に曰く、

大俄國欽命留守遠東大臣阿

爲  
割切曉諭事、照得東三省軍營商會紳民等一體懷遠、現因俄日構兵本留守擬定六條、特此通諭知之、

一 俄日交涉正值陸商之會、詎心懷叵測徒施詐襲攻我水師、似此勢動強迫碍難坐不得背城、借一保護利權、以杜侵犯華疆、而免窺窬俄界、

二 此次俄華利益本係枝接帶連援輔車相倚之論、分宜遇犯境合破同攻、乃據華國照會願守局外袖手之則、因此本留守要求滿洲各官所謂俄軍行營駐防購辦糧草一切、臨境應用各項不惟不應攔阻宜極力襄助、

三 東三省居民等無論士農工商、各宜安居守業、如俄軍抵境爾等以信相遇、俄軍不但不忍欺凌極力保護、

四 東清鐵路並德律風(電線)一概責成附近良民協力保衛、至各屬府官暨鄉會村長均應同心設法遏破壞實爲至感、倘或有人謀損不惟嚴懲謀犯、抑且惟爾



黑木軍司令官の告示

坐視謀損附近官民是問、

五騎匪(馬賊)者東三省之巨惡也、俄軍甚願滅此朝食以保護良民、爾○○○報復各宜多方幫助指明該匪山林廣集、何所務期掃盡巢穴滅其黨類、民人尙知匪跡阡結不露者與匪同罪、

六本留守課冀爾等居民與俄軍同心相遇、倘或華國民仇視俄政府定行殄滅此人決不寬貸、華政府亦自行設一担宜之法以保本國利益、

右諭通知

實貼通諭

一千九百四年二月初三日

(右告示文中○○○共に消滅の文字なり)

### 二六 黑木軍司令官の告示

我軍は九連城占領の即日、右の告示を剝き、之に代ふるに我軍司令官の告示文を以てせり、戦闘中所在に奔竄伏匿せる土民等漸く歸來して門壁の下に群集し

つゝ先を争ふて之を讀む、朝に越客を送り夕に吳客を迎へたる彼等辯髮民族の威愾果して如何。

大日本軍司令官陸軍大將男爵黒木

爲

出示曉諭事、照得惟我日本帝國置重於清韓兩國之保全、且切望東亞之平和實非一日之故、詎料俄國藐視與清國所訂公約及對列國累次誓言、依然占據滿洲害民虐吏暴斂誅求無所不至將逞吞噬之慾、夫滿洲即清國祖宗陵寢之地舉而委之于外夷豈其君民之所忍哉、倘或滿洲一歸俄國之領有乎韓國之保全無由支持極東之平和亦不可望、故以我帝國交涉俄國希圖維持平和於永遠、樽俎折衝亘半歲之久偏期妥議結局、不意俄國傲慢不遜竟不以交讓之意迎之、曠日彌久徒遷延其解決、陽則唱導平和陰則增大水陸軍備以欲使我屈從、於是我皇赫怒大詔宣戰、三軍齊發海陸並進名正義順、前我海軍一戰擊破俄國水師於仁川及旅順、使彼極東水師殆歸殲滅者真有以也、今者本司令官承乏閩外之重任於先鋒、統率大軍取道於北韓以入此境、皇軍所嚮無有勁敵行軍沿道擊退俄兵勇往邁進以期不留一俄兵於滿洲、若夫至於我軍令最嚴肅不啻秋毫決無所犯務期

黑木軍司令官の告示



沙漠を出て、泉地に入る

維持沿道治安撫郵民衆猶慈母於赤子、爾等清國民人善體此意各安其堵自勵其業、爲我軍奮然努力報効可也、若有對爾民衆加不法者不論何人即以口頭或文書告訴所在官憲、我有司應照律公平處斷、如其徵用房屋船車牛馬購買柴秣糧肉等、凡我軍隊所需者敢不遲疑應速供給當即支發公平價格賃租、倘或爲奸細通敵國放謠言迷良民、抑又切斷電線破壞道路橋梁故意隱匿軍需物料等、苟有妨礙我軍行動者嚴拿究辦毫不假貸、不止獨罰犯者一人、如有鄉堡吏民亦不免分其責、各宜懷遵毋違特諭。

右仰示諭

迎變曲 (邊廷實)

弓如滿月向江開。箭掃寒潮卷浪回。  
水上龍騰突深避。吾皇元爲射蛟來。

### 二七、沙漠を出て、泉地に入る

「韓國内地の行軍はサワラ大沙漠の商隊旅行よりもより多く困難である」とは其當時從軍某外國武官の言であつたが、蓋適評であらう、但しこは單に彼の道

路の險惡を意味してゐるばかりでなく、沙漠中のその如く物資の缺乏をも意味して居るのは勿論であつた。然るに我軍一たび鴨綠江を渡りて安東縣に入るに及び、道路は一變して廣濶なる坦道となりて、交通の便は彼の鴨綠江の水運と共に開け、その日々集散せる物資の豊富なるを見るに及びて渠等は茲に始めて沙漠を出て、泉地に入るの思をなせりと云ふ、  
獨り外國人ばかりでなく、我々從軍者も猶然其通りであつて、長い間韓北の野を廻つて野蒜や芹を摘みて副食物を補ひし昨日の境遇に比して、滿洲に這入つてからは、肉あり、魚あり野菜菜物ありの有様で、安東縣で以て彼の鴨綠江名物の銀魚を肴に紹興酒を酌みて久し振りに枯腸を沾ほし、一醉陶然として新らしき蓆子の上に溫柔郷裡の人と爲りし當時の愉快さ加減は、とても内地人の想像し能はざる處であつた。

### 二八、舌人笑話

日清戰爭乃至北清役の際に於ても頗る通譯の失策談に富んで居たが、我軍が沙

舌人笑話



河鏡を占領してから早速愛嬌ある通譯の失敗談が傳へられた。沙河鎮なる鴨江河岸で兵站部附某將校が、或る必要上そこらに繋留せる支那戎克の帆柱を倒さしむべく同行の某通譯を頼みつゝ吩咐けた、然るに其通譯は長年の間日本ばかりに居て支那語を使用しなかつたものだから、帆柱といふ名詞は勿論、倒すといふ動詞まで忘れて了つてどう考へても思ひ出せない、ソコで已むを得ず畢生の知慧を絞つて、這船の木頭要睡覺々々這の船の木を睡せるねせろと臆面もなく遣つて退けて、戎克の船頭はこの奇怪至極の命令に接して、呆氣にとられて暫し躊躇てゐたが、船の中にゐた今一人の倭者が氣轉を利し好いと領きつゝ忽ち帆柱を倒したので、通譯子頗る得意であつたが、該將校は多少支那語を解するので通譯子の肩を叩いて「イヤも陰で帆柱が睡覺して難有と」と一番皮肉に出られたので、誰知らぬと思つた通譯子頭を掻きつゝ遽かに大開口したそうであつた。鳳凰城で某代用通譯が帽子といへる發音がわるいのて頓と土人に聞とれなかつたに焦心で、腦袋的蓋見(頭の蓋)と叫けんで土人を驚かしたと好一對の笑話として毎度我々仲間の談話の種に上るのである。

二九 彈丸竭き乘馬斃れて臣が事終んぬ

露兵が彼の五月一日の會戦に脆くも敗れ、鴨綠江一帶の衝を棄て、倉皇鳳凰城に退却するや、我騎兵は隙さず追撃して之を北方に壓迫せり、時に加瀨騎兵聯隊に伍長佐々木幸治なるものあり、平素勤勉率直を以て名あり、五月八日伍長は敵偵察の任務を帯び、某將校斥候に屬して沙河鎮より湯山城を経て王家屯附近に到り、更に土城子の村落に達せんとする時、敵の徒歩騎兵約一小隊忽然として我左側に現はれつゝ我斥候隊に接近し來れるを以て、斥候隊は一時退却することに決し、佐々木伍長は自から乞ふて退却掩護の任に當り、馬上射撃を繼續しつゝ敵を惱まし、以て我斥候隊をして安全なる地點に迄退却せしめたるも、敵は益々肉迫し來り、伍長は防戰甚だ力むと雖奈何せん彈丸全く竭き乘馬も亦敵彈の爲に起つ能はざるに至れり、佐々木伍長は此の悲境に陥るも尙屈せず刀を揮ひて奮闘し、一時敵をして逡巡せしめたるも、身は重圍の中に陥り到底安全に脱出する能はざるを覺り、小閑を得て鉛筆を探りて紙片に絶命の辭

彈丸竭き乘馬斃れて臣が事終んぬ



一兵一卒敵の將校を生擒す  
を書し、先づ己の愛馬を屠殺して敵手に委せざらしめ、然る後側傍の民家に入り、從容自若として諸肌服て自盡す。

三〇 一兵一卒敵の將校を生擒す

蛤蟻塘の追撃戦に大打撃を蒙りし露軍が退路を扼せられて殆んど支離滅裂に歸し、而も逃場を失ひつゝ、其附近なる山谷村庄に伏匿するもの亦尠からず、當時湯山城附近に在りて臨時警戒の任に當りし某輸卒隊附憲兵上等兵加藤清七なる者、會々土城子の土人袁世財が敵の敗兵を隠匿せりとの密告に依り、同隊の輸卒石田龍仙なるものを率ひて該處に到り周く索むるも其踪跡を得ず、百方搜索の餘其近傍なる小丘の麓に敵の將校らしき姿を瞥見するや、上等兵乃ち石田を勦ます其刀を把て之を石田輸卒に授け、自から拳銃を擬しつゝ奮然之に嚮ふ、石田も亦刀を抜いて之に通る、敵の將校等忽ち懼服し各其手にせる處の武器を投じて降を乞ふ、加藤等乃ち將校下士各一名を生擒して還る、將校はザバイカル哥薩克騎兵チ、ンスキー第一聯隊第四中隊長大尉某にして、下士は同聯隊第

一中隊騎兵軍曹某なりし。

三一 梨花如雪

五月十一日軍は沙河鎮の假營を撤し鳳凰城に向て前進す、途中湯山城に宿す、沿道の部落概ね敵の燒却する處となり、戦後の荒景轉た凄凉たり、時恰も五月に入りてより邊疆春漸く到り、物色蕭條たる彼の湯山城の古驛も亦春色方に闌にして、梨花爛熳と咲亂れ、只看る白雲漠々として間々一點の杏紅を綴れるの風光頗る征客を慰むるに足れり、軍高級副官岩滿中佐霧峰風流を解す、晩に彼の梨白雪に似たる宿營地の樹間を歩して劇賞すること多時、即興一絶を得て之を余に示す。

塵穢無復、隻兵存。敵壘空看碧血痕。  
一夜枕戈眠月下。梨花如雪滿寒村。

三二 不染の股引半染となる

梨花雪の如し。不染の股引半染となる



烏合の衆を以て新來氣銳の敵を挫く  
 五二

從軍大阪毎日記者奥村不染、一日鳳凰城内の宿舍に在りて頗る鬱ぎ込み、其故を問へは渠乃ち壁に掛けたる黒斑點々たる繭紬の股引を指し、「安東縣で折角新調して来た一張羅の股引が這樣なさまになっちゃった」と無口の不染其餘を語らず、座に大阪新報の小川老あり、腹を抱へて手に謂つて曰はく「ナニ斯いふ次第ぢや、無精者の不染先生、新調のスボン下で行軍中いつか入手観音を宿して居るので、韓人に吩咐して洗はしたところが、安物の靴足袋と一緒に煮たので、ソレこの通り不染の股引も遂に半染となつた次第さ」と予も亦この滑稽を聴いて噴飯に禁えず、取敢へず一句。

股引は鹿子斑となりけり  
 しらみ絞りと人や見るらん

狂體の腰折を口吟めば、一座手を拍て哄笑す、流石に寡黙の不染も亦苦笑を禁じ得なかつた。

三三 烏合の衆を以て新來氣銳の敵を挫く

鳳凰城滯營中のことなりき、後方兵站部韓國安州に優勢なる敵の來襲を蒙り、當時の兵站司令官事務取扱加曾利大尉惣次郎は小數なる守備隊及各種の非戦闘員を糾合し、力戰の餘遂に之を撃退せし勇壯なる逸事あり、左に其顛末を掲げん。

當時寬甸通化方面を扼せし敵の哥薩克騎兵第十五聯隊は、我後方擾亂の目的を以て、五月中旬鴨綠江の上流を涉り、楚山方面より熙川、价川を経て其一部を价川附近に殘置し、約三百餘の鐵騎を擧げて安州兵站部を襲撃すべく慈然南下し來れり、時に我守備兵は僅々一箇小隊に充たず。

加曾利大尉は右の諜報を得て直ちに、一面には价川及寧邊方面に斥候を派して敵情を偵察せしめ、一面には安州城の四門を鎖して其警戒を嚴にせり、之と同時に大尉は獨斷を以て後送兵器の運送を中止し、且俄かに輸卒及び軍役夫を召集しつゝ、銃の操法を教習せしめ、以て急に應ずるの準備に汲々たり。

果然敵は北門外に殺到したり、是に於て大尉は守備隊、倉庫員、輕傷患者、補助輸卒、軍役夫等を糾合して各方面に於ける防禦部署を定め、以て新來氣銳の

烏合の衆を以て新來氣銳の敵を挫く  
 五三



烏合の衆を以て新來氣鋭の敵を挫く

五四

敵兵に對し奮闘勇戦十數時間の長きに亘り、我兵孰れも一以て十に當らざるなく、就中北門守備の任に當れるものは敵の側射を受け苦戦極度に達す。會々警を聞き平壤より援兵の到るあり、城内の守兵益々勢を得て守勢より攻勢に轉じて遂に之を撃退し、以て我の集積倉庫の糧秣をして安全ならしめたるのみならず、軍の後方連絡をして斷絶の厄を免れしめたるは、偏に大尉の事に處して宜しきを得たると及我各種の兵士等が協力奮闘の結果に外ならず、此役や我死傷下士以下十名敵の死者將校二名下士卒十四名、重輕傷三十五名にして并に下士以下二名の捕虜あり、試みに當時の戰闘に參加せし人員の種類を擧ぐれば。

- 一 兵站守備隊將校以下七十名
- 一 安州兵站司令員加曾利大尉以下主計三名下士以下數名
- 一 輜重監視隊の殘留員及補助輸卒隊特務曹長以下五十三名
- 一 殘留軍糧餉部員白井三等主計外韓語通譯馬卒各一名
- 一 白井主計の馬卒某は戰闘の際腹部に二ヶ處の貫通銃創を負へり。

- 一 憲兵上等兵以下五名
  - 一 野戰通信員及郵便吏十一名
  - 一 酒保及内地商人四名
  - 一 軍役夫二十七名
- 右の内銃器を採りしものは全體を通じて僅に一百三十四名なりしと云ふ。

三四 モルヒネの奏效醫者と見違へらる

これも亦鳳凰城滯陣中のことであつた、予は軍司令部の或る用務を帯びつゝ軍政署憲兵軍曹佐藤某外一名を伴ひ、半ヶ月餘を費して彼の鳳凰城南郷と稱する城南一帯の地二十二牌約一百餘堡の新占領地を巡回した。勿論我人跡の未だ到らざる處なのである。

六月上旬に城内の道台衙門を發し、高麗門から東楊木溝なる西南守備線に於ける我最前哨を出て、双廟子、駱駝嶺、土牛子、媽々林子、及び彼の南郷馬賊の巢窟と稱せられたる黒魚泡、背陰寺の各郷を無事に歴巡し了り、小黒山てふ

モルヒネの奏效醫者と見違へらる

五五



谷地の一小部落に着し、于正倫と云へる堡正の家を訪ふて一宿を求めた、スル  
ト物見高い土人の癖として部屋の中は忽ち菲臭い老若の山を築いて、「千金丹を  
下さい、寶丹を下さい」とも極りの要求を村夫子らしい、胡麻鹽髯の口から發  
せられた、毎度のこととて蒼蠅くて堪らないので、没有くと繰返しつゝ最後に  
「寶丹などは持合せぬが併し病人があるなら併せて來い、癒してやらう」と少  
しく大きく出たので村學究先生、好々と領づきつゝ早速十四五歳ばかりの少年  
を擔ぎ込んだ、聴けば疳症で目も口も引き吊つて了まつて、三日三晩一睡もせ  
ぬとのことである、ソコで折角のことだから一時的魔睡用として持合せの極め  
て少量なるモルヒネ九一粒を與へて靜に臥さしむべく命じた、處が劇藥の效能  
は争はれぬもので連れ歸つてから、僅か一時経つか經たぬ間に眠に就いて而し  
て目が醒めてからは、カラリと良くなつたそうて、例の村學究先生其効顯の著し  
さに少からぬ敬服したと見え、「好大夫來々々」(名醫が來た々々)と村中觸れ歩い  
たので、翌朝早々から老若男女、種々雑多の病人か詰めかけて門前市を成し、  
銘々診察を乞ふて已まず、主なる用事が抄取らずして非常に弱らせられた滑稽

モルヒネの奏効醫者と見送へらる

もあつた。

征途春老(小戀)  
夜靜落花雨未晴。征途春老風風城。  
三更夢繞故山處。忽憶天邊杜宇聲。

三五 雨の行軍

所謂滿洲の雨期なるものは、大概七、八月の交で、恰も我軍各團隊が鳳凰城附  
近から行動を起して、北は賽馬集より南は摩天嶺附近一帶の地點に前進せる際  
に於て丁度相憎降雨の季節に入り、連日淫雨霏々として途中の行軍頗る困難で  
あつた。殊に該地方たるや南滿洲連山脈の中間に位置し、彼の鳳凰廳と遼陽州  
とに流出せる鴨綠江並に太子河の水源地であるので山間谷地に於ける溪流の夥  
いこと實に非常である、遼陽本街道ですら北は新開嶺摩天嶺の山脈を貫ひて、  
南は鳳凰城に達する間大小峰巒の屈起せるもの宛がら怒濤の如く、それが爲  
道々路の崎嶇峻険なるは勿論、鳳凰城から雪裡店を経て分水嶺に到れる無慮二

雨の行軍



十有里に亘れる一帯の谷地は有名なる鑿河の上流であつて此間正さに二十有八箇所の徒渉を爲さざるを得ないので、平生の通行すら旅客の苦むこと一方ならざるに況して雨期に於ける大行軍は一層の困難を感ずるのである。而して此等の溪流は平素に在つては脛を浸すの浅處に過ぎないが、一朝降雨に際せば忽ち暴溢して濁流滔々たる急瀬となり、糧秣の輸送は勿論人馬單獨の旅行すら一時全く杜絶して之が爲に糧食の欠乏を來たし、忽ち減食若くは一時全く絶食するの悲境に沈淪するのである。吁減食！流石に忠勇比なき我兵士も減食の苦痛は彼の戦場に負傷せし苦痛よりも酷し、遼陽街道林家台附近に於て某工兵隊が架橋作業間に於て恰も四合減食(平素は六合なり)の命令に接して、偶々橋名を附するに際し四合橋と云へる餘り芳ばしからぬ紀念的命名を以てしたが、如何に減食の苦痛が彼等兵士の腦裏に刻まるゝかが想像し得らるるであらう、それゆへこの季間に於ける輸卒及補助輸卒が輸送に關する苦心と勞働とは實に言語に絶し、且往々にして渡河中に於て洪水の爲に溺死した兵士もあつた、減食令の出てし當時岩満中佐は狂歌を唸つて曰く。

雨の行軍

五八

五月雨の空に心もくもりけり

縁日商人食ふや食はずや

三六 輸卒職に殉す

小倉師團集馬集方面にあり、雨期に際し沿道の河川悉く漲り輸送杜絶し、師團の全部爲に減食數日に亘る、當時該師團附屬の糧食縦列は賽馬集より新開嶺兵站支部に到り糧秣を受領し來るべき命を受け暴雨を冒しつゝ八里の峻路を往復し、歸來賽馬集の前面に横れる鑿河上流の河岸に到れば、河水益々暴溢し激流滔々宛乎として小天龍川を現出す、進まんか人馬の淹溺を奈何、止まんか前方部隊の糧秣空乏を如何にせんと、進退維に谷まり衆手を拱ぬいて空しく天を仰ぐのみ、輸卒中に石橋重次郎なるものあり、決然として起ち輸卒隊長に乞ふに自から瀬踏の任に當らんとを以てし、軍服を脱して身を濁流澎湃の中に投ず、既にして彼處此處と淺瀬を踏査しつゝ、將に彼岸に達せんとするとき、足踏み滑らして水中に顛倒し、瞬間に數百米の下流に押流され、憐む可し石橋輸卒は

輸卒職に殉す

五九



黒木大將の恐いもの  
遂に水中の藻屑と消え失たり、然るに之が爲縦列はかの濁流中に徒沙場を發見して遂に渡河目的を達するを得たるは、偏にこれ石橋輪卒が一身を犠牲に供し、他を激勵したるの致す處たりしなり。宜なり軍司令官は之に威狀を授け以て其勳功を表彰せること。

戦車く任重き。輪卒の勞苦を思遣りて(小續)  
矛とりて仇うつ身にしあられとも  
心つくしはおなし益良雄

三三 黒木大將の恐いもの

我第一軍が陸戰劈頭鴨綠江に大捷を博してより、黒木大將の名聲遠然中外に擴まり、三尺の童子も亦將軍の名を記するに至り、中外知名の士及び學生等の祝信を送るもの積みて山を爲す、當時東京なる某小學生徒が司令部某將校に宛てたる書信中に「黒木大將の恐いものは何なりや」との奇問あり、某は又戯れにこの奇問に應ふるに左の奇答を以てせり。

三八 草河口の清遊

黒木閣下は滿州の蠅と韓國の道路と而して行軍中の雨を非常に恐がられ申候、就中雨が長く降りつくと其爲に輸送が杜絶て兵隊が餓餓るのでこれが何より一番恐ろしいと申居られ候、以上。

草河口滯陣中霖雨新に霽れ、分水嶺下、軍の宿營せる點々たる茅屋は滴るが如き新緑の中に埋もれて、青嵐袵を撲ち、十里の溪山夏景氣の幽趣掬すべきであつた、就中軍砲工兵部の宿舍が一番、人寰に遠ざかつてゐて、其附近には楡や楓や白楊樹などの鬱蒼たる林があつて其間を縫ふて玲瓏玉の如き清泉がチヨロチヨロと流れてゐるので、天然其儘の景色と雖も頗る征客の遊意を惹くものがあつた、然るに見玉工兵部長少將はこの風致を利用して一の公園を作り出すべく、設計されて、清流を堰きとめて池を造り、丸木橋を渡し、大小自然石を按排して草花をあしらひ、樹間藜苔濃やかなる所を撰びて四阿を建て、ベンチ代用の自然木をさへ、處々に排置され、尙ほ草花園と筆太に記るされ古雅なる



繪はがき美人  
六三  
柴門まで設けられた巧妙なる手際は、何様見ても俄拵のものとは受取れなかつた。

工事全く竣りて此處に園遊會の催があつた、當日我司令官、殿下以下幕僚一同林間設けの席に團樂しつゝ、一瓶の酒、一椀の薩摩汁に陶然として坐談湧くが如く、夜に入つては木の間に懸れに吊された球燈や池の端に建て并べられた地口行燈に點火したので園内一層の幽觀を添えた、興闌なるとき從軍寫眞班が新に齎らした鴨綠江會戰の幻燈を催し、尙森雇員得意の薩摩琵琶に耳を澄まし、半日半夜の清遊に俗鴈を一洗しつゝ孰れも積日の勞苦を忘れたのであつた。

草河口征伐(小替)  
分水嶺頭山雨霽。行營半在白雲中。  
夜來澗水前溪漲。洗去天兵流血濺。

三九 繪はがき美人

陣中唯一の慰藉物は寫眞若くは繪はがき美人を見るに在り、されば上は鬚髯銀

の如き老將軍より、下は山印の絆纏を着たる軍役夫に到る迄、汲々乎として只管其蒐集の多からんことを祈るこそ可笑けれ、友人某余に寄するに新版繪はがき新橋尤物の浴後姿を以てせり、予戯れに左の一絶を題して之を壁間に掛く。

浴後佳人新媚容。輕羅夏夕逐涼風。

不須粉黛自妖艶。唇上爲誰一點紅。

會々東京日々記者黒田鹿水來りて之に和す。

出浴嬌態未整容。淡妝自欲起涼風。

方知雨後一枝李。凌駕櫻桃万朵紅。

岩滿中佐亦之を見て筆を採りて和すらく。

空閨粉黛爲誰容。漫使雲鬢掩晚風。

知否摩天嶺下客。杜鵑聲裡血淚紅。

次日引田參謀も又至り、得意の狂體を以て、韻を次て曰く。

妖顏無何好相容。只逢替入勿喰風。

繪はがき美人



本是れ一葉の美人給はがき。而も鬚男四人の智囊を絞らせて、ヤンヤを極めること斯の如し、陣中ならては逆も這様な呑氣は出来ぬ仕儀なり、呵々。

新刀の切味  
然別有意慰征客。何卒自分來的紅。

### 四〇 新刀の切味

宮城野師團某聯隊少尉吉井靜吾、小哨司令として摩天嶺下我最前哨に在り、七月四日天未だ明けず敵の大部隊突如として來襲す、時に濃霧咫尺を辨せず、少尉即ち全力を擧げて之に當り忽ち混亂格闘の一大修羅場を現出し、彼我の將卒皆刀劍を揮ひ相突所す、我兵力戰一以て十に當らざるなし、吉井少尉元より體劍に長ず、初めに部下に語て曰く「僕が秘藏の新刀助定を試すの時到了り」と一たび鞘を拂へば十數人の敵忽ち斃れ、流石に猛烈に突貫し來りし露兵も一時之が爲に披靡せり、是に於て少尉は且戰ひ且退き漸くにして我本防禦線に達するを得たり、然るに敵は雲霞の如く追撃し來り少尉は再び苦戰に陥りたるも少しも痿ます、大聲叱咤、部下を督勵せるの傍ら、更に敵の二將校及び數名の兵

卒を斬殺し且一方を突破して後方に退却したり。已にして我一個中隊の來援するあり、少尉は之と協力して三たび突撃を行ひ、遂に敵をして百五十有餘の死傷者を委棄したる儘潰亂に歸せしめたり、戰終りて我死傷を檢するに、その最も少きものと雖身に數創を蒙り其多きものは二十四創に及べり、亦以て當時戰鬪の烈しかりしを證するに足らん、而して少尉の戎衣は斑々たる血痕を印すること宛がら血達磨の如きも伴に身には微傷だも自はず、而して其軍刀は刃を欠くこと恰も鋸齒の如く、一見人をして其格闘の激烈なるを忍ばしむ。

凱歌(沈明臣)  
街枚夜度五千兵。密領符軍號令明。  
狹巷短兵相接處。殺人如草不聲聞。

### 四一 虎口を免る

吉井少尉の部下加茂川二等卒(德平)は逆襲當時小隊を離れ前方高地に在り、展望

虎口を免がる



白馬將軍を逸す  
六六  
哨に服務中、本隊即ち小哨の方向に敵襲あるを覺り、之に對し射撃を開始するや、一隊の露兵忽ち渠の背後より急襲し來りて渠を生擒せんとす、加茂川畢生の力を奮ひつゝ、戰鬪せしも悲ひ哉衆寡敵せず、遂に敵の爲に捕へられ身に帶ふる處の武器彈藥を奪はれ、遺恨遺る方なく只心に神を祈りつゝ、折を見て脱出を企てんとす、幸に夜暗混戰の際なりしを以て隙に乘して逃走し一生懸命、山腹を攀ち、岩窟の中に匿る、敵の監視兵百方之を覓むれども遂に獲る能はず、稍少焉にして敵は遂に撃退され後方に潰走するを知るや、二等卒は匍匐して窟中より出て、足下に散亂したる敵の銃を取りて逃ぐる露兵を狙撃しつゝ、其三人を仆し、徐ろに囊に奪はれたる己の武器を搜し索め、意氣揚々として其本隊に復歸したり。

四二 白馬將軍を逸す

青木上等兵(留吉)吉井少尉に屬して奮闘の餘、少尉と共に將に中隊に復歸せんとす、然も敵の追撃甚急なり、偶々押せ來る敵の先頭に立ち白馬に跨り兵を麾ね

きつゝ進み來れるあり其容貌風采凛として宛がら好箇の將軍の如し、青木以て敵の上級指揮官と爲し、銃を取直しつゝ、狙ひを定めて一發之を放つや、彼は狼狽を極めつゝ、忽ち卒伍の間に匿る、上等兵尙も引續き之に射撃を試みたるも終に中らず、戰終り人毎に語つて曰く「曩日の戰鬪に白馬將軍を斃す能はざりしは終生忘るべからざるの恨事なり」と、然るに後數日當時上等兵の所謂白馬將軍なるものは上長官に非らずして喇叭長の支那馬に跨れるものなるを知るや、爾來復白馬將軍のことを口にせざりし。

四三 笑て瞑す

摩天嶺の役歩兵曹長桑名耕作、部下を應いて突進激闘し、身に十餘創を蒙り未だ勝敗の決を見るに及ばず恨を呑みて路傍なる叢の中に仆る、須臾にして敵兵色動き我兵の追撃戰に轉ずるに及び、一兵卒其呻吟の聲を聴き、探り索めて其桑名曹長たるを知るや、負ふて之を後方の假紉帶所に致す、時に曹長は死に垂んとせるも尙苦痛を忍びつゝ、敵狀を問ふ、某審かに敵兵潰走の狀を語る、桑名

笑て瞑す



曹長之を聞き終りて嫣然一笑愉快々と微かに連呼しつゝ遂に眠す。

### 四四 兵法の新發明

吉井小哨長敵の重圍に陥るや、一等卒小野友平なる者戰鬪尤も努め敵を斃すと數を知らず、既にして小哨長の命令に依り、敵襲を前哨中隊に報告せんとせしも、彼我混戰の際道路梗塞し、容易に進路を求むるを得ず、一等卒是に於て奮然一方を突撃し、辛ふじて我中隊の據れる掩堡の下に達し、先づ試みに敵襲敵襲と連呼するに、其附近の人語奇異にして耳に慣れざるものあり、怪みて暗中に之を透視すれば詎ぞ料らん、是れ我味方の兵にあらざして敵の一部隊已に業に我前哨中隊の抵抗線に達し居らんとは、小野一時は悸つとせしも極めて沈着に他の方面に活路を開き、以て虎口を脱するを得たり。小野後に其戰友に語つて曰く「暗中若し敵に包圍せらるゝときは、只黙して聲を發せず敵と共に進退するを可とす、一たび狼狽して聲をたつれば危害立ころに到る、是れ吾實験上より得たる兵法の新發明なり」と。

### 四五 武運めでたき男

摩天嶺の役、山本一等卒佐太郎戰鬪斥候となり數名の戰友と共に遼陽街道を西に前進す、夜暗ふして咫尺を辨せず誤て敵中に陥る、而も敵は之を覺らず、是に於て山本は獨り敵の後方に脱出せんとするや、敵の一兵卒忽ち其傍に來りて肩を捉へて喋々嘯々し、其狀恰も味方と思ひ違へて前進を促すもの如し、山本黙して之に隨ふ、少焉して敵の兵卒其味方に非らざるを覺ると同時に銃槍を振して之を刺さんと欲す、山本縱横奮鬪の餘暗に紛れて漸く身を脱し無事に本隊に歸還するを得たり、當時相傳へて武運めでたき男と爲す。

### 四六 頓智の弩

陸軍歩兵一等卒水野直治、資性沈着にして且機智に富む、摩天嶺の役暗中數名の哥薩克騎兵に取圍まれ、暫時接戰せるも衆寡敵せず、纔に血路を開いて路傍の樹林中に匿る、敵騎追ふて到り馬を下りて水野を覓むること急なり、水野傍

武運めでたき男の頓智の弩



七〇  
戦友よりも武器が大切。幽霊の正體見たり枯尾花  
に生へし手頃の樹を撓めて弩に代へ、敵の近接するを待ちて突如之を放つ、敵の一騎卒激甚かに其面部を撲たれ。非常に狼狽しつゝ一種の叫聲を發して一目散に逃げ失せて復水野を窮追せず、仍て以て身を全ふすることを得たり。

#### 四七 戦友よりも武器が大切

岩淵一等卒竹次郎資性着實にして、平素規律を守ること嚴に且武技に長ず、摩天嶺の役戦闘漸く酣となるや、一彈飛び來つて渠の銃身を掠め受として聲を爲す、岩淵倉皇銃を検し其毀損なきを見るに及びて始めて意を安ぜしもの、如く傍なる戦友某を顧み其安否を問ふ、戦友渠に戯れて曰く「君は戦友よりも武器の方が大切かい」岩淵眞面目なる口調にて答へて曰く「勿論ぢや」

#### 四八 幽霊の正體見たり枯尾花

歩兵一等卒藤原峰藏なる者性率直にして然も燥急、之が爲平素陣中に在て屢々愛嬌ある失態を演ぜり、摩天嶺に敵の曉襲を企つるや、藤原も亦頗る勇敢に格闘し、單身敵の通ぐるを追ふて樹林中に入り、其處此處と搜索しつゝ前方を窺ふに、暗中彷彿として大兵肥満のロスケ一人、折敷の姿勢にて我を要撃せんと待構ふるもの、如し、是に於てか藤原は猶豫せず跳りかゝつて之に近づきその胸部を目がけ束も通れと劍尖にて之を突刺す、突刺されたる敵は尙も動せず又聲なし、怪みて之を探れば想不到當の敵たるロスケにはあらで枯楊の切株ならんとは、事滑稽に屬すと雖、亦以て當時如何に混亂を極めたるかを察するに足る。

#### 四九 夜盲症の剛情

宮城野師團某聯隊歩兵一等卒本間長太郎元來夜盲症を病む、例の摩天嶺の敵の逆襲に際し、積日の炎熱燃くが如きに加ふるに勞働過度を以てしたるが故に宿病再發し、之が爲夜間の運動意の如くなる能はず、分隊長以下戦友一同百方之を論して後方に留置せしめんと欲す、本間張目しつゝ曰く「命は天なり、命の賜まる所留まるも亦免れず、寧ろ戰場に斃るゝを以て快と爲す」と頑としてそ

夜盲症の剛情



大和心  
の忠告を斥け。踏々踏々として隊伍に跟随し、屢々倒れて屢々起き辛ふじて落伍を免れつゝ、漸く敵軍の下に肉迫せり、時に天漸く明け眼も亦漸く明らかなり、本間雀躍しつゝ、戦友を顧みて曰く、「これからが乃公の世界ぢや」と率先突撃遂に優勢なる敵を驅逐するを得たり。

五〇 大和心

松澤一等卒(喜之助)は東北武士の系統にして血あり涙あるの良兵士なり、摩天嶺格闘戦に敵の我兵士を斃すや、概ね眼を抉り腹を刳り或は軍服を剝脱して裸體と爲すなど、その死骸を侮辱するの酷しき見るものをして悉く眼を裂かしむ、松澤も亦之を見て心大ひに憤慨し誓て戦友の爲に報復せんことを期す、既に絶て一名の敵の重傷を負ひつゝ、戰場に委棄せられ、氣息滝々として命の絆將に絶へんとするをば目あたり之を睹るに及び、惻隱の情禁せんと欲して禁ずる能はず、巽なる怨も急に打忘れ、己の水筒中の水を與へ、寶丹を含ましむるなど、之を勞はるの状宛がら我戦友に於ける若きものあり、下士某之を見て彼を冷評

して曰く「松澤復讐は如何ぢや〜」彼之を聴き忽ち前言に想到し、頭を掻きつゝ、「此等の兵は元來愚昧にして人道を解せざるの罪に坐するのみ」と言ひ終りて又介抱すること元の如し。松澤の舉動たる吾敷島の大和心を發揮し盡して餘蘊なしと謂ふ可し。

五一 倭寇撃退の碑

碑は摩天嶺の東麓關帝廟の裡に在り、蓋し日清戦役の際に於て我立見旅團は彼の鳳凰城を根拠として、其一小支隊をば遼陽街道に沿ふて摩天嶺附近に前進せしめ、幾くもなく本隊に復歸せしめたる事實は之れあるも、例の支那人のこゝて是を以て直に摩天嶺より日本軍を撃退したるものとなし、針小棒大的に其當時に於ける敵將の頌徳碑を建立して得々たる處流石に支那人的にして一見噴飯に價するものあり、

碑文中富康三造とあるは今の富岡少將(三造)を指せるものならんか。

倭寇撃退の碑

蓋聞天下非常之人、必待非常之人、而天下非常之人始能成非常之功、甲午之歲、



黒木軍百話

倭奴入寇擾我屬國、侵我郡縣、交夷我農工、虔劉我邊陲、問罪之師屢次失利、沿海城隘俱爲倭有、倭之先鋒名富康三造者尤屬猛悍銳不可當、由鳳凰城率大股賊三千餘人、意欲涉細河踰高嶺摩天嶺直撲襄平(遼陽)目視陪都(奉天)、斯時四境烽烟生民塗炭、一聞鼓角草木皆兵、幸有盛軍(孫)總統大人、私相議曰、如此勁敵非謀勇兼備者不可嬰其鋒、因命管帶盛宇右軍老左營總鎮郭公印學海(雲)雲濤者安徽合肥之人也、率領洋鎗隊五百名、駐紮五峯嶺摩天嶺之異名適當其衝、十月九日倭寇蜂擁而來、遍野旌旗山川變色、登高一望士皆膽寒、郭公因誓于衆曰、大丈夫以身事國何惧之有、是戰而勝功則同書於史冊、戰不勝則同死於疆場以馬革裹屍、還誠千載一遇之快事也、衆拜服、各授以計、分兵十餘處借山埋伏、自率死士百餘名奮勇陷陣自辰至午、詐爲退怯、且戰且走、誘至其間、伏兵齊起、子彈如雨山谷應聲、富康三造猝不及防、子貫其胸登時損命、敵人無主餘賊亂竄、其鎗斃跌傷自踐踏而死者不可勝數、從此退踞鳳城不敢正視高嶺、遼瀋以東山關以西不知幾千萬戶其能各保身家性命者皆郭公之力也、凡我旗民人等無論鄉城市鎮、均蒙保衛同沾再造之恩永免蹂躪之慘、則公之德被生民者遠矣、因勒之于石

以垂不朽焉、又從而歌之曰、雲山蒼々河水洋々、郭公之德山高水長、大清光緒二十一年巧月中旬閭會公立

曉曉摩天嶺(來原小體) 路入羊腸曉轉幽。 嶺々朔畔月如鉤。 露華嶺上三千仞。 散爲新涼萬斛秋。

七月の末つかた、曉天嶺わたるにはや、をみなへし、きちか  
うの花など咲き出て、野邊の秋色闊なりければ(小體)  
かたしきし、戎衣の袖はうつるひつ  
さきそめにけり、野邊の秋草

賽馬集附の戦闘

五二 虎穴に入て虎子を獲たり

木越支隊が強襲の結果賽馬集を奪取るや、敵の兵氣沮喪し遠く四道溝附近に退却す、然るに殘餘の敗兵尙同地の附近關門砦子の山間に潜伏しつゝあるを探知し、木越少將は今村聯隊長に命ずるに之を捕獲すべきを以てしたり。是に於て今村大佐は小隊長楠田中尉をして其任に當らしむ、楠田中尉命を受け

虎穴に入て虎子を獲たり



直に部下を引率して削るが如き懸崖を攀ちて深く關門礮子の谷地に侵入し、前  
面の稜線に在りし敵の監視兵を驅逐し、尙鞍部を進むこと數丁、谷愈々迫り道  
益々峻に并び進むことを得ず、而して目指せる敵は谷底の民家に在り、衆之が  
爲に送巡す、時に伍長金子荒治なる者あり、單身峻崖を下りて敵の巢窟を衝か  
んことを乞ふ、中尉稍躊躇の色あるも伍長の決心復動かす可からざるを覺り終  
に之を許す、金子踴躍身を挺して山を下る、部下の上等兵神崎初治も亦之に隨  
ふ、兩人左右に分れて山小屋然たる敵の隠家に闖入す、敵は此不意の襲撃に胆  
を奪はれ一の抗拒を試むることを得ず白旗を振りつゝ降を乞ふ、即ち騎兵大尉  
ミラール、同中尉カザチヘン及下士以下五名を生擒し并に其携ふる所の滿洲地  
圖若干を押收して還る。

上官の死骸を負ふて奮闘す

五三 上官の死骸を負ふて奮闘す

小倉師團歩兵第〇〇聯隊に屬せる一等卒橋本喜代吉なる者、大甸子附近の戦闘  
に際し、比類稀れなる働をなし、現場に於て支隊長木越少將より直接賞辭を與

へられた美談がある。  
丁度七月五日のことであつた、大甸子なる木越支隊の前面に大部隊のコック兵  
が砲數門を掲げて來襲を企てたが、同支隊の勇敢なる迎撃によつて直に撃退さ  
れたのであつたが、是より先右橋本一等卒は軍曹平川某の指揮下に屬し、玉丸  
工兵小隊の防禦工事を掩護すべき任務を帯び支隊の前面なる岡の上に派遣され  
た。時に約五十の敵騎驀然として來襲したので、兩人は逸早く之を工事作業部  
隊に報告した後、尙も其後續部隊の有無を確めんが爲に平川軍曹と共に地罅  
の間に潜在してゐた。果然數百の敵の後續部隊が續々と前進して來たので息を  
凝らして其動靜を伺ひつゝあつたが、敵は此時已に玉丸作業隊に肉迫して之を  
包圍せんとする形勢に陥つたので「今はこれまでなり」と平川軍曹に促されて  
歸途に就かんとする一刹那、忽ち數十米突の近距離から敵の亂射を受けたので  
平川軍曹は哀れ敵彈一發の烟と共に其場にウンと打斃れた、橋本は斯くと見る  
より急ぎ後方に避けんとしたが、見す／＼上官の死骸を敵手に委するに忍びな  
いので、雨の如く浴せかける敵彈の中に在つて、軍曹の遺骸を肩にかけつゝ見

上官の死骸を負ふて奮闘す



上ぐる如き懸崖を攀ぢて退路を覓むる途端に、はや二名の敵は馬を下りて自分  
に接近し來た、最早我武器を以て敵對するの遠がないので真前に進み來つた一  
名の敵をば足を揚げて丁と踢つた、踢られた敵はグヂ、グヂと踏眼く途端に足踏  
み滑らして十數丈の崖下にド、ドと墜つ、勿怪の倅と橋本は其間に軍曹の死骸を  
肩から下すと同時に、残る一名の大兵肥滿の敵に組みつき、揉みつ揉まれる、  
上になり下になりし、果ては組みつきたるまゝ傾斜の地を滑りて彼我共に谷底  
に墜ち込んだが、橋本の運や強かりけん、當の敵はシタ、カに脊骨を岩角に打  
つけ忽ち其場に悶絶した、橋本はこれに目も呉れず再び軍曹の死骸の在る處に  
攀ぢ登つてもとのように肩に負ぶつて、顔となく手足となく擦創て血みどろと  
なつたまゝ漸とのことに本隊に歸還した勇氣の程には、日頃憚憚を以て鳴らし  
て居た筑紫男兒をして悉く舌を捲かしためたさうである。

五四 地の利は人の和に若かず

何れの方面に於ける戦闘にも、露軍が専ら守勢的態度にありて、攻撃的態度

をとることが稀であるので、其防禦陣地の我に比して著しく堅固であつたのは  
敢て怪しむに足らないのであるが、彼の細河沿に於ける防禦陣地の様に天然の  
嶮に加ふるに人工の周到を以てしたが如きは蓋し稀に見る處であつた。  
敵の陣地は北分水嶺と平安街道、及び連山關と本溪湖通路との交叉點に位し、  
北分水嶺の水流と連山關より來れる水流即ち細河との合流點の西方に位置し、  
我前進路たる紅帽子の隘路口に對して斜交し、返て下馬塘より來れる道路に正  
對し、又敵の左翼は彼の細河の障害を繞らし、且つ其河の右岸一帯は斷崖壁立  
せる高さ三百米許の岡陵を横へて、其南面も亦斷崖絶壁、其西半部は漸次高上  
して高地脈に連り、正面の長さは約千五百米許の廣大なる射界を有し、内部の  
地形は波紋状を爲しつゝ後方に向つて緩徐なる傾斜を以て下つて居る。  
敵は此の如き天嶮に加ふるに、一生懸命長時日を費して岩を穿ちて壘濠を作り、  
土を盛りて堡壘を築き、堅牢無比の防禦工事を施しつゝ、其東半部に砲兵三箇  
中隊山腹に砲兵約一箇中隊を配列し、其左右翼及中央に歩兵を配列し、又我進  
路に對する隘路口の右側は即ち敵の左側に連る彼の斷崖絶壁であつて左側は敵

地の利は人の和に若かず



砲兵より約三千米突の處より稍開け、傾斜の餘りに急ならざる高地を以て約千八百米まで敵の陣地に近接し細河の右岸に沿つて南方に走つてゐる、此故に我軍が紅扇子附近から進出せんとするには、直接に敵の砲火を浴びつゝ、三百米突より大ならざる正面を以てせざるを得ない、又遠く南方から迂回せんとするには、勢ひ峻峻なる深山の間を四五里行進せざる可からざるが故に、その陣地たる金城湯池雷ならざるの堅固の要害でありながら、一朝我小倉師團の猛烈なる攻撃に遭ふや、敵の一部は忽ち動搖を來たして逸早く退却を企て、一時敵の指揮官は逃ぐる味方の數名を斬殺して威嚇的に其陣地を支持せんと試みたり、大勢の歸する處、又奈何ともすべからず、遂に大々的潰亂を來たし、總指揮官フェリセリマン中將、旅團長マルツラン少將以下僅に身を以て脱れたとのことである。

地の利は人の和に若かず

八〇

之を要するに「天の時は地の利に若かず、地の利は人の和に若かざる」的千古の格言を證明し得て餘りあるに非らずや。

五五 砲兵の花 (三幅對)

細河沿の攻撃に際し、野戰砲兵第〇〇聯隊最も苦戦し、前記無双の峻要に據れる敵の陣地より雨の如く打出す砲火を浴びて我忠勇ある砲兵の三下士が前後相踵て悲壯なる最後を遂げ、第一軍砲兵の花と唄はれつゝ散りにし後の芳名今尙陣中に噴々たるものあり、三下士とは誰ぞや、曰く古賀幸太郎(軍曹)曰く河野羊次郎(伍長)曰く秋吉作郎(伍長)其人なり。

紅扇子の西方畑地に布ける我砲列は敵の砲火の集點となり、我射撃も亦猛烈を極め、轟々般々として天地も崩るゝ許りなり、時に古賀軍曹は彈藥小隊長として戦列に在り、中隊長の命を受け各砲車の發射彈數を調査すべく第一砲車より逐次戦線を横断して第五砲車を檢し了り、將に第六砲車の調査を終らんとする一刹那、敵の曳火彈其目前に破烈し、第三小隊長先づ斃れ、古賀軍曹も亦重傷を負ふて仆れたるも尙地上に仰臥したる儘大聲第六砲車の發射彈數を中隊長に報告し、再び起たんと欲して遂に能はず。

砲兵の花(三幅對)

八一



砲兵の花三輪(八二)  
此時早く彼時遅く、河野伍長も亦右肩に弾片を浴びたるも、古賀軍曹其他战友の續々其側傍に仆るを見て傷を裹むに追あらず、鮮血を胸背に滴らしつゝ、戦闘を繼續し、砲車後座の爲に屢々轉覆せんとするをば獨力之を支へ居たる際に次の敵彈を右大腿骨に見舞はれたるも屈せず「ナニ糞ッ」と云ひつゝ、尙轉把を握り照準を爲しつゝ、終に右腋下に一發拳大の貫通砲創を蒙り、砲架の側に仆れたるまゝ敢なく息は絶へにけり。  
之と同時に秋吉伍長は射彈の分火を正さんが爲に自から照準棍を握り、將に照準點を部下の兵に指示せんとするや、曳火彈砲車の前に破烈し、其彈子其胸部及左脚を貫通したり然るも尙照準棍を放たず、神色自若として戰闘を繼續しつゝありしが、小隊長は其傷の輕からざるを見、一名の砲手に命じ之を食ふて後方に退かしむ、途中伍長は双眼鏡を手にするを思ひ出し、其砲手をして之を砲列に送還せしめ、且告げて曰く「我は膝行し得べし、此大切なる場合に再び我に隨ふを要せず」と言未だ終らず敵の曳火彈再び其頭上に炸烈して伍長の體軀を粉齏し去り、其肉片の飛沫宛ながら雨の如くなりしと云ふ。

五六 敵の機先を制す

七月中旬以降、軍の正面の敵は漸次其兵力を増加し來り、同月下旬には其兵數約四箇師團に達し尙續々増加の模様あり、而して摩天嶺西麓一帯の地乃ち遼陽街道に在りし敵は次第々々に其主力を大安平方面に移動し、小倉師團の前面にも亦敵の働作時々刻々活氣を呈し、數縱隊より成れる前進部隊は數個の輕氣球を飛揚し相互に連絡をとりつゝ、同師團前面なる一帯の高地脈を占領し一舉我主力を粉齏せんとするの形勢を示し、彼我の斥候は各處に於て晝夜を分たず相衝突するに至れり。  
當時我第一軍は摩天嶺一帯の守備線より一步たりとも前進すべからざる筈なりしも、敵の形勢斯の如くなるを以て今や軍の状態を守株するを許さず、是に於て乎、敵の準備未だ完からざるに先ち斷然我より攻勢を採るに決し即時命を各團隊に傳へ、各團隊は又豫定の如く攻撃を實行し、遂に七月三十一日及八月一日の兩日に於て檜樹林子より様子嶺に亘れる一帯の險要を畧取し、以て敵軍の敵の機先を制す(八三)



我致命傷を秘す  
企圖を挫折したるのみならず、軍團長ケルレル將軍始め其他高級古參の將校多く此役に陣歿し、以て彼のクロバト總帥をして遼陽を放棄するの已むなきの遠因を成さしめたるは、偏にこれ我軍の畫策其宜を得たると將卒の勇敢に戰闘したる効果に外ならず。

通河孤溝、吊給、耳列、兒陣亡之迹(小傳)  
水村唯見、蓮花紅、戀雨、陰霞、夜已空。  
成敗是天君且嘆、秋風落日吊英雄。

### 五七 我致命傷を秘す

禁衛歩兵第〇聯隊第〇中隊が、七月二十二日甜水站の南梨花嶺の稜線に前哨たりし際、上等兵古澤直吉なるもの、會々隣接中隊との連絡を保持すべき命を受け、將に其任務を了へて歸途に就かんとするの時、我中隊の前面に激烈なる銃聲を聴いて、敵の襲撃せるを覺り、急に馳せて其處に赴き、折しも激戦中なりし我獨立下士哨の線に加入し以て勇敢に戰闘せしが、不幸敵彈の爲に其腹部を

貫通され出血劇しく屢次昏倒せんとし、苦惱一方ならざりしも、酣戦中戰友の意氣を沮喪せんことを恐れて、固く其傷を秘し勉めて射撃を持續せり、已にして敵兵漸く潰亂の狀あるを見、始めてガツクリ其場に倒れたるも尙莞爾として戰友某を顧みつゝ、「僕は射られたから彈藥を交付すよ」と言ひ終りて瞑す。

### 五八 宜なる哉連戰連捷

我禁衛隊某〇隊は七月廿三日様子嶺の陣營を發し、敵の眉目に逼り之を急迫して遼陽に壓迫せんとするや、我將士の意氣天を衝き戰闘連日山を踰へ溪を涉り、樹風浴雨百難具さに嘗めて一隊の士氣愈振ひ、誓て敵を太子河畔に殲滅せんと欲す、此時に當てや我非戰闘員の意氣亦當るべからざるものあり。

八月三十日徐家溝の激戦に於て某の隊は敵の墨下に肉迫し苦闘數刻、其携帶彈藥は屢々盡るに垂んとし、然も敵は刻々増加して愈々頑強に、危機具に間髪に迫れるの時彈藥補充の命は頻々として傳へられ戦線に在るの將士は翹首只管其到着を待てり、然るに敵の砲彈は我後方交通路を掃射し、苟も我兵の隻影を見



んか、忽ち十数の砲火を以て一時に噴發し飛彈急霰の如くにして面を向くるだに難し、當時彈藥縦列の一部は「進め」の命を領し唯一の通路に出づるや、榴弾及び曳火彈の其前後左右に落下するもの轟々爆々として其危険名状すべからず、時に師團參謀長路傍よりこの状勢を望見して暫く之を遮蔽部に避けしむ、輸卒石井彦二、今井善太郎、澁谷由太郎、神田野佐太郎等齊しく答ふらく、「我隊の危急此の如し、砲彈何する者ぞ敢て進まん」と言下に榎本寛太郎、鈴木半之介、都築仙之助、新井巴喜藏等の勇士四名真先に各彈藥箱を肩にし、飛彈を冒しつゝ火線に進み之を散兵に預つこと數次、自餘の者皆之に倣ふて各其任務を全ふしたり。いづれも是れ非戰鬥員、而も短期教育の輸卒にして事に臨みて勇敢なること毎に斯の如し、我軍の連戰連勝も亦故なきに非らざるなり。

一對傳令の模範

八六

五九 一對傳令の模範

(死して使命を辱しめず)

榎樹林子の戰鬥中、小倉師團第〇〇聯隊第〇中隊歩兵上等兵脇濱福松は其中隊

長より其中隊に命令傳達の使命を帯び、彼の有名なる枕山の鞍部に向て行進中、戰鬥漸く激烈となり敵彈雨の如きも、迂路を取れば時機を失するの恐あるを以て敵火を冒しつゝ、蕪進し、殆んど目的地に達せんとする時、哀れや一彈其頭部を貫き仆れ鮮血淋漓として復起つ能はず、仍て高くその左手を舉げて彼の命令の紙片を振りつゝ、尙も聲を勵まし傳達の意を通ず、戦線に在りし一兵卒來りて之を受けて持去るを見るや、忽ち遺焉として逝けり。徐家溝附近の戰鬥に於て禁衛歩兵第〇聯隊第〇中隊上等兵稻葉直市は數刻に亘れる劇戰中、始終危険を冒して傳令の任務に服し、時に恰もわが中隊長の號令が其左翼小隊に透徹せざるに當り、之を傳達せんと往くこと十數歩にして忽ち致命的銃創を蒙りて仆れ、直に蹴起せりと雖傷重く、精神朦朧として復人事を省せず、然も左手には自己の銃器をば堅く之を緊握し轉頭匍匐しつゝ、絶命に至る迄口に命令を唱へて止まず。

樂曲(王世貞) 榎樹下播寒衣。 百戰猶隨劉武威。 見說平安收涕淚。

一對傳令の模範

八七



### 六〇 頂門の一針 (禿頭を蜂に螫さる)

#### 黒木軍百話

從軍記者中の愛嬌家を以て聞えたる小川笑仙老が、八月一日彼の松永旅團の塔  
 灣攻撃を観るべく、日頃大仲善の黒田鹿水と相携へて、膝栗毛に鞭うちつゝ、彌  
 次喜多を氣取つて摩天嶺の西麓金家堡子の我守備線を出て、其高地に攀ぢ登ら  
 んとした途端に其高地の背面の谷地に今まで埋伏して居た島田聯隊が、戦機熟  
 せるを見疾風電撃の勢を以て殺到して來たので、十間許り先頭に立つてゐた鹿  
 水は之を避けんが爲に周章て坂路を横の方に外れたが、逆悪く蜂の巢の中の蜂巢を  
 踏み潰したので忽ち蜂族の大混亂を來たし、ブン／＼と鹿水の身邊を目がけて  
 襲撃するので、前面の敵よりも先づ當の敵が危険で堪らず、先生ほう／＼の體  
 て山の鞍部まで駆け上つて辛ふじて虎口イヤ毒針を免れてホツと一息吐いて居  
 た。

斯る珍事出來せりとは夢にも知らぬ笑仙老、悠々として鹿水の跡を追ふて例の  
 麓の處までやつて來ると、摺違に山を下りつゝありし同聯隊の一佐官が笑仙に

#### 塔灣の攻撃

聲をかけ何か二言三言聽かれた、如何なる場合に於いても圓轉骨脱の笑仙老の  
 ことであるので、慇懃にその間にこたへんとして先づ被ぶれる帽子を脱た一刹  
 那、足長蜂が一匹ブーンと羽音を鳴らしてやつて來るや否や、笑仙老の禿頭に  
 止つてグザと許り頂門の一針を見舞つた、不意の襲撃に吃驚して狼狽して拂い退  
 けて帽子をうち被ぶつたのだが痛いこと夥しい、敏面作りながらも我慢して尙  
 も愛想よく話をつゞけて居たが、其佐官が「イヤどーも難有う」と軽く手を舉  
 げてサツサと行過ぐると、笑仙「どーか御折角」と再び帽子を脱て挨拶に及ば  
 んとする時、待構て居た蜂族は隙さず第二の毒針を見舞つたので、笑仙老重ね重  
 ねの大敗亡、大きな瘤を而かも二ツまで急造し禿頭を抱へて、喘ぎ／＼坂を駆  
 のぼつて、やつこのことに鹿水の傍まで辿りついて草の上にドツと倒れ、「ア、  
 痛い、ア、苦しい」とは軍司令部開關以來の大滑稽であつた。

### 六一 中尉殿の形見

遼陽總攻撃の豫備戰闘中、我軍は主力を擧げて大安平方面を攻撃せるに際し、



禁衛師團第〇聯隊第〇〇中隊長代理千田中尉は湯河の上流を徒渉して、大西勾の西北高地を扼せる優勢なる敵に向て突撃を試み、埋伏せる敵の猛撃に遭ひ、先登に立ちし千田中尉真先に斃れたり、斯と見たる従卒五十嵐市太郎は直ちに現場に駆けつけ、百方救護の方法を盡したるも、更に其甲斐なかりければ、涙ながらに中尉の屍を負ふて一時山腹の窪處に避けたるも、敵兵漸く接近し來り、到底其遺骸を全ふして歸還の不可能なるを察し、中尉の爪と髪とを截り取りて之を懐に收め、然る後敵の遺棄せる圓匙を探り來り、地を掘りて中尉の遺骸を假埋し、目標を樹て終りて後我中隊に追及し、形見の品を取出して其顛末を隊長に復命せり、一等卒が沈着にして且誠實なる働作は其當時一隊の貔貅をして盡く感涙に咽ばしめたりと云ふ。

悲壯なる最後

九〇

### 六二 悲壯なる最後

禁衛隊歩兵中尉福島次郎は福島少將安正の次男なり。八月三十日徐家溝の戦に我死傷するもの相踵ぎ戦況實に悲惨を極む、時に中尉は佐藤中隊長(義健)と共に

泰然散兵線を巡視しつゝ部下を督勵し、戦闘愈々激烈にして態度愈々沈着を加へ、一隊之が爲に人意を強ふす。薄暮火戦の漸く順境に赴くや、偶と一彈來て中尉の腹部を貫く、創重くして復起つ能はず、既にして夜は漸く暗く、戦聲纒かに絶ゆるも悲雨蕭々として光景轉た惨憺たり。中尉は一卒の肩にかけられ、昏々として往くこと里餘、歩と傷部を壓して出血益々甚しく其苦や寧ろ死の安きに若かざるもの、如し、辛ふじて四方臺第一野戦病院に達す。越て一日中尉は創部の経過益々不良に傾き其昏睡状態に陥りつゝありしも尙命の旦夕に逼れるを自覺するや、徐ろに病床に起直りつゝ病院長以下の諸醫官に對して其懇篤なる介抱の勞を謝し、又聯隊長小原大佐、大隊長大多和少佐及佐藤中隊長等に對し懇懇に訣別の辭を述べ、更に部下の自己と同時に負傷入院せる者若干を床下に招致し「戦局の半途にして斃るゝは遺憾之に過ぎずと雖、天命なれば如何とも致し難し、我魂は永く護國の鬼となるべし、汝等は傷輕し速に療養して再び戦線に加はり以て軍人の本分を盡すべし」と諄々諭し畢りて後

悲壯なる最後

九一



黒英臺の決戦(其二) 九二  
約十五分間にして白玉樓中の人と化し去れり、嗚呼、時に年二十有六。

蓮露歌(明詩)  
人生無百歲。百歲復奈何。  
古來英雄士。各已歸山阿。

### 六三 黒英臺の決戦 (其二)

(岡崎旅團の苦戦)

遼陽の會戦をして速かに終局に近づかしめんが爲に、我軍は全力を擧げて敵を太子河右岸に壓迫するや、尙河を渡りて之を窮追せんとし、軍は八月三十日を以て左の命令を下せり。

- 一 軍は主力を以て九月一日拂曉黒英臺及標高一三一高地を占領せんとす、
- 二 宮城野師團は許官屯方向より標高一三一高地を攻撃すべし、
- 三 小倉師團は第二師團の右翼に連繫し沙澗屯方向に攻撃前進すべし、
- 四 禁衛師團は其方面の敵に對し常に第四軍に協力すべし、

當時軍正面の敵狀は黒英臺西北高地に其若干あるを知らるも其他は一切不明にして一般に寂然たりしが、其後に至り皇姑墳西方高地より黒英臺西北高地及許官屯にも若干の敵兵散在せるを知り、我砲兵聯隊は午前八時頃豫定の陣地に進入を終り探射を開始したりしが、果然敵は其砲兵を許官屯の高地に現はし來り、且黒英臺西北方高地の中腹にも亦若干の砲ありて我に應戦し、又標高一三一南方高地にも數門の砲を有して我に應射し、彼の砲戰漸く酣ならんとせり。茲に於て宮城野師團、岡崎旅團長に攻撃前進を命じ、同旅團は其右翼なる小倉師團の木越旅團と協力して前進する等なりしが、恰も小倉師團の右側に新來の敵を見せしを以て同師團は一時其前進を中止するの報に接したるも、岡崎旅團長は現下の狀況に鑑み、依然獨力を以て攻撃を續行し、午後二時過其第一線をして黒英臺西北の高地にある敵に對し、同高地の殆んど基脚點までに進みて猛烈なる射撃を交換し、同時に我砲兵は之を援助しつゝあり。敵は我兵の猛撃に遭ひて一時は退却の色見えたりしが、間もなく盛返し來て再び同高地に現出し、頑強に抵抗を繼續しつゝあるを以て、若干の豫備隊を派し



て岡崎旅團に應援せしめたるも、日没に至りても我第一線は尙未だ黒英臺西北高地を占領するに至らず、只相對峙しつゝ、交戦するのみ。状勢右の如くなるを以て岡崎旅團長は夜襲を以て敵の陣地を奪取せんとし、午後十一時頃多大の損害を賭して惨烈なる爆彈戦の後〇〇聯隊は黒英臺西方高地を占領し、同時に新發田聯隊も亦其左方に達して遂に同山の西南及鞍部の敵を撃退して茲に全く其目的を達したり。此處を扼守せし敵は倉皇西方に退却せしも一三一高地の敵は依然として頑強に抵抗を持續し、終焉彼我の銃聲を絶たざりし、

六四 黒英臺の決戦 (其二)

(一夜三たび敵の強襲を受く)

明くれば九月二日岡崎旅團は昨夜占領せし陣地を固守しつゝありしが、天明より其正面及側面なる敵の陣地より激烈なる砲火を浴び、且又沙澁屯附近にありし敵の大部隊は正午頃より續々前進の模様あり、午後四時頃より敵の砲撃益々

激烈となり、殊に敵の砲撃は戦線を越へて遠く我後方の通路に落下するを以て内部の交通尤も困難を極め、各縦列の損害實に尠少ならざりし。日没に到り先に前進し來りし敵は漸次接近し來り、午後八時敵は大舉して黒英臺西北なる饅頭山に向て強襲を試みたるも、我兵の勇敢なる直に之を撃退したり。其後敵は漸次第一線の兵力を増加し、午後十時及午前一時の兩刻に於て殆んど同一の地點に向て強襲せしが、遂に其目的を達する能はずして後方に引退したり、其兵力隊形の如き暗夜のことなれば固より詳細を知るに由なしと雖、第一回に我第一部隊に突貫し來りしものは少くも四箇大隊を算し、尙其後方には強大なる豫備隊を有せるもの如く、而して第一回より二回三回と敵は自乗軍に第一線の兵力を増加すると共に豫備隊を接近せしめ、且第三回逆襲の折には河心臺東北高地に在りし敵の別働隊をも此以外に參與せしめたるが如し。第三回逆襲退後に於ても敵の執拗なる尙射撃を繼續しつゝあり、要するに逆襲の大なるものは前記三回なりしも午後十時より三日午前三時頃にかけて小部



隊を以て或一角に突進し來りたるは殆んど其數を知らず、之が爲に彼の饅頭山の頂上は彼我争點の中心となり、彼我の死傷算を亂して山の前後なる傾斜面に狼藉たり、銃聲の全く止みたるは同五時頃なりし。此夜我に來襲せし敵の全兵力は約四聯隊にして多大なる損害を蒙りて西方に退却し、隨て我兵の死傷も亦少からざりし、之を要するに遼陽會戰中、我軍は八月廿五日運動を開始してより九月五日の終結まで正さに十有二日其間炎熱を犯し峻岨を冒し、日として敵に遭遇せざるなく、夜として強襲を試みざるなく、而も能く其目的を達し、殊に彼の黒英臺に於ける遼陽戰最後の決戰に於ては頑強無比なる敵の抵抗に對して全然其企圖を挫折し、敵の過半を擧げて肝腦地に塗れしめたるもの、畢竟するに我將卒諸士の萬難を排して能く其本分を盡せし結果に外ならず。

黒英臺の決戰(其二)

九六

幕下曲(蘇聯)

將軍營外月輪高。風々西風吹戰袍。鏘鏘無聲河漢轉。露華霜氣滿弓刀。

六五 砲彈如雨射聲似雷

遼陽會戰に於ける黒英臺は實に當日の天王山にして天下分目の戦争たりしなり、故を以て彼我共に全力を注ぎて戦鬪を持続し、殊に敵の頑強なる斃れて後已むの概あり、我軍は岡崎旅團其衝に當りて頗る苦戦難闘而も兵力稍劣勢にして形勢動もすれば危殆に瀕せんとす、時に軍司令部は太子河の右岸燕巢城(江官屯の高地)の古趾上に在りて戦を督し、藤井參謀長以下幕僚一同前面の敵狀に對し中心憂色なき能はず、英國從軍武官ハミルトン中將亦友國の爲に杞憂する處あるが若く、酣戰中其形勢を審かにせんが爲に、我幕僚の所在地に來んとするの途中、意外又意外！先刻まで双眼鏡を手にしつゝ、前線の戦況視察に餘念なかりし我司令官は、今や一束の高梁の蔭に炎熱焼くが如き日光を遮りつゝ、黒甜郷裡の人と爲り、其駒々たる射聲は般々たる彼我の砲聲と相和しつゝ、一種異様の觀を呈せり、ハミルトン之を見て啞然として去る、後人に語つて曰く、『黒木閣下の深沈大度は吾之を黒英臺の戦鬪に實見するを得たり』と之より益將軍に私

砲彈如雨、射聲似雷

九七



淑す。

輜重輸卒敵の砲弾を叱す

### 六六 輜重輸卒敵の砲弾を叱す

從來敵の砲戦を開始するや、單に戦線のみならず尙遠く後方を射撃するを以て得意とす、我將校等最初は單に彼の濫射に出づるものとして一笑に附し居たりしが、數度の會戦を経るに及び、彼は一種の戰闘法として特に之を勉むるものなるを實見し得たり。殊に黒英臺の戰闘に際して其然るを見る、當時敵は七十餘門の野砲を擧げて我岡崎旅團に對し盛に砲火を集注せるの外、この盲目的射撃の爲に我後方なる人馬の死傷せしもの妙からず、之が爲に糧食及彈藥の補填上一時は非常なる阻害を與へたり。會々敵の一曳火砲黒英臺の戦線を踰て後方約二千米突の我某彈藥縦列の側に破裂し轟然として爆煙を漲らす、剽輕なる一輸卒あり忽ち路傍の小石を拾ふて之に對つて抛ち且罵て曰く「這ン畜生!!! ロス彈の癖に生意氣ナ真似を做あがらア」

### 六七 敵は退却の妙を得たり

進むは法にして退くに勇なるは由來敵方の筆法であるが、隨て其退却法の妙なる到底も我軍の及ぶところでないとのことである。敵は戰闘非常に不利に陥りつゝ如何程混亂を極めて背進せる場合に於ても後方一里乃至二里の地區まで達すると爰に集合して一團となつて後衛を收容し、又後方一、二里の處に到ると前と同一の方法を繰り返しつゝ逐次後方に移動する所謂繰引き退却法を巧妙に應用するのである。これは後方に大なる豫備隊を豫め退却收容の爲に備へ置くからである、故に其背進速度は比較的遅々として居るようだが戰備は實に確實であつて、我追撃隊の敵に追及するは或は容易であるかも知れぬが、其兵力非常に強大でない、縱令我軍の勇武を以てするも危険に陥るなさを保し難ひ、ソコで彼の遼陽會戰の際にも我軍は豫定の戦捷を得ながら敵にも亦豫定の退却を做られて、見す／＼長蛇を逸した理由が自から判明るのである。

敵は退却の妙を得たり



### 六八 高粱島は敵に利あり

遼陽總攻撃の當時には、日中百度以上の炎暑なるにも拘らず、流石に滿洲だけあつて節は漸く八月に入つてはや蓼紅蘆白の秋色を呈し、同時に野となく山となく植付けられた丈餘の高梁は、今や黄雲漠々として一望千里の偉觀を呈していた、當時クロバト將軍はこの一種の森林である高粱島の爲に戰闘甚しく不利に陥り、退却を餘儀なくしたかの如く露都に報告したのだが、某専門家に聽いて見ると事實は全く反對で、始終攻撃的態度に出たる我軍こそ屢々之が爲に非常な目に遭つたが、毎度守勢的態度に在つた敵は反て之があるが爲に尠からぬ便益を蒙つたのである、其の實例を擧ぐれば當時わが追撃隊は一般に此高粱畑の森に阻害せられて各部隊の運動は之が爲に度々連繫を失して大々的困難を感じたのみならず、現に達達溝附近の戰闘の際にも、敵の防禦陣地たる散兵壕前約二三百米突間は此の高梁を二三尺の高さから折り束ねて一種の鹿柴を作つて、射界の清掃と共に副防禦物に應用したるなど中々巧みなものであつて、爲に我軍

### 黒木軍百話

は尠からの損害を塔して始めて其目的を達したのであつた。

寄燕京某友(小戀)

水郷無處不蘆花。 賓雁橫空字影斜。  
昨夜分明月前夢。 追君萬里到京華。

遼陽戰捷を祝して知人より寄せられし和歌

日の御旗むかふかたには朝露の  
はかなくきゆる唐土の原。  
(村上義雄)

遼陽の野邊のすいきとむらかれる  
仇をもつひにうちなひけつし。  
(加部殿夫)

(狂)クロバトの腹痛風が敗となり  
遼陽終に叶はざりけり。  
(渡邊風山堂)

### 六九 外人の眼に映ぜる黒木將軍

遼陽の戰闘に「黒木將軍戰死せり」との訛言ロイタル電報によつて端なく世界に傳へられたので、米國ハーバーウキークリーは其當時半信半疑を以て之を迎ひ、且説いて曰く。

外人の眼に映ぜる黒木將軍

### 遼陽會戰



外人の眼に映る黒木將軍  
 若し黒木大將が十月四日戦死せりとの報にして信なりとせば、日本は則ち  
 ストーンウオル、ジャクソンが斃れし時、南米の受けしと同様の損害を蒙  
 れりと謂つべし。  
 黒木將軍はジャクソンの如くに、防禦の場合に立ちては到底攻取し難く、  
 又一たび攻撃の位置に立つや機會を把握するに敏活なる將軍なり、渠は日  
 本の古參將軍にして現朝の勢力を連接したる力とサムライの氣風とを維持  
 することを得る眞の武人なり。  
 吾人は渠の少年時代に於て、殊に擊劍に巧みなりしこと、及び維新の際に  
 は數度慄悍なる敵と戦ひて之を斬殺したることを知る、斯の如く何れの時  
 何れの場合に於ても、渠は毎に勇敢にして敵將に打撃を加へたり。  
 日清戦争に於ける黒木の經歷は、渠の生涯中引續き如何なる戦場にも勝者  
 たることを示せり、日本の内外を問はず何人も這の敏活なる將軍、熟練な  
 る司令官がクロバトキンに對し、ミカドより特に擧げられて第一軍を指揮し  
 たりと云ふを聞くも敢て怪まざる可し。

鴨綠江に於ける渠の派手なる戦争は同處に於て彼は計畫せし通りに敵を破  
 り、完全に其砲を有効ならしめ、且頑強なる突撃を行ひたりし、海上に於  
 て東郷の名最初に顯しと同様に陸上に於ても黒木の名を轟かせり。  
 遼陽の大攻撃に於てクロバトキンの左翼を打ち、防禦をなせる市街を撤退  
 せしむる爲に敵地に向て河を渡りたるは黒木の指揮する日本武士の軍隊な  
 り。多くの軍事批評家は曰く若し當時日本軍が「最良の機會」を把握せん  
 ことを望み、黒木將軍に授くるに優勢なる増援隊を以てせば遼陽の戦は露  
 軍の全滅に終り、奉天を迅速に占領するを得しならん。  
 日本國の黒木將軍の戦死に對し沈黙の態度に出でたるは、一種の政略とし  
 て注意するの價値ありと雖、此の如き事實は滿六週間以上も秘密にし置く  
 は到底不可能なるが故に、吾人は此點に於て驍勇絶倫なる將軍の戦死を疑  
 ふものである。云々

七〇 亡母の命日

亡母の命日



亡母の命日 一〇四

十月七日は吾母刀自の身没り給ひし日なり。折しも遼陽會戦後のことにて、我軍は東京陵とて清祖墳陵の在る一部落に淹陣中にして、太子河畔戦餘の荒原西風獵々として、敗荷殘葉の秋容轉た凄凉を感じたりき。

想ひ起す、日清戦役の當時、余は遼東より韓國を股にかけて、江湖に漂浪しつゝありしが、世にも慈愛深きわが母刀自は故郷に在りて其頃より遺傳的中風の氣に罹らせ給ひ、手足もふかなひに起臥の自由をさへ欠き給ひぬるにも拘らず、強ひて病床に筆を採り給ひて、道の遠遊の不幸兒をば慰めもし勵まし給ひしこと一再にして止まらず、いと見事なりし手蹟は一回は一回より次第く衰へゆきて然も文意は愈々濃かに、余は餘命幾ばくもなき老母の書信に接する度に、宛がら身ををかきむしらるゝが如き心地しつゝ、潜然として暗涙の頬を傳ふを覺えざりしが、其翌年の今月今日、わが幼少の頃邸宅の庭に手づから植え給ひし柿の葉のほろゝと落ち初むる頃、忽焉として眠るが如く此世を見棄て給ひぬ。當時余は東京に歸還してありながら、故郷香にして死水をだにとり奉るを得ざりし不幸の程嘆かはしくも亦恐ろし。

其後間もなく余は臺灣に航し、再び南清に遊び、又重ねて遼回の戦役に従軍し、指折り數ふればはや十歳の月日をば南船北馬の間に徒らに過せしも、今は世に亡き父母の命日には何處の果に在りとも必ず心ばかりの祭事を營みつゝ生前の不幸を詫び來りしも、今は從軍中ゆへ夫さへ叶はず、只在ませし昔を忍ぶよすがにもと、肌身離さずして日頃秘藏せし母刀自が最後の文の一通をば取り出しうち返し誦し奉りつゝ。

秋風の吹くにつけてもは、そはの散りにし今日の忍はるゝかな。かく一首の腰折をものしつ、縷かに追憶の情を遣りぬ。

七 本溪湖の石擲戰

沙河會戰の際、本溪湖方面を扼せる島村旅團の前面に敵の一大部隊驟然襲到し、殊に十月十一日に至りては敵の砲兵太子河右岸各所に現出し其砲數三十六門を下さず、同時に左岸にも預置せし八門の砲と相應して我陣地の各部に對ひ、猛

本溪湖の石擲戰



本溪湖の石礮戦  
一〇六  
烈に射撃を開始し、其爆煙は一時我陣地の全面を掩ひ、随て又我死傷を續出せり。

之と同時に敵の歩兵は逐次東方より前進し來り、午後三時頃には約十四大隊を目撃し得るに至れり、尙其後方には大なる密集部隊の隨處隠顯するあり、蓋其總兵力は一箇師團半乃至二箇師團を下らざりしが如し、此の如き大兵團をば一時に展開するは地形上不可能なるを以て之を小部隊に區分し、山麓若くは地隙等の如き遮蔽部を疾走して我陣地前の死角内に集合したる後、二三箇中隊乃至四五箇中隊宛其後方より猛射する砲火の掩護に依り、險坂を攀ぢ、銃剣を揮ひ驀然に突撃し來り、我諸隊も亦死力を奮ふて之を防射したるのみならず、彼の斷崖崎嶇たる地形に妨げられて、射撃の効力薄きものに對しては豫め石塊を收集して之を投じ、或は大石を轉下して之に抛ち、山上巖石盡くるに及びて、之を後方の傾斜地より遞送すること前後數回に及びたり。  
我壘下に肉迫せる敵も亦必死の勇を鼓して奮戦し、前者撃退せらるれば後者之に代りて突貫を反覆し、誓て我陣地を奪取せんことを期するもの、如し、而し

て我志波、本多、不破、中川、平田の各部隊方面共に孰れも數回の突撃を受け、就中志波大隊の如きは敵の連續突撃を受くること前後六回の多きに及び、去りながら各方面共に毎回敵を撃退して一步も我陣地に突入するを得ざらしめたるも、敵の頑強なる概ね我陣地の死角若くは地隙内まで退却し一時之を中止したるに過ぎず、苟も好機の乘ずべきものあらんか捲土重來せんとし、彼我の間近きは五、六十米、遠きも二三百米の距離に於て始終相對峙せり、夜に入りては戰場頓かに寂寞を極め、死屍狼藉の間晝間の姿勢の儘彼我共に銃を執つて動かさず、一種云ふべからざる悲壯の觀を呈せり。

### 七二 動かざること山の如し

(島村將軍の奇計)

前記の戰闘中、島村旅團長は始終龍王廟西方の我砲兵陣地に在りて指揮を採りつゝありしが、戰闘漸く激烈なるに隨ひ、各方面より使を馳せて急を告ぐるもの、増援を乞ふもの宛がら櫛の齒を挽くが如く、旅團長の豫備隊は爰に全く使

動かざること山の如し



用し盡くして、最早手裡に一兵なきに至れり、當時各方面の指揮官が如何に兵力の寡少に苦みつゝ奮闘したるかは、乞ふ之を其際往復せられたる左の報告及命令に見よ。

動かさること山の如し

一〇八

十月十一日午後一時志波少佐より左の報告あり。

當大隊陣地の正面前の敵は約二ヶ大隊増加し前進を開始し稍活潑なる状況を呈す、尙敵の砲兵も亦我陣地を砲撃す。

至急に旅團豫備を當方面に増加するの必要を認む。

依て旅團長は志波少佐に左の命令を下せり。

貴官の方面へは取敢へず一箇中隊を増加す、間もなく貴官の手許に達するならん、尙後刻一ヶ中隊増加の豫定。

貴官は陣地を固守すべし。

間もなく本多大隊より突然左の報告あり、

大隊は既に全滅に歸せんとし、目下戦闘を持續しあるものは將校二、三名と下士卒百十數名に過ぎず。

旅團長が之が増援を爲さんと欲するも、今は旅團長の手裡には隻兵の存するものなきを以て、今村大佐に命し永田大隊中の一中隊を赴援せしむ、須臾にして志波少佐より又左の報あり、

敵は益我右翼に逼る、大隊は已に彈藥を射盡せり、他隊の彈藥を至急融通せられんことを望む。

依て彈藥縦列の一部を其方面に招致すると共に遠藤少佐に命し、志波方面の右側を掩護せしむ。

午後二時二十分三たび志波少佐の報に接す。

目下大隊の前面にある敵は在來増加の分を合し約三大隊の優勢となり勇敢に突撃し來り、内一大隊は我右翼を包圍せり。

當大隊は陣地を固守す。

豫備隊の増加と他隊彈藥の融通を望む。

依て直に左の命令發せられたり。

彈藥は約三十分の後貴官の手許に達するならん。

動かさること山の如し

一〇九



動かさるゝと山の如し

貴官は已むなくんば銃剣を以て防禦せよ。

午後三時半頃に至りて志波少佐よりの第五回目報告は左の如し、

敵は只今迄に五回程突貫せしも盡く之を撃退したり、然れども尙陣地前四五十米の間に固着して夫より以外に退却せず、

右の状況に付日没前猛烈なる逆襲を以て之を撃退すること愈必要なり、之が爲過刻請求せし増援兵を至急派遣せられんことを希ふ、

右に對する旅團長の訓令。

愉快なる貴官の報告に接し、予は欽尙に堪へず。

某大隊の一部分は貴官の隸下に屬すべく命じ置けり、貴官は之を以て陣地を固守せられんことを望む。

之と同時に本多陣地よりも又々急を告げ來りしを以て、某工兵中隊長に左の命令を下せり。

目下本多大隊の方面頗る危急に瀕せり。

貴官は直に同大隊を赴援し死力を盡して其陣地を固守すべし。

同四時半志波少佐より六たび左の報あり、

當守備隊は已に彈藥を射盡し補充の爲差遣せし駄馬は今以て歸來せず、加ふるに敵は益兵力を増加し、砲撃の効果を待ちて突撃の機を待つものゝ如し云々、

の報あると共に本多方面よりも重ねて

當方面の守兵已に全滅せり、

云々の警報を齎らし來り、各方面の戦況一として悲觀的ならざるはなし、然り而して島村少將は此危急存亡の一刹那に在りし各僚屬の頻々眉を顰むるにも拘らず、自若として動かさること山の如く而も奮戦する力め、奮に各隊の操縦其宜しきを得たるのみならず、其豫備隊を放ち盡して手に隻兵なく然も各方面の請求愈々急なるを見るや、忽ち一計を案し副官を顧み命するに「旅順今陥落す」の偽報を各方面に傳へ以て戦線の士氣を鼓舞せしめたり、一箇旅團の貔貅この快報に接して万歳を絶叫しつつ意氣衝天の活勢を呈し來り防戦益勵め、運動亦着々其功を奏し、遂に我に數倍せる新來氣鋭の敵を挫き、彼をして我軍右翼後

動かさるゝと山の如し



方遮断の企圖を抛却して潰亂敗退の已むを得ざるに歸せしめたり。

### 七三 モー少して日本兵に成れる

黒木軍百話  
本溪湖石抛戦の際には我陣地は比較的峻要なる高地に在り、敵は二三箇中隊宛に分れ、銃剣を閃かしつゝ、ウーラ〜と呐喊を擧げて我掩堡の下に肉迫し來り、我諸隊も亦必死の勇を鼓して之に當り防戦甚努むと雖、敵の頑強なる一步も退却せず、算を亂せる味方同志の死骸をば踏みこえ乗こえつゝ、突撃を反覆し、目的を達せざれば殲るも止まざるの概あり、當時尤も勇敢に對抗せし我某卒、飛丸啾々の間に立ち、顧みて戰友に語つて曰く「ロスケもなか〜強いぞ、モー少して日本兵に成れる哩」一隊の將卒危機一髪の際この愛嬌ある諧謔を耳にし、覺えず破顔一笑せりと。

ナポレオン曰く「勝敗の決は最後の五分間にあり」と當時敵は果して這のモー少しの辛抱が仕切れずして潰走したり。一兵卒の言味ありと謂つ可し。

### 沙河會戰

### 七四 軍旗山の譽

十月十二日天未だ明けず、梅澤旅團に屬せる後備歩兵第〇聯隊の守備せる大嶺方面の我軍旗山大嶺に連れる橢圓形の丘陵にして軍旗山とは後に我軍の命名に係るの陣地に敵の歩兵約二箇中隊突如として襲撃し來り、之と同時に歩兵約一箇大隊は其東方谷地より其右側に逼れり、同處に守備せし宮源小隊は健闘苦戰、寡兵を以て克く大敵を支へしと雖、腹背敵を受けて宮源少尉先づ斃れ、部下の兵士も亦殆んど殲るに至り、軍旗山は一時敵手に委するの已むを得ざるに至れり、此時聯隊長太田大佐眞固は急を見て自から豫備隊を率ひ赴援したるも、惜しい哉時機稍遅れ軍旗山は已に敵手に落ちたるを以て、即ち急に之を恢復せんと欲し、最初二三箇中隊を放ちて突撃を試みしも、敵の射撃猛烈にして我損傷相つき容易に功を奏する能はず、茲に於て更に他の一小隊を増援して第二回の突撃を決行せしめたるが、此際に於て大隊長代理齊川大尉中隊長鏡山中尉相次て斃れ、其他指揮官は概ね負傷せしにも拘らず、突撃隊は勇を鼓して敵の陣地に



肉迫したり。然も敵は頑として動かさず愈々沈着に其陣地を固守せり。  
 太田聯隊長は此二回の突撃効を奏せざるを見るや、乃ち奮然として起ち、自ら最後の豫備隊たりし僅々一小隊の兵を掲げて先頭に立ちつゝ敵壘に向て奮進したり、時に天漸く明け本道附近に位置したりし我砲兵隊は一齊に砲火を開きて軍旗山の敵中に榴散弾を送れるを以て、好機逸すべからずと爲し、我突撃隊は全線舉りて突貫せしが、敵も去るもの此處を先途と死力を盡くして對抗し、敵砲は我軍旗に對て集注し、太田大佐重傷を負ふて先づ仆れ、副官傷き旗手斃れ、而して我軍旗は此悲惨なる格闘の瞬間に轉々他より他に移され、終に旗護兵高木一等卒(初太郎)の手に捧持せらるゝに至れり、然るに我殘餘の將卒は獅子奮迅の勇を鼓して、我战友の死骸を踏したぎつゝ遂に敵壘に突入し、高木一等卒の手に捧げられたる軍旗は、我萬歳聲裡に曉風に翻りつゝ其山上に樹てられ、茲に全く軍旗山の陣地を恢復するを得たり。  
 敵は其嶮と衆とを待み、頑強無比に抵抗せしも宛ながら阿修羅王の暴るゝが如き我猛威に避易しつゝ遂に多大の死傷を委棄したるまゝ遠く後方に逃竄したり、

是より太田聯隊の名は彼の軍旗山の名と共に其譽れ陣中に高し。

七五 劍尖相逐ふ (仁平山の大格闘)

沙河開戦中、軍の前面なる石磨子北方高地の北麓を固守せし敵は、我軍連日の攻撃に一時萎縮せるの傾向ありしが、十月十三日午後より約一旅團の敵は再び運動を起して又もや逆襲に轉じ來らんず形勢あるを以て、彼に先じ燒達勾の北方狹洞山後に仁平山を占領するの必要を感じ、同日午後夕陽將に三塊石山に春かんとする頃より我岡崎旅團は勇を鼓し同高地に猛進し、新發田聯隊大隊長仁平少佐(宣旬)は手兵を掲げ先頭に立ちて猛進しつゝ急峻なる斜面を攀登し、敵の堡壘を距ること僅々二百米突に達せしとき、敵は新に増援兵を得て激烈なる射撃を交換し、此形勢を観たる彼我の砲兵も亦此に砲火を集注し、榴彈の炸煙天に漲り爆音轟々として、端なく爰に一場の大修羅場を現出せり、  
 斯て彼の山腹なる斜面の地嶺に機を待ちつゝありし我各隊就中仁平大隊の散兵線は真先に進みて頂上に達し、敵の掩堡前約十四、五米突の處迄接近し、彼我

劍尖相逐ふ(仁平山の大格闘)







七七 起死回生

(衛生部員の模範)

沙河會戰中、我禁衛師團が馬耳山の嶮を攻撃するに當り、第一聯隊及第三聯隊は一時非常なる苦戦に陥り我兵の死傷算を亂せり、第一聯隊の中隊長林田大尉(幹夫)も亦敵の曳火彈に中りて仆れ、満身鮮血淋漓として一時全く人事不省に陥りたり、倉皇の際衆以て已に戦死せりと爲し將に山腹を穿ちて之を埋んとす、時に同聯隊の看護手に飯島虎次郎なるものあり、戦線に在りて續々負傷せる我兵士を收容しつゝありしが、斯と見るより馳せ到り先づ大尉の軍服を脱して其傷を検し、次て脈を検し且熱心に救急の術を施したりしが、其赤心や通じけん、一時全く望を絶ちたりし大尉は程なく息を吹き返へしたり、然るに戦況は時々刻々急を告げ來り該中隊は一時退却するの已むを得ざるに至るや、飯島看護手は自から大尉を負ひて之を安全なる谷底の廟裡に收容し、更に急造擔架をして之に大尉を載せて後方の繙帶所に送致し以て大尉をして萬死に一生を得せしめたり、其働作の敏活にして職務に忠實なる、優に衛生部員一般の模範を爲すに足るものなり。

七八 彈雨中に日誌を録す

故陸軍歩兵少佐藤義雄容貌古武士の如し、初め禁衛師團第一聯隊第一中隊に長として出征し歴戦屢々功あり、十月十五日老君峪の北方二三一の高地を占領するや、燒達勾、八家子附近の敵砲兵は極力該高地を砲撃し、彈片霰の如く飛びて我陣地に落下し來り、我將校以下大に心苦しむ所なり、時に少佐は悠然芝生の上に坐しつゝ、督戦の傍ら筆硯を懐に探り從容として日誌を録す、部下の將卒等指揮官の此悠揚逼らざるの態度を見て敬重措かず、仍て以て全隊の士氣を奮興せしめ、益々健闘して其目的を達するを得たり、越えて十二日右二三一の北方高地を夜襲するに際し、少佐は率先敵壘に突貫し跳りて塹壕を踏えんとし敵の爆彈を腹部に受けて悲壯なる戦死を遂げたり。



### 七九 權五郎少尉

後備歩兵第〇〇聯隊第〇中隊金子少尉徳三郎容貌魁偉膽氣尋常に超ゆ、十月廿四日我軍の歪頭山を攻撃するに當り敵は頗る頑固に抵抗し終に劍尖相摩するの白兵戦となるや、少尉は部下に先じて敵の第一陣地たる掩蓋の中に突入し、敵兵數人を斬て立ところ之を陥れ、次で第二陣地を略取し、尙その頂上に向つて前進を繼續し、頑強なる敵に抵抗しつゝ、少尉は國旗を手にし之を打振りつゝ部下を勵まし第三第四の陣地に突入し我萬歳の歡聲と共に之を占領して尙逃ぐるを追ふて奮戦中、敵の曳火彈身邊に破裂して破片其前胸骨を挫ぎ、次で第二陣地は其左脚を傷け、創を裹むに暇なくして敵を追窮し、終に彼の守兵をして殆んど殲滅に飯せしめたる少尉が比類稀なる動作は、彼の平治の昔敵の爲に一眼を射られながら屈せず、馬を躍らして當の敵に通り之を斬りて後矢を抜き取りし鎌倉權五郎の猛勇も思ひ合され、陣中これより金子小隊長を呼ぶに權五郎少尉を以てせりと。

### 八〇 忠實なる従卒

十月十二日未明、禁衛師團の某隊は下老君峪北方二三一の高地に連る山稜に占據する敵を夜襲すべき命を受く、時に我軍司令官の訓令あり、曰く「本夜に於ける我軍の行動は全軍の成敗に關す、各員其れ努力せよ」と聽者肅然襟を正す。曉風獵々として露を吹き澄天の星光漸く微なり、此時某大隊に屬する戸川大尉先づ進んで敵の哨兵を驅逐し以て敵情を偵察するの任に當り、而して大隊の主力は彼の二三一高地脈に展開せり、未だほのくらし曉闇を破れる銃聲四、五ビユ一／＼と味方の頭上を掠めて過ぐ、敵は夜來此高地脈に據り死守の態度を探れるものゝ如し。

戸川中隊は豫定の如く暗に乘じ地に伏しつゝ進みて敵を驅逐し又主力の攻撃準備を掩護するの姿勢を取りつゝありしが、敵は又前線の隨處に出沒し頻りに我隊の前進を妨げ、四顧猶明亮ならずして連結困難を極む、忽ち三三五の黑影突如として中隊長戸川大尉の前に現はれて射撃すること數回、彈丸飛ひ來つて



大尉の大腰に中る、然るに伴にも傷重からず大尉健闘奮の如し、數分を出てすして再び側面咫尺の距離より後四五の黑影現はるゝと見るより早く大尉を狙撃す而も中らず大尉の恙なきは真に稀有とす、然りこの稀有なる僥倖は實に稀有の事實の爲に稀有なりしなり、大尉の從卒某惜むらくは其名を逸せりは二度目の敵の黑影の現はるゝ刹那に於て、身を躍らして大尉の前に立ちたるを以て飛彈簇り來りて其身を貫き、收容後數分を出てすして絶命せり、吁、忠實なる從卒は若し此際に於て從卒が大尉に代りて國に殉するなからん乎、先進中隊は劈頭其指揮官を失ひて敵情偵察の行動を全ふするを得ず、引いて我隊全部の不利を來すやも知る可からざりしに、只惜むらくは事咄嗟の間に起り而も戦況急を告げたるを以て、大尉と彼の從卒とをして八島の悲劇を繰回すの暇なかりしことと。

忠實なる從卒

二三

陣中某兵士の銃前詛語を彈するを臨みて(幕僚某)のふのこゝろをひくや詛語兵士

八一 沙河會戰後彼我の情態

捕虜の言押收書類並に敵の遺棄せし死傷等に依り判断すれば、沙河の會戰中我黒木軍の前面に來りし敵の主力は彼のスタルケルベルグの指揮せる東方軍にして、其本溪湖方面に來りたるものは西伯利亞第三軍團及ネカンブの騎兵師團等に於て合計歩騎砲兵約十一箇師團の優勢を以てしたるが如し。端なく此大會戰を惹起せし原因は、クロバト總帥がその連戦連敗に羞ぢ、一舉して遼陽を恢復せんと企てたるに出でしもの如く、而して敵は十月十日より五日間に亘れる我猛烈なる迎戰に依りて全線大損害を蒙りつゝ、全く當初の企圖を抛却して沙河右岸に退却し、尙若干の砲兵援護を塔山一帶に留めて渾河々孟迄繰引きに退却せんとしたるも、我行動が彼の沙河線によりて停止されたるを以て、敵は再び同河右岸に兵力を集結し、彼我共に沙河を隔て、爰に滯陣冬營し、以て翌年二月奉天大會戰を見るの素因を爲せり。此役我第一軍の死傷は將校以下約八千餘にして、敵の死傷は戰場に遺棄せられ

沙河會戰後彼我の狀態

二三



穴居の冬營  
二三四  
たる者のみにても尙五千五、六百を算せしより臆断せば少くも二万七、八千を下らざりしならん。

泰上(李夢陽)  
天設居府百二關。祁連更隔萬重山。  
不知誰放呼延入。昨夜楊河大戰還。

### 八二 穴居の冬營

十一月五月初めて雪ふる、積むこと寸餘、千里の江山一朝に化して白皚々たる銀世界となり、其景致の雄大莊嚴なる滿洲ならては到底見る能はざる處なり、去りながら此頃よりして小春日のいと長閑けき天候は忽ち一變して、遠かに凜々烈々たる隆冬の祁寒となり、且夕砂塵を捲いて殺到せる西伯利亞風は、彼の露兵の突貫よりも遙かに猛烈なりし。  
是よりして沙河を隔て、敵と對峙しつゝ、冬營せる我前哨線は、兼て掩壕内に設へられし土窖中に起臥し、かの鬚髯氷り、耳も鼻も掻き撈らるゝ如き寒威と戰

ひつゝ、晝夜警戒に懈りなく、殊に其最前哨に於ける深夜の歩哨の如き、靜默の上にも靜默を守り、一舉手一投足にも心を置かるゝ際にもありても、何分零下廿度を上下する寒氣の爲に足の爪先が凍冷けて疼痛を感ずること酷しきを以て、費えず知らず足踏み鳴らして敵に覺られ、不意に射撃を受くること度々なりし、又かゝる折こそ敵は得たり賢しとつけこみ、夜毎に各方面に小企圖の夜襲を試み、これが爲に我兵穴居の夢を破りて蹴起せしめたること前後其幾回なるを知らざりし。

防寒衣を贈り呉れたる人の好意にこたへて(藤井少將)  
よもすからどりてもる身にふる雪も  
あつきめくみに消えうせやせむ

### 八三 狂氣砲兵

沙河の冬の陣中、狄々山を守れる我某隊は一葦帶水唐家屯石山なる敵の砲兵陣地と相對峙し、日々相睥睨しつゝあり、狄々山の前麓に樹林あり、我士卒は薪炭

狂氣砲兵



露兵にも亦信義あり  
の料を得んが爲に日々敵眼を避けず往きて之を採伐す、敵の砲兵之を見て砲火連發彈丸雨下す、我將卒戯れに呼んで氣狂砲兵と稱せり、其我兵の片影を見て發射するや已に狂妄、其彈着や又狂妄而も其彈藥を節せざるに至りては狂妄更に驚くに堪へたり、冬期約四ヶ月間敵の費す處は實に莫大にして、之が爲我被りし損害に至りては某兵士の銃床に一彈子の擦過傷を負へるのみ、奉天會戰の初期我が兵彼の石山の陣地を一蹴して之を陥れし際、狂氣砲兵の跡を尋ねれば晚鴉樹梢に啼く邊、忠實なる木砲四門獨り其陣地を固守せるのみ。

八四 露兵にも亦信義あり

軍隊としての露兵原の遣り口は實に殘虐無道で、一點の同情をも寄することが出来ないのであるが、箇人としての露兵は那方かと云へば先づ罪のない方で、それに又渠等の働が往々愛嬌に富んでゐたことは這回の戰役に於て我々の屢屢實驗せる處であつた。禁衛隊の守備區域であつた馬園子山の前面なる彼沙河滯陣中のことであつた。

我の中間地に双方からも斥候を差遣す、毎日夜が明けはなれる頃に味方の斥候が出て往て而して夕刻には歸つて来る、夜になると又敵の斥候が交代して遣つて来る、其場所が丁度同じ地點である、然るにロスケは由來尻癖の長くない性質で、交代地點の芝の上と云はず樹の根と云はずソコ、一面に牛糞馬勃大的を垂れ散らすので、異臭常に紛々として、左なきだに潔癖の日本兵は不快で堪らぬ、ソコで或日我前哨隊長は戯れに英文を以て「互に任務上敵味方の間柄で此の地點に交代勤務するのであるが、何卒展望地に脱糞すること又は止めて貰ひ度い」云々の意味を認めて斥候の交代する際に其處に擱かした、スルト其翌日斥候が出た時には、不思議にも昨日まで黄金の山を成してゐた不潔の場所は奇麗に掃除せられて、一點の痕跡も認めなかつたさうであつた。又奉天會戰後、渾河の左岸なる四方臺に數千の捕虜を一時に收容して、食物其他の物品を渠等に分配した際にも一班毎に仲間同士の班長があつて、若し一つでも數量の多かつた時には、責任者たる例の班長は一々我掛り官の處に戻して来て、決して一人て猫婆を極めるようなことは做なつたには我當事者も少

露兵にも亦信義あり



狂歌の矢文  
からの同情を寄せたといふことだ。

### 八五 狂歌の矢文

「乃公の體軀は鐵より頑丈で、病氣などは對手の方から御免を蒙る」などと日頃余は無病息災を自慢してゐたのであつたが、滿洲吹雪に鼻風邪をひいたが原で、それに彼是する内に明治三十八年の光榮ある戦捷の新年を冬營中に迎へて、ちとつとさの三鞭酒を煽り過し、旁々腦を痛めて兩三日間炕の上に臥せつて加養せざるを得ざるの破目に陥つた、スルト皮肉家を以て有名なる例の霧峰居士が斯と聞くより冷評かし半分狂歌の矢文を放つた。

としの尾に廻らぬ首もふられけり

いくさの庭に鬼の棲まねば。

葛根湯ドール散ととりかへて

ふりだし玉へ唸るまにく。

蓋し霧峰居士の歌意たる、余が新年の歌作に、「爲缺爲花與美人、年來塞上不知

春、昨宵避得千通鬼、南岳今朝雪似銀」と戯れしと、又陣中除夜の宴に銘々隠し藝をやつたとき、余が醉餘義太夫を唸つて、張子の虎のようにさんく首を振つた歴史があるのを連想してもものせられたらしい、如何に病氣で打臥したりし際は云へ、戦ひを挑まれて敵に背を見せる程の卑怯者に非らざれば、早速枕邊なる硯を引寄せて。

借金で首も廻らぬ時なれば

飽男もふられこそすれ。

ドールか我首ながら知らねども

堂摺連のかなふものかは。

との返し矢をば射たりけり、冬營中には這様ツマラヌ戲事より外に樂みのなきを知るべし。

### 八六 渾河の神風

奉天附近の大會戦に敵は全然我術中に陥りて局面の全部利を失し、夜潜かに除

渾河の神風



渾河の神風  
を抜いて倉皇渾河以北に向て退却を企てたり、然るに我軍は隙さず主力を擧げて之を追撃し、三月十日敵に尾して渾河右岸に到れり、此日朝來南風稍強かりしが、午後に至り遽かに旋風と變じ、砂を揚げ土を飛ばし天地瞬間にして晦冥となり咫尺をだに辨ぜざるに至れり、我各軍團は之が爲に妨げられて敵情地形を辨識する能はざるのみならず、友軍の所在すら發見する能はざるを以て、指揮極めて困難なりしが、然も之が爲我兵力及運動をば隠蔽するを得たるのみならず、渾河右岸の高地よりする射界の標的となるを免れ得たるは至大の幸福なりき、殊に風位西南より來るを以て敵の爲に重ねく不利なるは言を俟たず、就中我左翼軍團(近衛隊)の如き第一旅團は渾河右岸の渡河攻撃に任じ、第二旅團に砲兵二箇中隊及工兵若干を附して追撃隊とし、第一旅團の攻撃功を奏するを待ちて直に河を渡り追撃を爲すの準備に在らしむ、時に風力愈々烈しく砂塵塵濛として彼我の砲撃全く無効となりし比、この好機に乗して一擧奮站の渡頭より攻撃隊を渡河せしめ、爰に初めて猛烈なる追撃戦に移り、敵中を横断し直ちに護山堡に楔狀突入を敢行し、以て空前の大捷を博したるは、是れ偏に我忠勇

なる將士の功に因るとはいへ、彼の天候の關係も亦我軍の行動に偶然利便を與へたるは蓋又幾ふ可からざるの事實なりしが如し。

八七 狙撃第十九聯隊の殲滅 (軍旗の鹵獲)

風塵に紛れ一擧渾河を涉り、敵中に楔狀突入を敢行せし我左翼師團其効を奏し敵は腹背敵を受けて大々的混亂を來し、右往左往に潰走せるの狀は恰も蜘蛛の子を散らすが如し、三月十日十一日の兩日に於て敵の大小部隊の力盡きて我に投降したるもの約二千を算せり。  
然るに十一日午後三窪方向なる我線に約一箇大隊以上の敵兵來襲す、待構へたる我歩兵の一部隊及び機關砲隊は展開しつゝ敵の近接を待てり、敵も亦滿を持し近距離まで一弾をも放たずして猛進し來りしに依り、我兩大隊は機關砲隊と協力し、全力を注ぎて射撃を集注せり、この射撃たるや蔽開地の近距離に兼て期待せし處なれば、其効力極めて大に殺傷頗る多く、流石に猛烈なりし敵の攻撃力も之が爲に甚しく挫折し、退いて後方墓地の周圍に在りし石垣及樹林の中

狙撃第十九聯隊の殲滅



狙撃第十九聯隊の編成  
に據る、我兩大隊はこの退却に尾行し直ちに突出して其圍壁に通る、然れども敵は猶頑強なる抵抗を持続し、隨て我死傷も亦尠からず、殊に我機關砲隊は過半の死傷を生じたりしも之を顧念するに遑なく、益々勇敢に歩兵と共に前進しつゝ、頗る有効なる射弾を送れり、而して我攻撃隊は殆んど敵の陣地を包圍しつゝ肉薄せり。  
是に於て乎敵も亦殊死防戦し、將校は刀を揮ひて先頭に立ちつゝ叱咤奮勵せしも奈何せん部下の兵卒は皆闘志を失ひ號令毫も行はれず、銃を圍壁外に投ずるもの、草を分けつゝ潜逃するもの續出し百計盡きて終に敵の主力は白旗を掲げて降を乞へり、此際敵は其有したりし狙撃第十九聯隊の軍旗をば全く之を燒却して後、投降せんとしたるも其目的を完全に達するを得ず、終に該軍旗は聯隊長の刀緒を縛せるまゝ旗頭旗桿及燒残りの金モールと共に我の鹵獲する處となりたり、當時の捕虜約七百にして、其餘は相前後して戦没し、これにて狙撃第十九聯隊はその軍旗と共に全く殲滅に飯せりと云ふ。  
此戦敵の抵抗非常に頑強にして昨今殆んど其比類を見ざりし程なりしは思ふに

其軍旗を有せると高級將校捕虜の内二大佐二中佐ありたりとの多數が指揮を取りしに因れるなるべし。  
此等敵兵は兼て我六師團の軍醫一名及第五師團の騎兵一名を捕虜としてゐたりしが、彼我酣戰中急遽脱出して我軍に來りしを以て、之が爲に敵情及軍旗埋匿の所在を審かにするを得たりと。

八八 轉禍爲福

奉天の會戰包圍全く熟し、我禁衛兵團は沙河の壘を蹴破して長驅敵中に楔入し、行く／＼敗敵を斬獲すること算なし。(前章參看三月十一日、我軍連日の長驅に行伍を共にする能はざる者下士を長とせるもの計十三名途に合して一團となり、氣を勵まし勇を鼓しつゝ本隊に追及せんことを勉む、然も徒らに焦心するのみにて一步は一步より重く疲脚蹣跚たり、辛して臺灣と云へる一小部落に達せり。

時に敵の一團あり、これ又連日の苦戦半ば戦闘力を失ひ、創を襲み、刀を杖に



敵將我懐爐灰に膽を潰す  
つぎつゝ重圍の中を脱し踏々跟々として臺灣に入り來れり、彼我の一團はハタ  
と行逢ひ相驚きつゝ互に謂へらく「正に是れ途を失して敵中に陥れるなり」と。  
咄嗟我引率下士は一團の麻兵に令して散開射撃を開始し忽ち敵の二名を斃せり、  
敵は最早應戰の勇氣もなく、てん手に手巾を振りつゝ降を乞ふもの將校以下二  
十餘名なりき。嗚呼この一擧の如き身を窮地に投じながら能く瞬間に禍を轉じ  
て福となす、素養ある我兵士にして始めて此奇功を奏するを得る也。

### 八九 敵將我懐爐灰に膽を潰す

攻撃防禦共に彼我互に術を盡し頑強迭に相譲らず、是に於て謀計の窮まる處奇  
想天外より來り、或は蕪人形となり或は木砲となる、時に水雷を空中に飛ばし  
時に十五圓知泥中に潜る、手抛彈は進んで抛射砲となり又迫撃砲となり、闘法  
愈々奇にして戰爭愈々慘を極む。

唐家屯の戰、敵の一大部隊は其後方より亂射せる砲火に鼓舞せられて驀然利到  
す、而して我が手榴彈、抛射砲、及迫撃砲は交々敵を惱まし、殺傷適當終に之

を撃退したり、翌日該陣地前に約束して彼我互ひに屍體を收容するに方り、敵  
の一將校獲きに我軍が突撃を決行せし敵の壘前の一角に我が恤兵懐爐灰の遺棄  
せるものあるを見、遽然眉を蹙めて絶叫しつゝ部下を顧みて相警むるもの、如  
し、我兵訝りて之を問へば、渠乃ち手真似口真似しつゝ答へて曰く「是れ威力  
猛烈なる日本爆藥なり」と。

### 九〇 陛下の萬歳を三唱して死す

近衛歩兵一等卒倉島角治なる者、平素沈黙寡言且つ職務に忠實なる上下一般の  
爲に敬愛せらる、三月一日姚千戸屯の夜襲に際し、傳令の任に服し、鼻を摘む  
が如き闇夜を辿りつゝ頗る敏活に動作し、以て中隊の行動を助けたることに實に  
尠少なざりし、戰漸く酣ならんとするや、敵の流彈の爲に頭部に致命的貫通  
銃創を受け、後方に收容せらるゝの已むを得ざるに至るも、渠は只管戰線を去  
るの遺憾を訴へて止まず、所屬隊長より創重くして復爲すべからざるを諭さる  
ゝに及び、撫然として假綳帶所に送らる。

陛下の萬歳を三唱して死す



姚千戸屯占領の翌日中隊長淺田大尉は間を得て渠を綱帶所に訪ひ之を慰めつゝ且告ぐるに「汝等忠勇なる兵士が協力奮闘の結果、頑強無比なりし姚千戸屯の敵陣も我隊の爲に占領するを得たり」云々を以てしたるに、瀕死の倉島は之を聴くよりムックと病床に起直りつゝ、天皇陛下萬歳々々々と三唱しつゝ、「中隊長殿實に満足であります」喜色満面に溢れければ、淺田大尉をはじめ、其傍に居并びたりし軍醫看護手等をして坐るに暗涙に咽ばしめ、互に顔を見合せつゝ、肅然として更に一語を發するものなかりしと云ふ、悼ましい哉這の良兵士は其後二日を経て終に去つて黄泉の客と成れり。

貴公子の双美

一三六

九一 貴公子の双美

(長岡護全、南部利禰兩氏の遺勳)

其身は華胄の裔に生れて軍人と爲り、征露の役起りて夙に偉勳を樹て而も共に共に名譽ある戦死を遂げ、人をして惋惜措く能はざらしむるもの我軍に二あり、其一を長岡騎兵少尉子爵長岡護全の嗣子と爲し、其二を南部騎兵中尉伯爵、

盛岡藩主と爲す。長岡少尉は彼の淺田支隊が分水嶺附近に於て敵を攻撃するに先ち、同支隊前衛の一部と共に半夜尤家堡を發し、非常なる困厄と危險とを冒しつゝ、厚地附近の敵情を偵察し、越て一日同支隊が分水嶺を占領するや、直に下士以下七騎を率ひ敵を追蹙して小孤山に向ふ時、約五百の敵と衝突し、直ちに之を撃退して同地を占領し、爾來屢々敵の脅迫を受けたるも少しも撓まず、克く偵察の目的を達して淺田支隊に多大の利便を與へたり。是より先少尉は韓國定州南門外の戦闘及鴨綠江河川偵察の際に於ても殊功あり、特に定州の戦に於ては身に銃傷を蒙り、人の休養を勸告するものあるも應ぜず、創を襲みて前進し、熱心に任務に服せしが、惜ひ哉遼陽戦の初期に於て禁衛師團の陣地にありて職務中、敵の砲彈に犯されて終に復た起つ能はざりし。南部中尉も亦韓國定州南門外の戦闘に際し、前衛小隊長として敵と徒歩戦を交へ、中隊長及古參小隊長の負傷するや、代りて中隊を指揮し、敵を撃退し、又鴨綠江畔の敵情搜索に任せし時、敵の射彈の爲に其馬匹を傷けられ、進退意の如くならざるにも屈せず、克く義州より昌城方面に渡れる敵情を偵察し、彼の

貴公子の双美

一三七



新衣川 一三八  
淺田支隊が分水嶺を攻撃せる際にも長岡少尉と同じく勇敢に戦闘し、敵を追撃して其第二陣地を奪取せり、尙奉天附近の會戦に於ては彼の難攻不落と稱せられたる井口嶺攻撃に際し徒歩險を攀ぢ曉霧に乗じて先頭第一敵の陣地に突入し、其身は敵の鋒鏑に斃れたるも、我軍をして遂に克く占領の目的を達せしめたり。要するに右二公子の如きは眞に我皇室の藩屏たるに愧ぢざるの人と謂つ可し。

死別 離(方維儀)  
昔聞生別離。不甞死別離。無論生與死。  
我身當之。北風吹枯桑。日夜爲我悲。  
上視滄溟天。下無黃口兒。人生不如死。  
父母泣相持。黃鳥各東西。秋草亦萎萎。  
予生何所爲。死亦何所辭。白日有如此。  
我心徒自知。

九二 新衣川

奉天會戰の初に方り、島村少將の率ゆる我中央隊が、將に長北山東方の凸角高

地なる敵壘に突撃せんとするや、某野戰砲兵聯隊の一部は攻撃援助の目的を以て猛烈なる砲火を敵に加へ、敵の砲兵陣地よりも亦二十餘門の砲を擧げ、三面より我に對て砲火を集注せしを以て我苦戰せること一方ならず、爲に我戰闘員の過半を失ひ、材料の毀損も亦隨て夥しかりし、砲兵中隊長白石大尉七郎は其間に立ち、恰も猛虎の罠を負ふが如く、叱咤鼓勵應戰頗る勇む、忽ち一榴彈あり大尉の身邊を掠めて其後方に炸裂し、轟然として爆煙天に漲る、煙漸く散するに及び、一撃の下に粉齏されたと思ひの外、大尉は依然として双眼鏡を手にせる儘、直立不動の姿勢にあり、但し頸以上は飛び去つて痕なく、只軍帽の近く其身邊に落下せるを見るのみ、其戰死の狀の壯烈なる、その昔衣川に七ツ道具を斃したるまゝ、立往生を遂げし武蔵坊辨慶の武勇も斯やと思合されて殊更に哀を催したり。

衣川さいづちばかり流れけり (よみ人しらす)



敵の咽喉に喰ひついて死す。潔癖と不潔

一四〇

### 九三 敵の咽喉に喰ひついて死す

葛布街附近の戦場に際し、同街東北の高地を守備せし新發田聯隊は、優勢なる敵の急襲を受け第〇中隊の第二小隊防戦最も努め死傷相踵ぐ、時に伍長鹿島峰作も亦足部に銃創を蒙るも屈せずして、益々奮闘中、敵の一將校白刃を揮ひつゝ、驀然に我陣地に跳り入り以て伍長に逼る、咄嗟の間伍長は之を射撃するに暇あらず、是に於て乎銃を棄て大手を擴げて雲突く許の當の敵に組みつき、終に振り伏せ銃剣を抜いて之を刺す、其一刹那不幸にも敵の一弾來て伍長の面部に命中し將に昏倒せんとす、伍長は「ア、失敗た、残念!!!」と一聲叫ぶや否や、突如に敵將の咽喉笛に喰ひつきたるまゝ、彼我共に悲壯なる最後を遂げたり。

### 九四 潔癖と不潔

我軍が出征以來已に一年有半、其間土人に對しては秋毫も犯す處なきのみならず、軍隊の各部落に宿營するや到る處土民と雜居し、兵士と土人とは忽ちにし

潔癖と不潔

一四一

て相親み、我彼を愛し彼も亦我に服して之が用を爲すを樂み、最初は男子のみ我に昵近せるも我に他意なきを知るや、女子も亦歸來して縫物洗濯などの手傳ひを爲すに至れり、加之ならず糞土塵埃に埋れて臭氣紛々たる部落も、一朝日本兵の舍營するに違へば忽ち面目を一新して清淨潔白の巷區と化するに至り、流石に無頓着なる土民をして敬服の念を高めしめたるのみならず、從軍外國武官及外國通信員等は皆我軍の紀律此の如く嚴肅にして且衛生法の斯迄周到なるを見て嘆賞措かざるは事實なり。

それにつけても東等外國人間に於ける觀察の可笑は、我兵士が一體に土人の婦女子を犯さざるの一事なり、渠等は古來の戰役に徴し、如何に號令嚴明の軍隊と雖、兵士の和姦若しくは強姦の聲を耳にせざるはなきに獨り日本軍隊のみがこれに漏るゝの理なし。と頻に不審を抱きつゝ内々これが調査に熱心せるものさへあり、茲に某外國武官が自己の觀察として眞面目に語る處を聞くに「世界で第一等の清潔家は日本人であつて、尤も不潔なるは恐らく支那民族であるのだから、日本兵士の支那民族を犯さざるは強ち彼の軍紀嚴肅の爲のみでなく、



鴨綠江紀念祭  
一四二  
潔癖が不潔を嫌ふのが一大原因をなして居るのであらう」とは評の當否はさて  
措き、兎も角奇警なる觀察と謂つ可し。

奉天會戰後土民塔に安んずるさまを見て(小樽)  
荒鷲も影をひそめて塞上の  
日うちらゝかに羊れむれり。

九五 鴨綠江紀念祭

奉天附近の會戰に大捷を博してより、我軍は一時銳を鐵嶺縣下の飄起屯と  
云へる部落に養ふてゐた、恰も五月一日我軍が鴨綠江陸軍最初の會戰に光  
榮ある捷利を博せし一週年を此處に迎へて、頗る盛大なる紀念祭を執行し  
以て我戰死將卒諸士の靈を慰めたのであつた、余は特に茲に外國通信員フ  
レデリック、バーマー(米國ハーバーウキークリー記者)が興味ある通信を  
摘載して外客の眼に映せる紀念祭の概況を報することとする。  
黒木軍が鴨綠江の戰捷を祝する爲に盡力したのは大したものだ、丁度戰爭に勝

つ爲に盡力したのと同じ位だらう。  
軍參謀長藤井少將始め幕僚諸氏は、幾多の戰に露軍を敗北せしめし時と同じ熱  
心を以てこの祭典を計畫されたのである。  
戰爭に従事して居る日本兵は、容易に故郷に還れないのだから滿洲に日本をも  
つて來た、殆んど一年以上戰地に居る黒木の全軍は全くこの祭典に忙殺されて、  
まるで沙土許りの小丘や谷間を、今頃の春の時候の本國らしく翠滴るばかりの  
公園に仕上げた、譬へばホドソン河の東岸なるフリーリー、タオンからハーレム  
迄をワイミングの田舎に見立てた様なものだ。  
鯉の漣上り! 勿論寓意なので、これは丁度我々が小學時代で教わつたロバート  
ブルースと蜘蛛の話のようなものだ、今某部隊が其飾物の擔任を果す爲にこの  
鯉の漣上りを作り上げた、これは高い丘の斜面に造つたので、一哩もある處か  
ら松の枝を運つて來て漣の岩石に繕ろひ上げ、そして白泡立つた急流は白布で拵  
へた、ソレが長さ七十五呎の激湍たる大魚の上に流れかゝつてゐる、一哩ばか  
りの遠距離からこれを眺めると實に立派で、丸て實物の様に見える。



黒木軍百話

鴨綠江紀念祭  
一四四  
次の山には大蟻始が居る、蟻の長さが五十尺で其巨大なる眼は食物の罐を打伸ばして造つた、其山に對せる一方の岡には大獅子がゐる、鼻の穴は幅が十五呎位、藤で作つて其鼻の隆起部は兵士の赤毛布であつた、是は日本獅子が今猛威を示して居るところなのである、其蟻は岡の斷崖の上に常盤木で作られて、尙五百ヤードも後の方に同じく常盤木で鞭の如き尻尾が出来てゐる。  
若緑の松の木や櫻の木が豫定通りに新に植えられた、其間には小徑を通じて處々に園亭が設けられた、一方の緩斜面は平にせられて祭壇に通ずる道路となつてゐた、その對面の丘に銅像に擬したる黒木將軍の馬上像があつて、其下の藤棚を越えて祭壇を見下ろしてゐる、祭壇からは二條の大道路が開かれた、丁寧にも水ハケ溝渠まで出来てゐる、マルデこれから幾代久しく此處で住居するかの如く出来てゐて、一日の娛樂の爲とは迎も受取れない。  
道路の一ツは司令部の在る村の方に通ずるので、その路上には欄干ツキの橋や巨大なる常盤木の縁門や、支那の藤で造つて其上を白布で巻いた日本式の大鳥居などがあつた、ソシて道の兩側には松や櫻の並木が植えられ、其間々には兵士

瓢起屯滯陣中

中の技術家が作つた見せ物が色々と排置されてある。  
茫々漠々たる高梁畑のハテもなき切株が、宛がら沙漠の砂畝の様に見える平原の上に、日本國中到る處にあるような小さな花園が出来た、箱庭的の景色の中に沼湖の模様が巧に設けられて模造の燕子花が咲いてゐる、兵士が暇の時分に巴里の店の小女に劣らぬ熟練でもつて作り上げられた幾千の造花は、お祭りの前夜に大籠の中に入れられたまゝ運ばれて来て、植木の枝に結び付けられ、極目梅や櫻の花盛りと化つてゐる。この常勝軍の兵士が花を造るのは戦争をするのと同様でツケもないが、これは蒸汽機關の中に住慣た西洋人の頭ては一寸理解しにくく。  
日本を旅行する外人等はこの玩具の國が最も立派で且堅忍なる戦士の國であるかに驚くが、今此處に来て見れば四時間も五時間もチャンと座り込んで造花の癖を弄つて居る様な兵が、忽ちにして古風な角力をやつて勝負を争ふに驚くであらう。

鴨綠江紀念祭

祭壇は四角に削つた白木の標木が建てられて、單純なる神道式の招魂祭典例に



據て、永く従軍してゐる我々は目慣れて居るのだが、これ迄これ程巧妙な式は見なかつた。

鴨綠江紀念祭

一日も往復の出来る地に居る部隊は大概集合した、白髪の神官白紙の幣を揮てマ、ガツミを擡つて、而して其部下の神官と共に供物を清めた、將校は階級順序に祭壇に上り常盤木の小枝を捧げた、此軍が陸軍第一に捷利を獲てから、摩天嶺、様子嶺、遼陽、沙河、奉天に連戦して、初めの兵員の四分の三は死傷したろう。げふびては此缺員は皆補充されて居るが、今全軍の兵士がこの白木の標木に對して果して如何なる威があつたであらうか。眞ッ先に莊嚴なる祭の儀式が濟むと直ぐ、待に待つて居た餘興隊が繰出した。眞ッ先に進み出てたるは騎馬武者の一隊でビスケットの罐を鎧の袖にして居る、光彩陸離として風采の凜乎たるその昔十字軍に赴いた歐洲兵と雖迎も及ばぬ、現今世界の美術界に行渡つて居る日本の古畫にある通り、これ等の武士は東長の太刀を帯び、鍔形の兜を猪首に着なしてゐる。黒木軍は元來素朴な軍であつて、其將校は幾度勝ても益も高慢な風をせぬ、沈

歐將軍たる黒木司令官も一度は這樣な演劇的の裝束を着てサムライの學校で養成されたさうである。

將軍は今時甲冑武士の行列を見られては、本國らしいとは思はれなかつたらうが、その昔ソツクリの角力や演劇を見られては流石に故郷に居るその威が惹かれてあらふ、一朝一夕では伽談や英雄傳や、藝術の趣味若くは方式を一新することは難かしい。この軍は歐洲風の服裝で歐洲風の戰鬥をするが、樂む時は全く日本固有の風である。

武士行列の背後からは色々の練物が繰り出された、それ等の人物は孰れも意味がある武士や、供の衆のや、學者や、巡禮や、坊主や、職人や、人足や百姓共に化りすまして、頭を剃こぼつたり、チヨン鬚を附けたりしてゐる、又白粉をこてくと塗て華美な着物を着た處女やケイシヤの態度を倣てゐたのも難つてゐたが、その歩調は矢張り兵隊的で、例の駒下駄の刻み足らしくなかつた。其外に支那婦人もあり、西洋婦人もあつた、ミスジョンと呼ばれた一人は赤の衣裳に白の袴を穿てゐたのが一番女らしかつた。

鴨綠江紀念祭



一際吾々の目にたつたのは、高帽を被つてフロックコートを着て而も鼻眼鏡までかけてステッキを手にして、目つきから口元、髪の毛まで西洋人らしかつたのであつた、併しこの紳士も自分の躍の組に加入せぬ程には威厳を保ち得なかつた。食事は松林の中で長い木の卓子の上で開かれた、日本流の御馳走が澤山あつた、而して其周囲には様々の屋臺店があつた。

又一方には郵便局があつて、ソコに往けば誰でも紀念書葉書を貰つて直くと發送することが出来る、これは頗る繁忙であつたらしい、日本兵は有名な手紙かきてこの小さい紙片に我々にはサンスクリットよりモツと解し難い文字が記されて自宅や友人の處へ飛んで往つて筆者の安全を知らせるのである。

予がこの戦争の影響を切に感ぜしめたのは、トアル庭園の一隅であつた、これは父たり良夫たるものに目慣れた光景である、ソコには苗を植えてゐる日本婦人の人形があつて、ソノ後方には農夫が今や一日の勞働を了へて家に還ると小供が家の中から迎に出たのでその手を曳いて居る。

日本人の考によると、天子様がこの樂園を我々に下された、我々が安穩に土地

を耕し、收穫が能る幸福を保たるは昔天子様のお蔭であるから、その御恩返しに天子様の爲に喜んで死なねばならぬ。又自分の子孫を繼續させる爲にも死なねばならぬといふのである。

漣を作り、紙花を造る、その熟練!!! 足らぬ材料を巧みに使ひこなすその機智の裏面には、燃るが如き忠勇の念が潜んでゐて、明日にも敵前に出て大膽不敵の偵察もすれば又慄然するよゝな夜襲をも決行するのである。

「いくら幸福な國土でも死ぬ者に何になる？」と理屈屋はいふかも知れぬ、予はこの疑問に對して只一言を答へん「ソナ考ては戦に勝てぬ、後世の子孫の爲に本國を神聖に永久に保存することは出来ぬ」と。

### 九六 黒木大將の紀念祭文

鴨綠江紀念祭の當日黒木將軍が祭壇に起ちて朗讀せられたる祭文は左の如し。

明治三十八年五月一日第一軍司令官男爵黒木爲楨謹みて第一軍戦士諸士の靈に告ぐ。



黒木大將の記念祭文

一五〇

惟ふに我軍が帝國陸軍の先頭として初て韓國に入り次て滿洲の野に轉戦し  
毎戦捷利を博せし所以のもの畢竟我忠烈なる諸士が率先國に殉じ以て我軍  
人の本領を發揮したるに歸因せずんばある可からず嗚呼諸士一たび死して  
全軍の志氣爲めに振ふ其遺績は長く以て後人の模範と爲すべし今や幽明其  
處を異にし諸士の英風復望むべからず生者をして轉た惋惜の情に禁まざら  
しむるものあり今茲に全軍の將士相會し清酌庶羞の奠を以て恭しく諸士の  
懿靈を祀る

英魂其れ髣髴として來り響けよ。

同日又彼の鴨綠紅畔摺鉢山に建てられたる紀念碑の除幕式を行ひたるを以て、  
我司令官は別に左の祭文を送りて吊祭の意を表せられたり。

鴨綠江會戦に於ける戦死將卒諸士の建碑新に成り茲に本日をとし其祭儀を  
舉ぐるに際し爲慎謹みて諸士在天の靈に告ぐ。

回顧すれば鴨綠江會戦以來正に一週年此間我軍は數回の激戦に多大の効果を  
を收め一戦を経る毎に士氣益旺盛を加ふる所以のもの蓋忠勇絶倫なる諸士

が日本武士の本領を發揮し率先國に殉じ以て最初に軍人の龜鑑を垂れたる  
に歸せずんばある可からず嗚呼諸士の死や痛むべく且惜むべしと雖其赫々  
たる遺勳は彼の鳳山鴨水の美と偕に千古に亘りて長へに史上を照すなる可  
し諸士亦以て瞑すべき乎尙くは此微忱を鑒みよ。

邊地春遊 (小體)

邊地春遊 採未備。東風只存濕黃埃。

荒涼豈獨戰餘景。三月銀州不見梅。

右大韻 (鐵嶺知縣進士趙臣撰)

百戰軍威馬上催。征袍一洗萬塵埃。

請看到處登樂集。解渴何須更望梅。

九七 慰問袋の滑稽

吾同胞四千萬の眞心を籠めし慰問袋は、出征以來數回各兵士間に分配され、其  
都度少からぬ趣味を以て迎へられた。就中婦人の名義で贈られた分の歡迎せら  
るゝこと夥し、幾多の袋の中で女の艶かしい手蹟に當籤した兵士共は宛がら

慰問袋の滑稽

一五一



鬼の首でも取つたかの様に恐悦がつて、熱心なる感謝状を出す、先方からも返事か来る、時々新聞を送つて来るなど、云ふ寸法で、見ず知らず他人同士で茲に精神的交際が成立する、中に運の良い兵士は随分世間に名の通つた良家の夫人や令嬢からの芳信に接した例がないでもなかつた。

軍司令部管理部附某兵士が丁度この手合で、頗るうるはしい婦人の手蹟で姓名の記るされた慰問袋を貰つた際であつた、早速例の禮狀を差出して、例の如く窺つたる美人から丁寧なる返信の来るのを楽しみに待つてゐた、程程果して一封の手紙が着いた、而も見覚えある女の手蹟で、某兵士は手の舞足の踏む處を知らず、取間違ひと開封したところが意外千萬にも、

老の手すさびはからずも御目にとまり、まことに御丁寧なる御ふみにあづかり一しほはぢ入申あり、婆ことも今年六十路の坂をこえ、杖とも柱ともたのみ居候一人の伴が貴君様同様戦地に従軍いたし居候まゝ、若し〇〇隊〇〇〇と申すもの御尋ねいたし候得ばあん心安く御つき合のほど婆より、前以てねぎ上り、先は御返事まで、

あらくし

九八 我乗馬と共に上官の危急を救ふ

某兵士讀み了りて歎ずらく「開けて口惜しき玉手箱たア這の事だんべえ」

騎兵第〇〇聯隊附中村少尉正孝は、奉天戦後彼の鐵嶺開原の境上なる孤榆樹方面の敵狀を搜索せんが爲、二名の部下を隨へ挺身して先づ修家溝西方高地の樹林中を偵察中、同處に埋伏せる敵の歩兵約五六十の包圍射撃を受け、我一名の騎卒は其乗馬と共に先づ負傷し、次て他の一名は其乗馬を傷けられ、間もなく又少尉の乗馬は腹部を射られて即死し、其身も亦重傷を負ひたり。

當時稍其後方に位置せし我斥候隊の主力は、急を見て直ちに赴援せんとしたるも、地形に妨げられて運動意の如くなる能はず、兎角する内に敵は已に其側背に現はれて我退路を斷ち少尉を捕獲せんとし間髪を容れざるの危殆に瀕せり、時に斥候隊の主力中に一等卒天野元造なるものあり、嶮を冒し彈雨の下を潜りつゝ後方より疾驅し來ると見えしが、急に馬を下りて之を少尉に供す、然れど

我乗馬と共に上官の危急を救ふ



も少尉は傷重く出血劇しくして容易に乗る能はず、敵は益々接近し來りて射撃せるが故に、天野の乗馬は敵彈を蒙りてこれ亦逃走し少尉も更に一彈を受け益進退の自由を失せり、是に於て天野は少尉を負ひ地隙の間を疾走して下ること約百米突許、漸く難を其附近の家屋内に避けて主力斥候隊の救援を待てり、偶偶囊きに逸走せし天野の馬も亦我主を慕ふて其處に歸來す、乃ち少尉を扶けて之に乗らしめ、辛ふして安全なる地點に迄逃げ延ぶるを得たり

鹿子狩

一五四

九九 鹿子狩

軍は五月一日の紀念祭を終ると直ぐ、彼の渾河の左岸を距こと程遠からぬ驪起屯の宿營を撤し、清河の右岸に近き會家屯てふ開原の東約八清里の地點に前進した。この地方一帶は山間の谷地であつて、樹木鬱蒼たる峰巒重疊し、其脈は遠く吉林省に亘り、更に東に折れて長白山脈に連続してゐて、道路の險惡なる代りに山紫水明の風致に富んでゐる。

此處等邊から彼の捕鹿地方一帶の地は古來清朝の獵場であつて野兎雉子の類は申すに及ばず、鹿子と稱する鹿族の動物が夥しく繁殖してゐて、土人は秋の末から翌年の春にかけて、其の皮や肉を獲べく、大概獵師を業としてゐる。會家屯に着たのは丁度五月の初旬で邊塞の春漸く到り恰も梨花爛熳たる好季節であつて、野となく山となく一望清麗に滿されてゐて、雲か雪かと疑ふばかりの美觀は逆も内地では見ることの出来ない絶景であつたので、一日の清遊を試むべく或日羅家堡子と云へる我宿營地から程遠からぬ片山里の例の鹿子狩りを催した、實は黒木閣下の内意を享て予が豫じめ偵察せし結果なので。

さて愈々其日が來ると、兼て案内知つたる土着の獵師勢子共を適當の場所に引率して、閣下及殿下の一行を待合すべく予は未明から起き出て、自用の蒙古馬に鞭ちつゝ豫定の陣地向ふた、スルト不意の出來事の爲に危なく其日の催を廢止にするところであつた、其譯はこうなので、

羅家堡子の部落には兩三日以前から道路修繕の爲に若干の工兵隊が宿營してゐ

鹿子狩

一五五